アラン

精神と情熱とに関する八十一章（下）

高村昌憲訳

アラン

精神と情熱とに関する八十一章
（下）

高村 昌憲 訳

第四部　行為について

第一章　判断について

　蝋が刻印を受ける様に、精神が真理を受けるという見方を、読者は恐らく軽蔑するのでしょうが、その誤りを直すためにもそれは大変に容易な見方です。しかしながらその見方は殆ど全ての書物や、学びながら十分に考えなかった精神を持った全ての人々を支配しています。その誤りは、子供の精神が自然の儘の歩みによって形成されるという大変な間違いを十分に考慮しなかった初等教育にあります。最も堅固な判断が自ら試みようとすると、非の打ち所の無い証拠で身動きが出来なくなり、より正確に言うことも不可能になって、形式さえも変えられないまでになります。打ちひしがれた儘の精神は、この強力な足場に代わって、独りで学んだ人々の裡にも見えます。しかし前者の人々は事物の困難と情熱の力のよってもがきます。申し分なく学ぶために時間的余裕をもって勉強しますけれども、何でも知るためには狂った様な野心に悩まない人々は最も幸福です。その様な人々は自然に考察しますし、これ以上正しい精神の動きはありませんし、他人の証明は分別が無いのと同じです。彼らは他人の証明を十分に知っていますし、前置きの時にそれを見抜きます。当事者たちの話に悩ませられたり、聞いて理解もする彼らは、それらの話を結び付けずに証明の商売人が隙を窺って見ていても、断固とした注意力で筋を通す術を知っています。創造者がいなければ、この世のあらゆる要素が生まれて来ても混沌に再び陥ります。何時も相手が与えるものには、慎重で手には取らない闘士たちに似ています。証明の監獄の中では熟考しても間違えます。他の者たちは間違えた証明を恐れるのですが、彼らは真実を恐れます。遊びの王様です。

　人々は望んでいる時には判断しません。望んでいるかどうか以外は判断しないのです。如何にして諸証明に反対することが出来るのかと無邪気な人々は自問しますが、最早容易なことではありません。証明とか反論には私の同意がかなり不足しています。それらには私の生命と武器を与えなければなりません。安易な同意はその点で私たちを騙します。私としては既知の証明で、その全体をそっくり受入れてその儘書き写したりしたもので、私が正確な科学上の証明というものでも私の眼前では死体と同じであるのを屢々観察します。私はそれが正しいことを知っていますが、決して私に証明していないのです。私がそれを生き返らせるのは大仕事になります。私が投げやりになればなる程、自分のものにならなくなります。しかし、生き返る度毎に新しくなります。その度に純真です。もしもあなたがそうでないなら、先生としてのプラトンの本を読んで下さい。

　証明は人間のなせる業です。宇宙は少なくともあるが儘のものです。よろしい。しかし、宇宙はあるが儘の様に姿を現しません。両目を開けて下さい。誤りの世界が目に入って来ます。ここではあらゆるものが立て直されるのを望んでいます。経験は、最大の誤りを大変苦労して直すだけです。数々の事物が最早毒にも薬にもならなくなると、それらを無視するのは大変に容易です。星々は東から西へ回っている、と言うのを聞いて或る文学者はびっくりしました。彼は言いました、「もしも星々が回っていたなら、そんなことは分かるでしょう」。しかし、星々が回っているのを見ることは取るに足りないことです。惑星の運動はその上、隠れていて見えません。私たちの情熱も記憶も夢も又、この画面を混乱させます。誤りや信仰の多様性は、誤りが私たちには自然な状態であり、誤りは寧ろ混乱であり支離滅裂であり思想の変わり易さでもあることを思

い出せば十分です。そこからは先ず拒否と懐疑と、期待になる或る命令によって投げ出すしかありません。「お互いに決して自然には先行しない事物の間に秩序を仮定しながら」。デカルトはこの様に語ります。

　どの様な信仰の説教者たちでも、これらの秩序を良く理解していましたが、他にも色々な例があります。美徳とか人格の完成が問題になると彼らは少し考えますが、それらはまさに存在しないし、望まなければ決して考えられないし、もっと正確に言うと経験が教えるものに反対しなければ、決して考えられないものであると直ぐに理解しました。従って彼らは、熱意のある者が証明を助けるに違いなく、神はそれを祈る人々にしか姿を現さないと良く言います。しかし説教者は、神がこの世に合わせて存在することを望んでいても何時も隠れていて、外部の諸結果から神を発見するだけです。しかしながら人間たちの間に正義は存在しないで、作り出さなければならないのは余りに明白です。そして極めて普通に正義と出会った時に、判断という言葉が持つ二重の意味は、私たちが読む術を知っていれば十分に私たちに教えるものであるのが分かります。正義が存在せず、作り出さねばならないという二つの意味と大変に良く結びついているこの三番目の意味は、人間たちのどの様な奥深い処から出て来るのでしょうか。それに従って判断とは、諸証明が強制するのを決して期待しない素早い判断です。それは人が見抜くこと、未知であること、人間が人間に負っているが恐怖は無いことを斟酌しながら、自己のために危険を冒しながら、果敢な命令によって輪郭を完成して閉じ込めるものです。それらは瞬間の神々です。（完）

第二章　本能について

　動物の本能は身体的問題しか提出しません。実のところ細部においては非常に困難ですが、原理に関しては大変に単純です。少なくとも筋肉として原動力の要素を考えなくてはなりませんが、その中で栄養が摂られると細部では熱に変化し、主要な部分では運動に変化する拡散された爆発の様なことが起こります。この運動は紡錘形から球形への変化であり、収縮と呼ばれる変化でもあります。爆発的な分解の内部のメカニズムを知らなくても、熱や運動になるエネルギーは化学者が見れば、栄養を与えられている筋肉の要素と食物が表す蓄積された労働から決してはみ出ないことはそれ以前にも書けることです。このエネルギー放出の機会は、直接的な部分からの刺激にしろ、化学的反応の流れや細長い筋の時にしろ、神経に沿って伝えられることを意味する様なものです。動物は動物自身が発動機の様に考えられていて、最も完全な生物の裡では関節のある骨格の内側も外側も作られています。その骨格に沿って伸筋と屈筋が結び付いています。そして神経は発動するあらゆる部位の間を従属する色々な中枢によって、ついには脳という一つの主要な中枢によって連絡しています。詳細は極めて複雑です。この素描を完全なものにするためには、外部からの作用が弱い器官よりも、もっと敏感な部位である感覚器官を付け加えましょう。

　もしも伝言を受取って運動を指示する筋肉へ送り届ける主要な中枢に操縦者が住み着いているという観念とか組織的方法を用心して今でも捉えられていないなら、大変に複雑で大きな多様性を持つ運動になるかも知れない爆発発動機が残っているだけです。これらの運動は、関節で繋がれた骨格や、重力の働きや、敵対関係にある筋肉の力によって制限されます。そして、その力自体は各部位の運動そのものによって直前の労働と、廃物の除去と、興奮するのと同様に除去もする通常の栄養に支配されます。或る一点の興奮は直ぐに至る所へ伝達されませんし強くもならないと言わなければなりません。それは神経の走向進路と、恐らく送信器の要素によって既に直前に与えられた仕事に支配されています。これは仮定であり検討すべきものですが、どんな興奮も沢山の通路を通ってあらゆる感覚において輝き出すと仮定するのは自然なことです。ダーウィンが指摘した様に、もしも最初の目覚めが先ず、最も軽くて自由な部位である耳とか尾っぽを動かすことに気付けば、大変良くご存じの様に、それは動物が常に全てを収縮して行動するからです。そして、これらの最初の運動はそれに続くもののしるしになります。例えば馬が頭を低く下げることが出来なければ後ろ脚で蹴ることはない様に、動物が興奮してもそのために何でも構わずに運動を行う訳でないのは明白です。爆発は、最も抵抗の少ない戦線に、更に測定するのが非常に難しい戦線に応じて現れることになります。動物の行為が、その形態とか態度とか周りの抵抗する対象に依存していると仮定するなら、既にその問題も限定されて来ることに少なくとも気付いて下さい。牡蠣は殆ど一つの運動しか行いません。リスは牡蠣と同じ様な合成されたものですが、より多くの運動を行います。蟻地獄は両者の中間にあって、穴の底で殆ど頭を突然に動かすことしか行いません。それは悪賢い狩猟家が外見を示しており、重力が蟻地獄のために働いているのです。

　人間の身体の構造も、猿とかリスの構造とそれ程多く異なっているものではありません。そして本能の反応も、身体におけるその形態とか能力とか態度とか数々の障害によっても生じます。

しかし人間は思考します。人間は自分の身体とその運動を知覚しますが、それらの運動そのものや対象の行動から生じる喜びや苦悩を斟酌しないで、多少なりとも明瞭であればどんなに小さくても知覚します。以上が私たちの最初の思想であり、変わらない思想です。これらの生命の動顫や戦慄や運動は、私たちのあらゆる探究において一緒であり、絶えず私たちをそこから逸らせます。全世界は、いわば私たちの上に折りたたみますが、結局のところ知覚された私たちの運動と動顫と戦慄とを最早一緒に区別されないためです。その様にして嵐は、最初は戸外の光景ですが、次にはドアの処に迫り、ついには私たちの裡の嵐になります。しかし、それは少なくとも筋肉の嵐で、戦慄、恐怖、無我夢中の逃走、転倒、手仕事の頑張り、咳、吐き気、叫びになります。情熱も無い冷静な証人にとっては、その人間は前にも語った様に、自ら発動する動物機械でしかありません。

その意味では、直感的で本能的な思想があります。あるいはもっと正確に言うと、本能の方へ再び降下して、次にそこから逃れて再び上昇するとか、休息するとか、あるいは身を投じる思想があります。ここで私たちは情熱に触れるのですが、それらの見方に倣って今まで述べたことよりも更にたっぷり述べる様になるでしょう。ここでは何時もの栄養、呼吸、排泄、目前の安泰を保証する一連の機械的な行為を大雑把に描けば十分です。こういうことを通してご存知の様に、私たちは世界や身体のメカニズムそのものを考えるに至りましたが、妄想とか眠りになる如何なる思い出も残らない全ての事物が混乱するまでの黄昏時の混沌に何時も陥りました。それに倣って動物の思考という、一種の神話を遊び半分に作り出そうとしても妨げるものは何もありません。尤も、それは戯れに過ぎません。何故なら、その思考はまさに情熱や感情の下に限定しなければならないからです。判断力と幾何学による秩序があるからこそ、無秩序が姿を現すのです。そして思索家のいない思想とは、結局のところ何の意味があるのでしょうか。（完）

第三章　宿命論について

宿命論とは、この世で起こることはどんなことでも書かれたり予言されると信じる精神状態のことです。私たちがそれを知った時には、努力してもその予言を忘れないでしょうし、反対に思いがけなくも回り道をしても、それを実現させるでしょう。この教義は屢々神学的に表され、未来は大変に先見の明がある神から隠れることが出来ません。この見事な結論が神を直ぐ様、鎖に繋ぐのは本当です。神の力は、神の先見の明に対して抗議します。しかし、私たちはこれらの言葉の遊戯を裁きました。言葉は何らかの信仰を設けるどころか、既に固い信仰の対象となっているものや、言語上よりももっと良く設けられたものを、外見上の議論とする理由のことしか前提にしていません。宿命論は神学に由来しません。寧ろ、神学を生んでいると私は言いたいと思います。素朴な多神論によれば、宿命は神々の上にあります。

非常に良く間違って理解される救霊予定説の教義は、大変に自然で一般的で不幸なこの信仰の源泉に近づきます。といのも、彼らは救霊予定説によって正しい人になろうとする罪人に神が罠を仕掛けようとするとは理解しないからです。反対に、外的状況や神の恩寵や奇跡でさえも何であろうと、性格の内奥のものは決して変わらず、気に入っている悪徳そのもので美徳の実践を台無しにすると理解するからです。例えば、根っからの嘘つきは最善の場合には国家の利益のための嘘つきになるとか、あるいは恐らく詩人になるとか、人々から尊敬される人になるとかしても、審判者の前では常に同一の人間です。この恐るべき教義は罪悪や悔悟や贖罪の観察の中にさえも十分な証拠を見出します。しかしながら仮定された性格は既に抽象的な偶像であり、弁証法的な心理学にかなり似合っています。幸いにも人々は、普通の宗教が見分けた様に、自分の内奥よりも行動に多く依存しています。だが、これらの刑の宣告に危険を見ないのは誰でしょうか。これらは既に殆どが呪いです。子供は、大人でさも自分の誤りには、余りに宿命を読もうとする気になるだけでした。もしも審判者の権威が更に付け加われば、実際に人々は自分自身に絶望するでしょうし、彼らは自分がそんな人間でありその儘に信じられている様に激しく姿を現します。私たちはここで情熱の最も隠されたものに触れるのです。

もしも易者や女魔法使いの予言が外部の意識の無いものの原因に因るのであるなら、偶然からにしろ、数々のしるしがより進んだ認識の結果からにしろ、それらのしるしがより一層良く見分けられる感覚の鋭敏さからにしろ、確証を見出すことが出来ます。その点については、殆ど全ての予言が忘れられていると言わなければなりません。それらの予言を思い出すのは、時々当たっている時だけです。しかし予言者たちに齎される信用は、もっと重要で隠された原因に因っています。予言の実現は屢々私たち自身とか、私たちの周りの人々次第です。そして多くの場合、その時に恐怖とか希望から物事が起きます。不幸な事件への恐怖は、取分け逃げられないと信じ込んで仕舞うと、まさに避けられると思えなくなります。しかし、もしも私が嫌っている人であるとか、単に犬に襲われる観念を私が持つのであるなら、何時も私が期待する通りになる様に十分に自分を表します。もしも未来が私独りによって告げられたなら、私は直ぐに私自身の裡にそれらのしるしを見付けます。罪や狂気や臆病や肉欲とか単なる愚かさを避けるための良い方法は、何時もそのことを考えていても確かなものにはなりません。それとは反対に、偽善とか羨望とか残忍から救われると信じることが、力強い救いになります。これらの様々な理由によって予言者

たちの権威は、まさに終わりを迎えることがありません。

　しかし、これらの信仰はより一層豊かな奥底に基づいて生きています。誰もが自ら自分自身の予言者です。何故なら、前述したメカニズムによって私たちの本能からの行為はそれ自体が開始しますし、それと同時に知覚されます。奔放な運動は、栄養を摂って元気そうな筋肉の目覚めの感情でしかない歓呼によって前兆を示します。怒りは、血液の熱とか呼吸とか叫びとか言葉という動揺による痙攣によっても前兆を示しますが、もっと正確に言うとそれは恐怖です。野心や愛や虚栄心という全ての態度は、私たちがそれらに責任をもって引受けたり管理したり、それらの名を付けるのに応じて完成まで推し進めるのには相違がありますが、他人の動きの様に予想出来ます。それは自分の予言が自分自身のためである時には必ず検証されることになります。何故なら明晰な判断力は事物の魂を否定して、偶然のメカニズムに申し分なく追いやりますし、高齢者の経験も、少しも代わりにならない教義の長い回り道を望むからです。従って才能は精神の最初の対象ですから、宿命論も又最初の教義です。ホメロスの主人公は率直に言います、「私は手と足によって感じる。神が私を押すのを私は感じる」。思考する動物は前者の私の観念を通過しなければなりません。（完）

第四章　習慣について

一般に習慣は余りに低く見られています。私は、常に同一の道を求める頑固なメカニズムを遙かに超えた、驚くべき柔軟さを習慣に見ます。習慣の力によってダンサーやフェンシングをする人たちは判断力が働く前に、直ぐにぎこちなさから抜け出すのが分かります。勿論、彼らは練習を積むことで判断力は実践の直ぐ後をついて行く様に見えますし、運動を容易で自由なものにします。習慣は屢々何かを妨げます。でも、少なくとも良く注意しなければならないことは、もし私がワルツを逆に踊れないとしても、別に意味でもそれを妨げているのはワルツを踊るための習慣が無いからではありません。乗馬が上手な人は、私が射撃手やヴァイオリン奏者やボートの漕ぎ手として上手になるのを妨げる訳ではありません。柔軟な様々な業に優れた名人である曲芸師が、他の色々な業も大変容易に熟すのも明白です。同様に言語とか作文の訓練はついに習慣的と言われる文章表現を自由に使用しますが、それは他の表現に慣れていないために非常に良く戻るに過ぎないのです。これらの考察は危険な分析の入口で、まさに即興的に行う人を止めるためでもあります。といのも上司の命令が無くても行動する人間機械を人々は述べたいと思うからです。しかし音楽家も体操やフェンシングをする人々も、私たちの組織を軽視します。私はここで何か困難な行為を学んだことがある全ての人々に訴えます。私の兵器の教官がアルザス訛りで普通の射撃手と、頭で判断する射撃手とを区別して言う時は、哲学も同様に私に教えていたのです。

行う方法を知っている行為は、注意しなくても次々に行えると言うのは誤りです。ぼんやりとして迂闊な人は、行為を成り行きに任せる人間の様に見えます。勿論、その方法はばらばらですから大変に滑稽でもあります。でも、動物は決してぼんやりしておりません。軽率なだけです。その点を強調しなければなりません。上手な騎兵は、判断するまでもなく馬に乗るというのは決して本当ではありません。上手な職人が、判断することもなく狙いを定めて上手く調整するというのも決して本当ではありません。寧ろ、ここでは習慣という長所によって不必要な運動をしなくても判断力が直ぐに言うことを聞いてくれるのである、と私は言います。又、体操教師には考えや熟考が少しでもあると邪魔になって素早く出来ない、と言うのを私は聞いたことがあります。その証拠に、休止することのない命令が無いと彼の肉体は最早何処へ行くのかも分からないのです。もしも縋り付くとするなら、それは本能に縋り付きます。それでも落下しても怪我をしないで済む技術は、判断力が無くとも十分に上手くいくとも私は決して思いません。

動物は同じ様な種類の柔軟さを示しますが、それには判断力が欠如しております。私たちは一般に両者の間におります。私たちの自然の思想において本能は、情熱になり拘縮になり不器用さになります。思想の代価とは良く思考しなければならないことです。私たちは、思考することがないと行為する術も知りませんので、良く思考することがなければ立派に行為することも出来ません。周知の様に、失敗するかも知れないという恐れが主な障害になります。そして、この種の恐れが常にどんな恐怖においても主要なものになります。しかしこの恐れは、動き始めてお互いに対立する数多い行為の感情に過ぎません。恐れに勝つには、そして望んでいることを行うには、望んでいることだけを行わなければなりません。例えば、足を出さずに腕を伸ばすこと、あるいは歯を食いしばらないで扱いにくい錠を開けること、あるいは又弓を握りしめないで持つこと

、息を止めないで馬に乗ることなどです。最も単純な訓練は情熱に対する闘いであり、取分け恐怖や虚栄や短気に対する闘いです。

ところで学ぶには二つの方法があり、習慣は本能ではなく、本能の延長でもないことを認めましょう。動物や、人間も動物である限り人間も、事物の強制とか機械的な模倣により学びますし、常に繰返しによって学びます。このことから先ず説明出来るのは運動がかき立てて強固にする、筋肉への栄養です。更に、こう言っても良いのですが、神経とか脳の中枢に残された痕跡であり、それらは繰返された反応が最も抵抗が少ない道によって記されます。更に、最良のしるしは馬を従わせることが出来て、常に圧力とか強制になることに気付くべきですが、それらは或る運動を妨げたり、他の運動を助長したりするものです。この機械的な活動はとても知性に似ていません。動物たちの調教は、動物たちに理解力があると証明するにはとても及びません。反対に愚鈍そのものであるのを前提にすることを私は何時も考えていました。人間が学ぶのは全く別のやり方であり、機械的な繰返しによるのではなくて、再開することによるのであり、常に一貫した注意力を条件としています。それは換言すると、実行された運動は肉体が他の運動を行うことなく、望むが儘に自由に実行されるのを条件としています。どんな筋肉の収縮も隣接した筋肉を直ぐに目覚めさせますし、屢々拮抗筋でさえも手足が強ばるので疲労して決して前進しないのはまさに本当です。しかし、肉体のこの無秩序の主な原因は、全ての行為の中で非常に有害である、間違えることへの不安によって更に増大する観念の混乱であると私は思います。あらゆる訓練において、成功は突然にやって来ることに注意して下さい。判断力が明瞭な知覚を養って肉体がそれに従えば、悉皆了知されます。習慣の魅力とそれらの自然な力が幸福を齎すのは、トランプを切ることでさえも上手に行える手段を見出すからです。

しかし閑人たちの気晴らしを、以上で十分説明しましたが、宿命論の観念で大変に間違った判断力をこの理由に付け加えます。それは習慣が私たちの主人であり、些細な運動によって引き寄せられたり呼ばれたりするや否や、絶対的に抵抗出来ないことです。新しい職に就くには健康でなくなり、自分の仕事や友人たちや楽しみからも遠ざかった老人が言いました、「人は沢山のこと無しで済ませるものだ」。そして、この闘いを行った全ての人々は、服を着替えるのと同じ位に早く生活を変えることもすると言えるのです。しかし人は予め決して信じません。色々と有害な習慣からの回復は、経験によって、習慣が誤った判断のどの様な力も引き寄せていることを分からせることにあります。しかしその回復は、治療が続いている間しか行われません。反対の経験がたった一回きりでも、精神を誤りに連れ戻します。情熱に耐え忍んだ人々はこのことを認めることでしょう。彼らは、回復が何故大変に容易であっても、ぶり返しも大変に早いのかを理解しようとしますが、熟考することです。しかし実際に奴隷になるには、自らを奴隷であると信じれば十分であると良く理解して下さい。これは大変重要なことです。自由意志をこれ以上明らかにしているものは何もありません。（完）

第五章　決定論について

　閉ざされたシステムとか、殆ど閉ざされたシステムの中で起こることは予想出来ます。例えば熱量計や電気回路の中であり、もしも単に他の惑星の位置を考えるなら太陽系の中です。単に結果の全体を厳格に決定する原因とか条件の全体ばかりでなく、仮定された分子の仕事も含む仕事とか所謂エネルギーも、どんな変化があろうとも同量の結果の中に見出されます。例えば或る高さから物体を落下することは、着地した時の速度で何時も表されます。そして、その衝撃は蓄積されたこの仕事量を熱量に換算するなら、常に同じ重さのゼロ度の氷を溶かすことになります。生物もこの法則から免れません。動物を孤立させられる限りでは、運動の熱に使われたエネルギーは、食物の中に閉じ込められている化学的エネルギーから、排泄の中に閉じ込められている残ったエネルギーを引いたものに等しいのです。そこには数学的展開を規範と見做して確立された理解力があり、それらは閉ざされた完全なシステムです。閉ざされた不完全なシステムになると、未知の諸原因を除くのに気を配る注意に倣って吟味が常に期待されます。未だ測定不能の諸原因がこの規律から逃れていると仮定する如何なる理由もありませんが、同じく前に説明した様に、その様な仮定は語っていることが何のことであるのか分からない限りは、言葉の中でしか成し得ないものです。それ故に科学で訓練された精神は、大きくても小さくても実際の全てのシステムに、決定論的思想を既に広めているのは必然的なことです。

　これらの機械論的で破壊の時代は、何百万人もの人々が必然的に反省した諸原因によって、決定論の悲劇的事例を幾つも与えました。砲に詰めた火薬の量がもう少し少なければ、砲弾は遠くへ飛ばずに私は死んでいました。最も日常的な事件もこれと同じ種類の観察の機会を与えます。もしもあの通行人が躓いたなら、スレート瓦で決して殺されなかったでしょう。この様にして庶民的な決定論的思想が形成されますが、科学的なものには厳密なものなどはなく、合理的なものそのものでもあります。人が注意する事件に何時も混じっている情熱や行為のために、少なくとも宿命論の思想がそこに混じり合っている理由も良く分かります。あの男は死なねばならなかったとか、彼の運命であったとか結論付けますが、用心しても神には役立たず、悪運にも役立たないという未開人の意見をその様にして舞台に連れ戻します。この混乱は、少しも学識の無い人々が進んで宿命論の思想を受入れることに原因があります。それは宿命論に応えるものであり、お分かりになった様に大変に強くて自然の儘の迷信にも応えるものなのです。

　しかしながら、それらの教義は反対のものです。良く見たならば、一方はもう一方を追い出します。宿命論の思想とは、書かれたり予言されたことが、原因が何であっても実現することです。家の倒壊で死んだアイスキュロス（1）や、ライオンのイマージュで死んだ王子の寓話は、迷信の素朴な状態を示しています。同様なことを言っている諺に、溺死するために生まれた男は決して首つりをしないだろう、があります。その代わりに宿命論によると最小の変化でも大きな不幸を追払いますし、極めて明瞭に予言された不幸も決して起こらないこともあります。しかしお分かりの様に、宿命論者はどんなに僅かなことにも屈服しません。もしも不幸が避けられたなら、否応なくそうならねばならなかったのです。お前は病気が治るだろう、と書かれていました。しかし、お前は薬を飲むであろうし、医者を呼ぶだろう、云々とも書かれていたのです。宿命論はその様に神学的決定論に変化します。神託は従って諸原因を理解して予め結果が分かっているた

めに、全能の神になります。それが神の優しさであるとか、奪い取る知恵であるなら、まだこれから争わなければなりません。これらの言葉の遊戯は際限がありません。しかし最も厳密な経験は、創造主は事物の進路を決して変えませんし、設定した法則に忠実な儘でいることを決めている様に見えます。この回り道をして、男は数々の原因から溺死するのであり、確かに首つりをしないだろう、と言うことに戻ります。彼は自らの運命に引寄せられずに、一つの歯車でしかなく巨大な機械に捕らえられます。彼自身の意志は行為に従います。彼を動かす同じ原因が又、彼に意欲を生みます。或る種の狂人たちが自分たちに暗示されていることを行い、従って彼らが望んでいることを行う様な気がして行っていることを誰もが知っています。私たちは誰もがこの様な狂人でないことを証明して下さい。

最後には精神を麻痺させて仕舞うことは、大変明瞭な決定論によって全てのものが一ヶ所にじっとしているということです。立派な忠告に従うのは常に良いことですし、私は必然であろうと無かろうと、それに従います。私が自由に決心する前に動機を調べるにしろ、動機を検査して必然から行うことを予想しようと務めるにしろ、熟考することはやはり自然なことです。私が行うことを誓うにしろ、これから行うことを確信するにしろ、決心することには変わりありません。約束も同じです。行為も同じですが、或る人が望んだことを行ったのであると言えば、もう一人は行わざるを得なかったことをまさしく望んだのだと言うでしょう。その様にして決定論は色々な感情、信念、躊躇、決心を説明します。英知は必然であろうとなかろうと、同様にあなたを自由にするし救済する、とスピノザは言いました。それでは私たちは何について議論するのでしょうか。（完）

（１）アイスキュロス（前五二五頃～前四五六）は、古代ギリシアの三大悲劇詩人の一人で「アガメムノン」「縛られたプロメテウス」がある。

第六章　精神と肉体の一致について

　私は決して議論しません。私は、何も約束せず何も望まず私を決して愛することも憎むこともない広大なメカニズムを、如何なる敬意を持つことも無く、注意して熟視します。それを熟視する精神は、少なくともメカニズムと同等の様に思われます。それはメカニズムが示すものを超えた洞察力もありますが、もしもメカニズムの広がりの中で少しもはみ出ないならば、常にメカニズムと比肩するものでもあります。精神は事物の上を広がって、事物を把握するために割れたり散ったりする様に私に見える訳ではありません。その反対に、数々の部分も距離も無しに精神と一致することによって、数々の部分と距離があるのです。何故なら、一部分はそれ自体によって一部分でしかないのですが、それ故に決して一部分でもないからです。二つの部分の間の距離は同様に外的なものです。従って部分も無くあらゆる事物を含むこの精神が、何かモグラの穴に閉じ込められることを心配すべきではありません。少し考えて下さい。もしもあなたの精神が肉体の中にあったなら、あなたの肉体から他の人々の肉体までの距離を考えることは決して出来ません。この大組織網の働き手は一度に至る所にいて、全ての所にいなければならなくなります。如何に行えば良いのでしょうか。心配しないで下さい。あなたは精神を信頼して下さい。

　心理学者は言います、しかしどんなものでも、全ての距離も地球も星々もどんなものでも私の精神の裡にあり、私の精神は肉体の裡にあります。しかし私はここで心理学者を見捨てます。心理学者が言うことは、決して正確なものではありません。あらゆる議論において彼が心配しているのは、そのことを言うのを恐れていることです。内部や外部とか、内容や容器という働きにおいて、数多くの肉体に取り巻かれた私自身の肉体が精神の裡にあると言うのでしたら、実際に醜聞になるでしょう。しかしながら私は、この世界が弱い部分でしかない私自身の肉体の中で、今度は世界の番になることを知っています。もしも読者であるあなたが、跳ね回っているこの教義に従って外部の事物への行為が先ず精神に感覚を生んで、それに基づいて外部の事物やその外のもの全てを表していて心理学者の中で従ったなら、私はここであなたに恥をかかせたいと思います。しかし最初の行為がやって来た、もう一つの外部とは何処にあるのでしょうか。精神が再び見出して、精神そのものから抜け出るものでしょうか。実を言えば、あなたがここで描くのは動いている動物です。そして事物の活動が動物に這入り、反応がそこから出て来るのは本当です。しかし、それは感覚器官や脳や筋肉を通してです。あなたはその中で精神を保持しません。動物の目で一瞬見てあなたは気に入り、観察者としての場所に戻ることが出来るのを私は良く分かります。しかし、この働きは信頼出来ません。精神はその様に一つの肉体からもう一つの肉体へ移住しません。いわば私の精神は私の肉体に結び付いていて、それで良いのです。

　それが可能である限り、考察しなければならないのはその結び付きです。そこからの観点からその結合は絶えず敏感ですし、私の肉体の運動によってしか変わらない世界を私は思考します。もしも私が樹木に隠れた鐘楼を見たければ、肉体の場所を変えなければなりません。更に傷付けられれば、その傷みが私自身であることを感じさせます。結局のところ服従によっても私自身になります。私が行いたいと思う運動は、直ぐにでも私の肉体がそれを行いますし、あるいは試みます。もしも苦痛の観念の下に、注意力散漫や意気消沈や茫然自失も含めるとするなら、私が精神と肉体の結合に関して知っていることは以上で全てです。私は、私の奴隷状態を良く知ってい

ます。しかし気まぐれで、しかも常識に反してそんなことを付け加えて言っていると思わないで下さい。

私の精神は、私の肉体という数々の歯車のうちの一つではありません。そして宇宙の一部分でもないのは明白です。私の精神は、あらゆるものの全体です。私はここで憶測しているのではありません。単純に述べているだけです。私の最初の思想は、宇宙の知覚であり認識です。それには不足したものは何も無く、その中にはやがて門から這入って来る様なものも何も無く、単に私が明らかにするだけです。認識するための広大な力と、中心とか諸条件とか見地とかを課す小さな対象である肉体との結合点を見出すことは、私たちの力学やあらゆる力学を超えています。従って私たちの奴隷状態は事実であって、理論ではありません。それでも事実の中に私たちが際限無く奴隷状態を見出すことは決して出来ません。不変の儘の奴隷状態を見出すこともありません。人間は苦しんで行為し、模倣して発明します。私はこの彼を見出す時に理解します。それから私は彼を好きにもなります。仕事をする時には死骸を引きずっていると言う人もいますが、本当に絶望することはありません。（完）

第七章　自由意志と信念について

　自由意志は自由よりも良いと言われています。これらの古い言葉には、あらゆる自由が依存されている審判者としての主要な観念を生みます。判断が無いとあらゆるものの自由も決して無いことは、誰からも逃れられません。本能が始まり、情熱が続きます。それらの動機は感動のしるしに過ぎません。判断力が最初の運動を先ずその源に送り返すなら、既に別のものになります。このメカニズムをその儘にして置けば、直ぐに均衡を発見します。次に、行為するための数々の動機の間で、或る動機は殆ど情熱として生まれると同時に死んで仕舞います。他の動機は、正しい知覚によって現れて結果まで辿ります。結局のところ、その道は細かく調査されます。あるいは先決された色々な理由のために、私は少なくともそれを生かすための動機を拒みます。何故なら調べないことも一つの英知であるからです。正直者は如何にして捕まらないで盗めるのかを探究しても楽しくないでしょうし、まして如何にして違反出来るのか、とか誘惑出来るのかを探究することもないからです。あるいは又、それらのイマージュに直進すると、正直者はそれらを正確な知覚に還元して仕舞います。いずれにしても彼は、自分の欲望が何処まで自分を導いて行くのかを知りたがって自らを見詰めて生きる人とは全然違います。まさに些細なことに決して拘泥しない王党派を忘れないで置きましょう。というのも、全ては変化と解体にあり、判断力が少しもそれらを制止しない時にはそれがイマージュの遊戯の中にあるからです。誠実な人が認める明細によって私たちは力学の発明者たちを既に十分超えています。そして幾何学も無いこの場所には、告訴人とか請願者の様に色々な動機が現れます。ここには審判者の恩寵によってしか動機は存在しません。更にその上私たちは、審判者が重さを量る様に色々な動機を量ろうとする秤を軽蔑するでしょう。冷静な狂人という観念を生むことが出来る限り、かくして審判者は思考するでしょう。そして次のことも気を付けましょう。もしも私が散歩についての私の熟考を心理学として分析すると、私の動機は事物と同じ様な隔たりがある様に見えます。でも、何故でしょうか。その時は私の判断力が必然性と自由意志を点検しているからですが、散歩を点検していないからです。自由な行為による経験は、自由意志の問題について熟考しないで、自由に行為することしか考えられないのです。それ故に決して教授の事例の中に自由を探してはなりません。

　実行についても同じ様なもので、言うべきことは沢山あります。何故なら少しでも見えるのであれば散歩の実行は、一連の行為と眺望を変えて動機を明らかにする一本の道を前提とします。行為は再調査するのと同じ様なものです。それは又、情熱と十分に共通していますが、軽率にも加入した党派に自らを拘束することは狂気の沙汰なのです。そして、騎虎の勢いで最早引返すことが出来ない庶民の考えの中に、私は宿命論者の偶像を確認しました。そこから頑固さが定義されますが、怒りが無いことは決してありません。逆に、決して自分は免れないと思う一連の意志は、決心した時には決して障害にも立ち止まりません。そして、その時は新たな熟考と探究によって不屈の精神になります。二本以上の道があり、交差点は至る所にあります。意志は、自分自身の毅然とした信念と、一歩一歩の明確な視線によって姿を現すのであり、命令によって現すのではありません。

　原動力のことも考えなければなりません。それは決して必要とされない注意をまさに蘇らせる反抗的努力の感情を考えるとするなら、非常に間違って語られています。行動力は先ず一連の意

志と体育的な仕事によって訓練され、常にその努力を解きながら肉体を従わせます。この行為そのものにおいて、注意力は全く肉体から離れます。ピアニストは音楽を思考します。そして、所謂指も思考と同じ位に速く従います。もしも自由な人間を大変良く考察するなら、機械の中に技師が隠れている様に、活発な精神も肉体の中に隠れているという観念からきれいに解放されるでしょう。思想は斥候となって進み、肉体はその後を歩く、と言えば良いでしょう。しかし、これらも機械的なイマージュです。精神は外部にも内部にも同時にあります。対象でも事物でもありません。押されることもなく、押すこともありません。

私は隠れている発条を見せる様にして、自由意志をあなたに見せることは出来ません。精神は精神自体を捕らえません。対象の中に精神のそれらの観念を再発見するだけです。存在する事物の数に自由意志を数えるのは止めましょう。自由意志を失い得ることがあるのも極めて明白です。それには同意するだけで十分です。そして、誰も自分自身以外に自由意志を解放することが出来ません。それ故に想像力の幾つもの障害を、取り除いただけで十分です。熟考も最早行えません。もしも何らかの自由意志の証拠があったなら、私は従ってあなたにそこから定義させるでしょう。ルヌヴィエ（1）はそのことを別の言葉で言いました。大切なのは、自由に行われなくてはならない、ということです。要するに望むことです。私が多くの人々に自由を望むと彼らは苛々するので、大したことでないと考察もしません。しかし、あなたの意に反しても、自由になることを恐れてはなりません。私には何も出来ません。ここには純粋さの中での信念があります。ここには数々の神学上の証拠が大変に長くそれらの対象自体から間接的に見えて来ます。何故なら〈信念〉そのものが〈神〉であるからです。

善を信じなければなりません。何故なら存在しないからです。例えば正義も信じなければなりません。存在しないからです。正義は愛され望まれていると信じないことです。何故なら何も付け加えないからです。しかし私は、正義を行うと信じることです。正義は私たちがいなくても、力によって行われると或るマルクス主義者は信じています。この思想に付いて行ってみることです。行われるであろう正義は、最早それこそ正義ではありません。それは事物の一つの状態でしかありません。私が自ら行う正義の思想も同じです。もしも全てが独りで形成され、私の思想もそれと同じであるなら、如何なる思想も他の思想と価値がある訳ではありません。というのも誰もが力によって持てる思想しか決して持たないからです。そして今のマルクス主義者も、一つの真理が他の真理に代わるのを期待しているに違いありません。私は、呑気に暮らす人々がいる様に、くよくよしないで思考する思想家たちと知り合いになりました。それ故に真の思想家とは、自分の精神に現れるものを信じる狂人になるのでしょうか。しかし、この地獄から再びもっと上へ上がりましょう。治ろうと思わない病人を、私は放って置かなければなりません。（完）

（1）ルヌヴィエ（一八一五〜一九〇三）は、哲学者でカント主義の哲学批判者である。

第八章　神と希望と慈愛について

頑健で確かに自由な精神を持った英国の哲学者で誰かは分かりませんが、神の観念は暴君には最も役立つ、と言いました。自由は最初に歩き出しますから、用心から無神論になるのも一つの理屈になります。もしも私が神を信じたなら、常に慎重になるだろうと敢えて言います。審判者が二人では多すぎます。一人でなければなりません。従って私は神に従い、真実も正義も裁きません。反対に私は真実と正義に関して知っていることにも従い、神を裁きます。これは支配者としての神に対する慎重さの規約です。神は確かに真実と正義であるもの全てであると言って逃げるなら、行うことは存在していることよりもそれでもなお優れている、と私は思いたいのです。それは結局のところ存在するものは何でも神でないと言うことになります。私は対象を捕らえなければなりませんし、あるいは対象が私を捕らえなければなりません。そして、もしも完全が素晴らしいものであるなら、完全を裁く人のことを私たちは何と言えば良いのでしょうか。いや、それ以上に完全を行う人の方がもっと見事です。私は、正義と勇気と品行方正な人間が姿を現すと、心から崇めます。その上で、私は神を恐れませんし、悪魔も恐れません。

しかし、自由意志が信念に固有の対象である様に、恐らく神も感情に固有の対象です。何故なら、私は私の全ての行為の中に神を感じますし、私の同胞の人間たちも私と同様に感じるからです。それ故に彼らは理解しないものを急いで大いに崇めます。そして、間違った知覚から生じる空想的な崇拝を語ることなく自分の先生を尊敬しないで何らかの勝利の観念を抱く人間も殆どおりません。この活動は美しいが、臆病者や怠け者になる小さな原因から自らを救済する一つの方法でしかありません。

神に仕えたり敬ったりすることは、動物の様な群衆や欲望に満ちた人々に対して警鐘を鳴らします。そうです、神に仕えるのであって、神が私たちに仕えることを望んだり期待したりすることではないのです。従って聖なる書物の山の中で私は、弱くて赤裸々で、しかも無防備な神の色々なイマージュに力強さと感動を発見しましたが、まるで神は受取るものしか与えていない様でした。鞭で打たれて十字架にかけられた神です。決して強制しないが、求めて期待する神です。しかしながら、まるで神の美徳は全てが祈りの中にあったかの様に、人が懇願しても決して無駄にならない神です。慰める人であって復讐者でない神です。しかし神学は想像力と論理の働きですっかり台無しにします。迫害者たちの運動は盲目ですけれども、より一層正確です。何故なら彼らは神に復讐しているからです。

私を囲む世界は私にとって未知ではないし、反するものでもありません。大地の本当の息子として私は事物の光景と、時間や四季の流れを愛します。空想からではありません。空想上のものは、小妖精や空飛ぶ精霊の様に寧ろ家や人間たちを愛させることに注意されるべきです。自然への愛は、正しい知覚がそこに発見する秩序と平和が齎すものでしかありません。事物を信頼して如何なる奇跡も恐れないでいられると、孤独を愛する様になります。結局のところ、最も恐ろしい事態においても一つの英知があり、それは多くを約束しませんが、決して騙すこともありません。何かが起きても常に秩序と節度に従うことになります。そして自然が私たちに有利になって適したものになれば、この精神的な安心が私たちの喜びの気持ちを倍にします。人間の善行は恐ろしくなる余地をより一層与えます。何故ジャン＝ジャック・ルソーが都会から逃げたのかが

、私には分かります。

しかしながら友情はその上にあります。友情であり、社会ではありません。社会は強制された友情と同じ様なものです。友情とは自由な一つの社会です。そこでは矛盾そのものも、共通して一致した思想が再び現れて来ることによって楽しくもなります。もしも、そこには一つの世界と一つの真理しかないとするなら、まさに精神も一つしかなければなりません。勿論、そのことは決して全て理解されないことです。しかし事物の光景、取分け非人間的で私たちの掌握外の光景には屢々そのことを必然的に感じる機会があります。全ての精神と事物との間に、類似した如何なる観念も形作ることが可能でなければ、私たちの最良の意志は事物の中や人間たちの間にさえも道を見出すことを私たちは信じたいと思います。その様にして希望が蘇りますが、常に信念が先頭を歩いています。二つの諺がこのことを証明して言っています、「天は自ら助くる者を助く」そして「運命は大胆な人々を愛する」。恩寵と祈りの教義は、人間秩序を無視出来ませんでした。恩寵の権利を、まさに罪深い人の意志に従属させねばなりませんでした。神というものは余りに重いのです。

人間たちを愛するには、より一層の精神的強さと自恃と粘り強さが必要です。私は、予断によって愛することを言っているのであり、友情によって愛するのではありません。情熱と無秩序、屢々最悪な社会秩序、嫌悪、これらを無視してあなたを狙っている者が私には分かります。敵を愛するまでには至らない彼らは、友情とか同情からの動きを期待する者たちです。私がここで語る愛とは、全てが必要とされていて、結び付けられた理性へ直進して、それらのしるしには決して不足しません。それ故にその希望は、受取る報いは少ないけれども、何よりも堅固で決然としたものです。その名は慈愛です。神学的英知は、それを信仰と希望と共に美徳の数の中に入れました。そこでは誠意がなくてはならず、最も好意的な気質もこれらの美徳の代わりには決してならないことを十分に知らせています。哲学者たちからは余りに忘れられたこれらの美徳は、如何なる種類の行為も限定しませんが、全てを明らかにしますので、あらゆる道のために自己の前を照らすために持って行く三つのランプとして、私がここで神と希望と慈愛を書く所以でもあります。（完）

第九章　天才について

　天才とは熟考することなく、間違えることも予測出来ないこともなく、容易に行為することです。恐らくそのことを理解するには、少なくともそれらを即興的に出来る人々を考えなければなりません。もしも可能であるなら、この規則正しくて絶対に過たない自由の登場を把握しなければなりません。その点については、音楽が少なくとも推測によって私たちに教えてくれるかも知れません。何故なら、他のものに逸れることなく音を聴く歌手は、私がその対象に予測させるものや連続するするものを発見すると信じる美しい音楽に、大変自然で期待する何ものかがあるからです。しかし、この完全な注意力は、自己への回帰や躊躇や先入観が一緒では不可能です。ここでは予測することが重要ではなくて、行うことが重要なのです。期待すれば全てが変わります。何故なら、延長された音は短い音とは別のことを語るからです。そして、沈黙も同じです。将軍も同じく瞬時に決定します。忠告とか計画に従って決定せずに、単に対象に即して決定します。というのも活動は自由でもあるからです。画家にとっても同様で、絵筆の一筆は次の一筆を齎し、小説家の一言も次の一言を齎します。ミケランジェロは大理石の塊を見詰めて、そこに彼のダビデ像を見ました。そしてご存知の様に、恐らくモデルがいなくても敏捷にこの像を創り出しましたが、木槌の一振り一振りに大理石の最良な処を少しずつ取り出したのです。モデルと作品という二つの対象がなくならない画家や彫刻家たちの創作方法には、殆どこの見方が一致しないのを私は認めます。しかし将軍が他の戦闘をモデルにして戦闘を命じることを人は理解出来るでしょうか。作家については、作詩法という規則が常に霊感を助けていたことに私は注目します。ところが、これらの規則が作品に注意力を戻して、モデルから作品を引離すための方法でないとするなら、規則とは何でしょうか。散文に関しては、私は何を言って良いか分かりません。何故なら私はそれでも、詩でないものが散文であるとは信じませんし、散文は芸術の中で最も新しく生まれたもので、恐らく最も隠されて見えないものでもあるからです。いずれにせよ、それでもモデルに従うデッサン芸術においても、デッサン自体に倣ってデッサンを続けたり終えたりする運動があります。そして、そこからデッサンにおける最も稀有な美が、モデルとの類似でないことに達します。建築に対しても、最も美しく同時に最も自然であると私は言います。その出来映えにおいてさえも、既に出来ているものへの考慮も一度ならずありますし、従って始まりがその継続によって取分け美しいことが十分にあり得ます。モリエールの書き方、取分けシェークスピアの書き方は、このことに反している訳ではありません。何故なら、あの美しさは主題の中にあるのではなく、前もって整理されたものの中にあるのでもなく、寧ろ所謂筆任せというものの中にあるからです。それは自由な判断力と、それと同時に行為のなかにあり、申し分なく継続していると言えるからです。この魅力は装飾や美しい家具にも目に見えますし、それらの飾りは音楽に似ていて、その中に必要と自由の一致を表します。

　以上のことから、天才に最も縁遠いものは、自己の定義と限定でしょう。気骨ある作品には常に自負があります。というのも、誰もが思い切ればすっかり新しくなれるからですが、思い切るのは率直さです。従って、裸の判断力が裸の対象の前面で自らを見出します。その時に対象は意識を満たします。主観は最早そこに自らを見出しません。天才の中に何らかの巫女の霊感を常に求めないで、正確な分析によって主観を予想しなければなりませんでしたが、それは結局のとこ

ろメカニズムであり、もう一つの対象です。そして人は、自己と同時に対象を申し分なく思考することはあり得ません。文筆の奴隷は創りたい作品によって十分に自らを知ります。しかし芸術家は、自らを創られた作品によってのみ知りません。そこから自らを決して定義しない人は幸福です。（完）

第十章　懐疑について

　狂人は、行為においても思考においても決して疑いません。拳を振り回すばかりが狂気であるのと同じ様に、策略や憎悪や恐怖や自分自身の行為や過失でさえも、信じ過ぎることも狂気です。それ故に、懐疑は英知の冠に違いありません。一つの観念に従って他の観念を形作らなければならず、その道は何処へ行くにしても同じである、とせめて理解されるなら、デカルトはその冠のことを十分に言いました。けれども、デカルトは一度しか疑わなかったと人は思いたいのです。懐疑家は何時も人を騙す決然として断固とした態度を取ります。
　狂人の行為はがむしゃらです。その恐怖は非常に下手に戦います。重くのしかかる信念の結果であり、それが行為を力に委ねます。しかしフェンシングの名手の様に自由な行為は絶えず疑ってかかり、そこから強くなります。活発であり迅速ですが、容易には逆上しません。動き始めも停止も突然です。常に判断に従って体を曲げたり後退したり戻したりします。発明者や支配者や救助者の如何なる行為も、ここには自らのモデルがありますし、戦争の行為さえも全体的にも部分的にも同じで、モデルがあります。私は、職人の行為も決して失念しません。それは対象への堅固さと他の行為には十分に残されていない瞬間的な余裕によって、より一層調和がとれればとれる程、恐らく英知も豊かになるものです。但し、情熱に対して率直でないのは、その行為が情熱に少しも目覚めていないからです。それは計量された行為であり、思考された行為です。その様にしてプラトンが望んだ様に、体育は英知に関する最初の学習です。
　何事にも立ち止まっている様に見える点で用心深い弟子であるスピノザは、不安と懐疑を識別するのを当然に望みました。それらは確信するものが何も無いために疑っているのである、と多くの人々が言っています。しかし、臆病と不器用はフェンシングをする人を生みません。従って絶望は思想家を生みません。確信するものが何も無い人は、疑うことも出来ません。何故なら何を疑うのでしょうか。これらの所謂懐疑家たちは、本当は寧ろ少しの間信仰を持っています。もし言えるとするなら、その様に行為する人は煉瓦の山に躓いているのです。
　誰もが、自分が一番良く知っていることでもあるから、そのことを一番良く疑います。それらの証明が不十分であったからであると目撃者は言いたい様ですが、決してそうではありません。その反対で、その証明は十分であったと感じていたからです。作った人は解体することも出来ます。細部に至るまで証明が充実して力強い懐疑によって試みられることが経験になります。もしも疑うことを恐れると、証明は不十分な儘です。ユークリッドは自明の事柄に対して疑う術を知っていた人物です。そして、非ユークリッド幾何学は更にもっと堅固な線として他の線を描きました。私はその懐疑について更に疑います。この様にして数々の思想は生まれ、そして再生します。
　石工が石を置く様に、人は数々の思想をしかるべき処に置きっ放しに出来るのを望むでしょう。しかし、思想の記憶というものは決してありません。単に言葉による記憶だけです。それ故に常に諸証明を再発見しなければなりませんし、そのためにはもう一度疑わなければなりません。「立派であることには苦労する」と昔の人は言いました。従って私は、自分が書いたものを引きずる多くの人々に期待しません。ジャン＝ジャック・ルソーは、書いたものが好調になるや否や、それらを忘れたと語っています。勿論、これは恐らく判断力という最後の視線が立つものを何

も残さなかったということです。その様にして同一の粘土でも、色々なその外の立像の創作に役立ったのです。自己に厳格ではなくて、最早その時ではなくて、寧ろ寛大と忘却の時です。他人のために人が拘束されるや否や、本を出したことは許されなければなりませんし、自分のために解放される術があります。その様にして思想は、事物と同じ対象でしかありませんし、それで十分です。

　さて、今度は読者のあなたに言います。見下している懐疑というものがありますが、それは不安でしかありません。その様にして本を読むべきではありません。ルソーが言った様に、愛と信念と共に疑うことです。真面目に疑うことであり、悲しげに疑うことではありません。神学が全てを台無しにしたのです。それ故に、多くの人々がパンを得る様にして天を得なければならないでしょう。しかし歌いながら得るパンが最良です。真面目さについては言うべきことが沢山あります。何故なら、悲しむことは難しくないからです。それは性癖です。しかし幸福になることは難しく、美しいものです。従って何時も数々の力量を証明する人々よりも強い人でなければなりません。というのも、取分け武器に走るなら、競争が齎す思想には正しいものは何も無いからです。そんな時にソクラテスは笑っていました。読者がまさに横切らねばならなかったこれらの不毛の荒野を抜け出るには、青春があなたを守るのを私は願っています。（完）

第五部　情 熱

第一章　幸福と倦怠について

　誰もが幸福を追い求める、と一般に言われています。人々は幸福を望むが、他人の意見に従ってやはり言葉で望む、と寧ろ私は言いたいのです。何故なら幸福は人が追い求める何ものかではなく、人が所有する何ものかであるからです。この所有が無いと、単なる言葉に過ぎません。しかし、対象物には多くの価値が結び付けても、自己には不十分な価値しか結び付けないのは普通のことです。従って或る人は富を喜びたいと思い、或る人は音楽を喜びたいと思い、或る人は学問を喜びたいと思います。勿論、富を愛するのは商人であり、音楽は音楽家であり、学問は学者です。アリストテレスが良く言った様に、現実態のものです。従って人がそのことを受入れるとしても喜ぶのは決して事物ではなく、人がそのことを行うなら拳固を与えたり受けたりすることでさえも、喜ばない者は殆ど少しもおりません。その様にして、もしも馬を調教する様に規則正しくて困難な行為を目指して、それらを少なくとも自ら求めるならば、全ての苦労が幸福の一部分になり得ます。庭は、もしも自ら作らなかったとするなら、嬉しくありません。女性も、もしも自らの心が捕まれたのでなかったなら、嬉しくありません。権力でさえも、苦労しないで手に入れた者には退屈です。体操をする人は、跳ぶことで幸福にならなければなりませんでした。ランナーは、走ることで幸福にならなければなりませんでした。観客は楽しむだけです。従って子供たちがランナーとか体操選手になりたいと言う時、実際にやる手段には事欠きません。そして直ぐにやり始めるのですが、それらの苦労を飛び越えて行って間違えます。それなのに達成されていることを想像します。父親や母親たちは少しの間かき立てて立ち上がり、そして再び座り直します。その間に、この体操選手は行ったことや、行おうとしていることで幸せになります。彼は自分の腕や足に幸せを思い起こし、幸せを試みて感じます。その様にして高利貸や征服者や恋人が生まれます。誰もが自分の幸福を生みます。

　幸福は、遠くから想像しているうちが楽しく、手に入れたくなると消えると良く言われます。だが、それは曖昧です。何故なら、優れたランナーは、休息している時でも望めば想像してでも幸せになれるからです。しかし想像力はその時、自分だけの領分である肉体の中で働いています。このランナーは勝利の冠とは何か、そしてそれを単に持つことでなく、勝って獲得することの素晴らしさと美しさを良く知っています。そして、それは何でもきちんとやり直す行為の結果の一つです。少なくとも誰もが手の届く処にある言葉での想像力によっても幸福を期待することが出来ます。その他の想像力はその時、期待と不安に支配されます。初めての経験は苦しみ以外に何も与えません。かくしてトランプ遊びを知らない者は、楽しくやっているのを良く見て何がそんなに楽しいのかと訝ります。貰う前に与えなければなりません。希望を常に自己へ向けなければなりませんし、事物へ向けてはなりません。そして、幸福はまさに幸福を求めなくても、それに値した人への褒美なのです。やはり幸福は、望むことが私たちには楽しいのであって、楽しいことを望むからではありません。

　私はここでは本当の病のことは論じません。各自の用心深さと蓄積された知識がそれらの病に対して戦いますが、決して十分ではありません。私が論じるのは少なくとも私たちの誤りが生じる限り、想像のものと呼んでいる病です。それ故に私は倦怠から始めますが、それには一定の症状が無く、極めて一般的な病で、原因は恐らくあらゆる情熱という感情に潜んでいます。退屈し

ているのは思考です。肉体が頑健でも休息すると、まさに肉体は一種の倦怠になりますが、それは両足自体がその時に動き出すからです。しかし薬が無い訳ではありません。この一寸した動きは動物や賢者にも見られる様に、これらの運動について考えるまでもなく直ぐに遊戯とか行為になります。両者の間にあるのが倦怠です。暇と強制を前提にしますが、そこからは決して生じません。というのも、それらは二つとも元気であるからです。倦怠は、教義の誤りにより如何なる試みも禁じる一つの判断から生じます。行為はこの倦怠の始まりを決して喜びません。私たちを教えに導くのは行為の必然性に過ぎません。それ故に、これから持つであろう喜びを決して決めてはなりません。それには幸福も未だ少ないでしょう。何故なら、幸福は決して私たちを強制しないからです。勿論、もしも決められていたなら、全ては失われます。「私が喜びを見出すことを確信させて下さい」と言うのは愚か者です。しかし「喜びなどは決して見出せないことを私は確信している」と言う人も私は気の毒に思います。それ故に第一に、退屈している人は苦労せずに多くの物を所有している人物であり、沢山の苦労をしてそれらの物を所有している他の人々によって羨望される人物です。ここから「私は幸せになるだろう」と言う不幸な観念が生まれます。第二に、この人物は最も美しい物を何でも持っていますから、趣味にも不自由しません。そこから彼が行おうとすると、比較することが多すぎる様になって仕舞います。絵を描いたり歌ったり詩作したりした時の最初の喜びは、これらの作品に抱く軽蔑によって台無しにされて仕舞います。良い趣味は老人の装飾になって仕舞います。第三に、この人物は礼儀正しさによって自制力もあります。つまり「私は幸せにならないかも知れない」という、更にもっと別の不幸な命令によって天性の始まりを全て良く阻止する術を知っています。その様にして一つの性格が生まれます。そして上手に思考する如く経験がそれに応えます。その目は喜びの全ての潤いを失わせます。それは喜びに飽きさせることはないのですから、喜びが多すぎることもありません。食べ物を拒む人は少しもおりません。何故なら、食べ過ぎる程食べたからです。彼は寧ろ想像力の病人として食餌療法を余儀なくされます。経験を生む自己についての判断力を人は十分に決して考えません。例えば自己は不器用であると考えると、その通りになります。あるいは臆病であるとか裏切られるとか考えると、その通りになります。トランプでも運が悪いと考えると、その通りになります。しかし運が良いこともあります。ところが、退屈した人はどんな経験も生みます。自己についての良く当たる全ての予言を除いても、何らかの精神の喜びを発見します。そこには赤裸々な情熱があります。（完）

第二章　賭けの情熱について

　賭けの情熱は、屢々高度な倦怠が探し求めている薬になります。しかしお分かりになる様に、どんな情熱も命令によっても又他の色々な事物に倦怠を含んでいると言わなければなりません。ここでは全財産を失う危険もある運任せの賭けを考えてみましょう。賭けをし始めると、その意味では勝ちを齎す結果がやはり負ける結果よりも可能性があって私たちの通常の欲望以上の多くの成果を獲得する欲望に、私は先ず気付きます。賭けの情熱はそこから始まるのかも知れませんが、倦怠や模倣から始まることは決してありません。もしも賭けを断つとしても、吝嗇とか用心深さからであるとの推測を引きずっている限りは、何時も我慢出来るものではありません。いずれにせよ勝とうとする欲望は、好機を試みる喜びによって直ちに消されます。無邪気な賭博者たちは、どんなカード、どんな種類のカード、どんな色のカードが出て来るかを予感していた、と何時も信じているのを人は気付くことが出来ます。この予感が何時も騙されることもありませんから、そこからは負けていても大変に生き生きとした勝利感があります。もしも勝てば事物と自己との間に授けられた霊感の一致としての魔法の力を楽しみます。この感情は決して小さくありません。これらの偶然の仕業も、ミイラの様な老人も子供に連れ戻します。これらの試みは曖昧でなく、直ぐに答えの出る閉じられた世界で行われることを付け加えて言いましょう。同様に自由ではありませんけれども、一つの試みがその前の試みに決して依存しない世界でもあります。そこから宿命論者の偶像が崇められることになります。しかしながら全てが非情に結び付いている世界において、真実の試みが屢々与える絶望も決してありません。その反対に物神という素朴な崇拝が自らの場所を見出しており、希望は常に若々しいのです。そして結局のところ実際の世界は、短気者たちが望む様に決して彼らに応えないことを誰もが知っています。それは決して肯定も否定もしません。信念の後に希望を設ける厳格な処方に従って、自己の答えを引き出さなければなりません。しかし賭けは常に肯定又は否定を答えます。賭けは継続しないで再び始めるだけです。

　しかし、その罠を観察して下さい。賭けは待ってくれません。警報器が最初に動き出せば、走らなければなりません。身体の動きによって感じるものは、最早単に欲望だけではありません。それは呼びかけであり推測です。あらゆる情熱を明らかにします。というのも、予感は常にその役割を演じるからです。しかし賭けにおいて好機は早く過ぎ去り、何も残りません。そこでは走らなければなりません。もしも抵抗してじっとしていれば、その様な美徳は後悔によって直ぐに罰せられます。その時は自らの約束を破ります。その様にして各賭博者には賭ける技術が出来上がりますが、それは躊躇うことなく自分だけの身体に尋ねて従う技術でしかありません。ところで心臓が脈打ち筋肉が元気である限り、神託にも決して不足しません。しかし待って下さい。これは既に冗談に過ぎません。最後の判断を下すのは待って下さい。何故なら、取分け若者たちの裡では、精神が実際の世界や一生を新たに直ぐに思考します。沢山のことを学んだ後で、宿命論者の判断はルーレットを無視して結局のところ現在を未来に結び付けます。そして大きな賭けにおいては運命からは誰も逃れられないという不幸な確信が形づくられます。そこからは全てを失うことや身を滅ぼすことの意思によって、賭けの情熱は屢々賭けをする人と共に死んで仕舞います。多くの自殺者たちにとって、結果への恐怖は動揺が少なく、運命論の観念に従ったどんな

感動的なイマージュにも一つの秩序があり、それに従うしかないことを良く知っていると私は思います。この宿命論は若者たちの全ての情熱の中にあります。愛する人を殺すとか、戦いの中に死を求めるのも、その様な動きによるものです。そこから古代人たちが生んだ諺は、「ジュピターは負けたい者たちの目を塞ぐ」です。しかし、これは傍観者として言っているのです。もしも彼が死に急ぐのを私が望むとするなら、本当の賭けは死を彼に隠さないで避けられないものとして示すことであり、それと同時に自分の肉体の動きは死を告げていると言うことです。そこでは眩暈を正確に描写するだけです。外部の災難が一瞬のもので、次に何が起こるか分からないので、賭けの情熱は如何にして自己の奴隷になり得るのかを示すのに適しています。他の全ての情熱は人間と事物に働きかけます。愛は愛を生み、憎悪は憎悪を生み、怒りは怒りを生みます。その様にして賭ける喜びと運命論と不幸なものへの欲求が全ての情熱の基本になっていますけれども、これらの情熱は或る意味で外部の必然性に私たちを従わせてもいるのです。これらの奇妙な狂気を情熱そのもののために一つずつ書いてみましょう。というのも、それは決して観念を把握することではなくて、人が活力を手に入れる観念によって把握することであるからです。（完）

　大変に活発であるが大変に早く忘れて仕舞い、満足するのも大変に容易な肉欲は、情熱の一種に機会を与えることが良く出来ます。しかし、この情熱は恋愛ではありません。家庭の幸せを築く、称賛すべき欲望に関して言うと、それはここでは殆ど賭けに勝つ欲望のものです。私がこれから述べるのは或る側面から言うと賭けに似ている一種の狂気ですが、取分け野心に似ているものです。最大の誤りは、恋愛を動物の欲望で説明しようとすることです。肉の行為は、恋愛においては相手に対する力による証明として欲情を抱く以外に無いのですが、それは自由で合理的で高慢です。誰も狂人を愛しません。如何なる恋人も単に暴力とか不意打ちだけを考えないでしょう。私は恋人に賢明さと近寄り難さを望みます。私の恋人で無いとしても、誠意と幸福と共にあることさえも望みます。若くて美しい女性にあっては、美徳と判断力に富んだ表情を見ること以上に楽しいものはありません。私は、女王であって欲しいと思う女性の裡に欲望とか弱さとか依存心からの甘えがそれと分かる様な気がすることから、主に嫉妬がやって来るのを観察した様に思いました。この観念は詩にはなりません。ところが恋愛は詩であり、人が行い、創り上げ、望む何ものかです。

　しかしながら、それは気儘で自由な何ものかではありません。何故なら誰でも生じる様に、呪うことと崇めることは同時に行われず、その時は愛想が良い人を愛するからです。宿命論者の観念がここでは既に支配していますが、恐らく他の色々な情熱の中よりもより一層そしてより奥深く崇められます。何故なら全ての人間の世界で行われているからです。そこでは数々の表情が何気なく些細な動きからも常に交換されます。従って楽しそうな目とか真剣な目、声の音色とか単なる沈黙の様に、大変に明らかな前兆について考えると、記憶が群をなしてやって来て未来が告げられます。これらの予感は、もしも好奇心が神託の力を借りていなかったなら、屢々間違って仕舞うでしょう。かくして予言が正しいかどうかを知る観念によって、予言が吟味されます。この出来事は新しいしるしを発生させます。そして、それらのしるしの解釈が恋愛の本当の糧であることを分からせてくれるのは、恋愛が障害によって強められるからです。

　又、待って期待することによっても一層強くなります。原因がほんの僅かなものでも、既に大変に感動的に感受する私たちの肉体のこれらの動きを私たちは殆ど注意しません。期待することだけが相手によって動きを麻痺させますし、筋肉的な出来事にも忙しく、もしも他のことに考えが支配されないなら、屢々短気や更に怒りの原因にもなります。もう少し困難な行為への期待が何回も始まると、受験者や演説者や俳優や音楽家たちが知っている様に、一種の軽い病気を催すかも知れません。更に彼らは、そのことを避けられない病気であるが、取るに足りない奇妙なものとして理解しています。しかし、愛する女性を待つことには最早その様なことはありません。というのも時間は自分自身に自問することで過ぎて行きます。従って期待への動揺は思想の中へ這入ります。そして、「彼女は来るだろうか」との質問は、「彼女は私が余り好きでないのだろうか」という他の質問と区別がつかなくなります。作家たちは馬車の響きとかベルの音を何度も描写しました。私たちはどんな音でも構いませんが、取分け期待している不意の音は、身体のメカニズムによって生命の根源まで私たちを動揺させます。そうです、吠える犬にも動揺します。少なくとも人々は面白半分に思うだけです。しかし、これらの情動の感情が自ずから自分自身の

しるしになると、未来は決定されます。全てが蜃気楼であり、全てが不安になって恋する男を騙す様に協力します。何故なら彼が愛されているかどうか、待つことは疑いを生むからです。ところが、その点を考えることもなかったのですが、彼が愛しているとするなら、待つことも最早疑うことではなくなります。

　その様に恋する男を故意に待たせる、余りに悪賢い女がいると私は思いません。但し、男は時間前に来て何時も直ぐに待ちます。どんな情熱も、色々な現実に対する王様の倦怠を隠しています。王様とは、人の力を越えた意志によるものであるとの意味です。しかし殆ど何時も無邪気な気取りの手練手管は絶えず期待を作っています。特に礼儀正しさが多く要求される社会生活や、娘たちに与えられる教育においては、何らかの理由があって、なお一層多くのものが要求されます。私は女性たちが如何に愛するか余り知りませんので、それは知っているかも知れない人に言って聞いてみて下さい。肉の本能が男性よりも意外な運動をして一層広く広がって行く、と私はやっと敢えて言うだけです。そこには又期待もありますし、恐怖も混じっています。従って女性たちは常に都合良く感じられないために、それ以上に包み隠す様に仕向けられます。自然なこの羞恥心と恋愛への何らかの恐れを少し持っている男性たちも又より一層愛されていることに、私は気付くことが出来ました。その時にしるしは待つことになり、稲妻の様にびっくりさせます。下品でわざとらしい気取りが、お喋りの様にしるしを放ち、情熱に水を差します。不幸なことは、自分の義務に結び付いた女性が自分自身と戦い、そのことだけによって気取りの中でも最も危険になることです。従ってそこには企てられる、まさに暗黒の劇があるだけです。悲劇は、悲劇の結果となり得る虐殺よりも寧ろ、長く続く不幸を非常に良く予想して予告し、そこに身を投じる宿命論者の判断の裡にあります。オイディプス（1）は占者と神々が同一人物の中で一緒になっていて、そこには余りに美しい悲劇の仮面があります。（完）

（1）オイディプスは、ギリシア神話で、知らずに父を殺し母と結ばれる。エディプス・コンプレックスとは男の子が父を憎み、母を思慕することである。

第四章　自己愛について

　自分自身に十分満足している人々がいると言われますが、私は一度も見たことがありませんでした。他人から褒められるのを屢々繰返し必要とするのは、愚か者に過ぎません。成功は一種の自信を与えているのを私は知っています。しかし成功に満ち満ちていても、最も普通の感情はそれを維持する必要から苦悩します。気に入らないことは辛いものです。でも、気に入ることは非常に気持ちが良いです。自分だけの算段で人の気に入ることに大変に確信がある男性とか女性とは、どんな人でしょうか。最も自信のある人々でも、礼儀正しさや装飾に包まれて、友人たちによって力強くなります。無為な社交界の悪習や自己のことを思考する嫌悪が殆ど全ての人々を阿諛の追求に身を投じますし、お金さえも使います。この様なやり口によって一種の安心に達します。しかし、これは自己愛ではありません。虚栄心です。誰もがその意味では、褒められると同時に少しは良い気持ちになるので、虚栄心を免れないのは私にも分かります。虚栄心の中から心に触れる何かを私は見付けます。それは無邪気にも他人に救いを求めることです。しかし、この装飾は殆ど持ちこたえません。虚栄心は虚栄心であり、つまらないものです。

　自己愛とは言葉による一つの組合せです。そして、屢々言った様に、言葉には何でも許されています。しかし、どんな愛にも自己の裡に無い何ものかがあります。愛することは自己の外部にその豊かさを見出すことです。私はそれを内部の豊かであると言いますが、装飾とは言いません。そして人が愛するものは自己からであるので、人々が愛することが出来るのは自己ではありません。他人が作る自己のイマージュを愛するのであり、もしもそのイマージュが、愛すべきものであるなら、その意味で社会は気持ちの良い安心出来るものになります。しかし、このイマージュは決して私ではありません。如何なる対象も、如何なる事物も私ではありません。私とは主語であり、属詞ではありません。その上、如何なる装飾も長続きしません。私が行うこと、そのことだけが私のものです。しかし私の裡には何も残りません。習慣や才能を当てにすることは、他人を当てにすることです。私の裡には勇気が残っているだけです。しかし、兎も角も勇気を出さなければなりませんし、身につけなければなりません。勇気が対象になると、勇気を愛そうと思うと、最早勇気はありません。思い出が少しは慰めてくれるなら、それが美しければやはりお荷物になります。私は、大傑作の作品を幾つか書いて最早良いものは何も見出さなかった音楽家のことを良く考えました。恐らく彼は、余儀なくして自分の天才を処罰せざるを得なかったのです。彼は狂死しました。門戸に日の光を取り入れる様にその全てに身を任せること無く、虚栄心を少し取り入れることは多分賢明なことです。

　ここに人は言葉の力を見ます。十分理解せずに覚えた公式からは、最も空虚なイデオロギーが取り出されました。人間は生まれつき自分しか愛しませんし、野蛮なものに違いありません。しかし、社会との諸関係が他の人々を考慮に入れる様になり、自分が彼らを愛するのも彼らのためであるとついに思う様になる限り、自分のために彼らを愛せざるを得なくなります。自己愛から他人愛への移行を大変良く説明している非常に巧妙な仕事が沢山存在しています。もしも孤独と自己愛から始めたならば、直ぐに自分と似たものを愛する様になることを私は認めます。しかし、これは間違った代数学に過ぎません。未開人を認識する限り、彼は儀式によって生活し、共同生活を崇めます。従って未開人は少しも身勝手な利己主義者ではありません。利己主義は文明の

果実であって、未開の果実ではありません。それの緩和物である愛他主義も同じで、未開の果実ではありません。しかし利己主義も愛他主義も、どちらも存在するものではなくて寧ろ言葉に過ぎません。死の恐怖が生活への執着の結果であると私が信じることはありません。何故なら、人が愛するものを何でも愛するのは生活によるからです。愛するのは生活であり、決して人が愛する生活を愛するのではありません。従って全ての人々が生活に気を散らせて、多くの人々が生活を与えています。しかし、或る有閑な老人がついに残されている小さな炎に注意を向けて、医者たちに身を委ねることは十分にあり得ます。彼は生活を愛している、と私たちは決して言いません。寧ろ死を恐れているのです。更に、この哀れな老人の中に何時もあるのは、他人の意見に対する大きな疑念と他人に与えたがっている自分のイマージュです。この他に私が理解した様に、教条主義的精神も混じっています。というのも、精神は何でも支えますし、狂気ですらも支えるからです。要するに利己主義を思考することは、常に悪を思考することであると私は思います。自己に関する思想とは何よりも便宜的なものであり、常に他者への考慮という部分を伴っています。他人の目を気にかけて自分を書いたり自負する文学があり、屢々書かれなくても私は否定しません。しかし、それは礼儀正しさの研究に過ぎません。（完）

第五章　野心について

　年齢順によれば、恋愛の後に来るのは野心であり、野心の後に来るのは吝嗇であると良く言われます。歳を取ると何故恋愛に冷めるのか、喜ぶ方法が如何にして年齢と共に変わるのか、そして如何なる種類の力が老人に現れて来るのか、それらは大変明らかに理解されています。年齢が成熟して来ると、恋愛を既に一種の野心に変えます。自己への確かさ、多くのことへの軽蔑、無関心な様子を取ることがありますが、それらは精神に予測を最良に働きかけます。従って恋に疲れた男は、彼にやって来るこのもう一つの力を自然と働かせます。しかし情熱は力への欲望よりも服従する欲望の方が激しく、卑下した野心であると呼べるでしょう。成り上がり者は自分が通過したそれらの道を忘れられません。大野心家は大いに体裁を作って、決して驚嘆に身を委ねません。あるいは、そんな時は驚嘆を隠します。殆ど感動しないか、感動しても決して表に出さない者は、読書をしてもお分かりでしょうが、一つのメカニズムによって屢々空虚な静かさに達します。その情熱そのものは寧ろ倦怠です。王たちの倦怠は際限がありません。そして私が威厳によると理解する、王のどんな力もそれを行使する者を退屈させます。

　卑下した野心は退屈しません。それは欲し、期待し、不思議がらせ、酷く心配して震え、苛立ちますが、それ以上に崇拝します。神の仕事は難しくありません。程々の権威があるだけで良いし、大きくても小さくても何らかの恩恵を期待させるだけで良いのです。神が気に入るものを見出さないのを何時も酷く心配して、神格化するのは崇拝者です。簡単な礼儀によってさえも気軽さと率直さが野心の苦しみを減らしますが、喜びも減らします。その反対に、一寸した野蛮さが野心に混じると、より一層夢中になって野心に成功しますが、より一層手痛い失敗もします。というのも、懇願者は自分自身を恐れ、全力で自らを抑え、事前に苦しむからです。受験者や俳優の恐怖もそこから来ますが、俳優に固有の恐怖は人目を引きたいと思うことから来ます。嘘つきにとっての条件は、自分の自然な動きを監視して逆らうことです。それは生活の機能を窮屈にするまで、拘縮に対して大きな努力が要求されます。そこからはとっさに嘘をつくと顔を赤くすることになります。わざとらしい嘘をつく前には、自分が恐くなったり、震えたり、熱っぽい期待で不安になったりします。それを神は利用します。というのも、懇願者は何時もこの混乱を神の権威に与えても、真の原因には与えないからです。身体の運動は常に明示して知らせなければなりません。全ての情熱はそこからやって来ます。野心家は権力に身を委ねると、直ぐに権力を恐れることになり、そこから権力を欲しがることになります。その様にして王は恩恵に価値を与え、王に畏敬を与えます。

　それ故に権力には、謁見を与える術においても気取りがあります。多くの人々がそれに捕らえられます。そこへ行かないか安全であるなら、無礼の儘でいるのが最も賢明です。しかし何も要求されないことは何と気楽でしょう。その代わりに要求したなら、直ぐにそれを欲しくなります。もしも何もしない術を知っていたなら、情熱も遠くへ行かないでしょう。私には生き生きと思っていた欲望も、少なくとも行為が無ければ、考えながらいても大変に早く消えて仕舞うことを私は理解しました。しかし最初の行為から、何と欲望が幾つも生まれることでしょう。お分かりの様に、単に一つの意見を主張したからとの理由で、人はそれに固執します。そして二人の友人は少しも気がかりにならない問題についても、活発に議論してもう少しで仲違いしそうになるこ

とが起こります。そこからは、そこに何か隠された憎悪があったのであると必ず結論付け、二人はそれらの原因を探します。だが、無駄なことです。そこに働いていた原因は、声の調子が可笑しいとか、呼吸が苦しいとか、息が詰まっていたとか、結局のところ疲れていたこと以外に無かったのです。説得しようとする情熱も野心の一部です。訴訟人の偏狂も同じです。

　ところで、野心に大変良く鞭を入れる競争に関しても一言、言わなければなりません。最初は、私たちが他人の欲望を見てそれ以上に欲望を大きくさせる情熱への模倣による競争です。従って、それは憎悪や怒りの模倣によっても示します。更に、仕掛けられた策略とか繰返し言われる中傷によっても示します。取分け、喧嘩になる友人たちの軽率な行為によっても競争を示します。侮辱された野心は、家族の中でしか十分に発展しません。そこでは家族全員が家長を模倣したり、家長と一緒に非常識なことを言うのも普通です。善は自然に望まれ、それが善を定義することそのものであると言われます。しかし少数の善を除き、善が善であるのは人々が欲して望んで求め始めるからです。そのことはあらゆる情熱に共通しているものです。だがその上で更に、あらゆる情熱には野心があるのです。（完）

第六章　吝嗇について

　大野心家がいる様に、大吝嗇家がおります。情熱の働きは、何らかの些細なことによって見せてくれるだけです。まさにグランデやゴプセック（1）に探しても無駄です。彼らの広大な企画、強さ、果断な精神、大胆さそのもの、厳密な誠実さ、そして外見に騙されないで彼らが或る人々に所有する気高い信頼を分析するには、商売と信用と銀行に関する広い知識が必要でしょう。不必要な支出への嫌悪には奥深い英知があります。従って、人間の群をより良く支配しているのは権威よりも富によるものであるという見方にも奥深い英知がある、と私は付け加えて言います。知性によって調整された一連の行為そして虚栄や切望や憐憫による動きに対してさえも遙かに高度な、一種の正義に従う一連の行為を情熱と呼ばない方が良いのです。乞食の吝嗇を説明するのに、何らかの奇妙な金銭への愛を捏造する必要はありません。何故なら乞食は十分に分別を弁えるまで乞食の生活を続けるからです。しかし誰が十分に所有していることを自慢出来るのでしょうか。結局のところ欺瞞も略奪も戦争も。埋められた数々の宝物を十分に説明しています。私はその中に決して狂気の痕跡を見ません。

　しかし、屢々浪費と呼ばれている無秩序でしかなく極めて一般的なもう一つの吝嗇の中に、私は狂気の痕跡を見ます。所有したいという欲望があることが泥棒を生みますが、所有権への愛が吝嗇家を生みます。吝嗇家は、事物よりも寧ろその権利をその時楽しみます。そして彼の本来の勝利とは、議論の余地の無い権利を主張し、人々の同意を強いることです。泥棒と吝嗇家の両者の間には瞬間的に、数多くの吝嗇家が動き回っています。彼らは権利を軽蔑することは全くありませんが、特に所有と利用を楽しみます。従って富と力が与えられます。要するに、外見上の権利が彼ら自身にそれらを誤らせているのです。この錯覚は、農民が自分に実力を超えて借金しても仕事に我を忘れる時は、何も軽蔑されません。支払期日の計算間違えや欲に基づいて調整された間違った判断の中にしか、私は盲目的な熱狂者を見ませんし、彼は支払うことを言わせます。自分を当てにし過ぎます。しかし、良く慣れて分かっている仕事の見通しも立って天候が良いことも分かっている時に、この喜びを理解しないのは誰でしょうか。前者は自分から約束し、自分から支払うでしょう。でも悲しいかな、彼は余り支払わないでしょう。

　私は、決して支払わない者のことを言うのに達しますが、彼は欲しいものがあると何でも約束します。これは吝嗇家であり、正確に言えば有害で奇妙で不幸です。田舎の別荘へ行く彼を見なければなりません。彼は支払いませんし、支払うことが出来ずにしっかりと財布を閉じた儘です。何故なら浪費家を喜ばせるのは権利であるからです。彼が見せびらかすのも権利ですが、尤も持っていないのもまさに権利です。十分に堅固な権利と外見上の権利との相違も把握して、混同しないで下さい。富裕者はそれらしく見せ様としません。しかし、借金している人は見た目で生きています。目に見える物を欲しいと思います。それ故に浪費します。浪費家を考える時に、浪費することが獲得するための一つの方法であることを余りに忘れられています。借金した人が浪費してもびっくりしないで下さい。彼にとってはお金は使うためのものであり、少しも反省するためではありません。何故ならお金の権利は貸主にあるからです。その様にして狂った借主は狂った消費を余儀なくされます。狂った浪費家も、実際の強固な富によって治ることが屢々注目されました。その理由は分かっています。この借主の幻想を、如何に全てが強化しているのか

を注意して下さい。借主の権利は、彼が支払う人々によって疑われることはありません。貸主も支払期日まで姿を見せないために、貸主にも同じく疑われません。浪費家には注意すべき努力が多くある筈です。しかし上手に身を守っています。浪費家は金勘定を考えることがないと良く言われますが、屢々それ以上に計算高いのです。訳の分からないものにするのに熱心です。そして、お分かりの様に真実を求めないなら、決して示されないのです。他の人々の沈黙の中に、まさに感動的な証拠が残されています。それはお金を支払うことと、受取ることの行為です。だがその上更に、取得した物が気に入ることは長くなく、他の者がそれを安い値段で手に入れるでしょう。

借主の情動は、他のことに関しては侮辱された野心家の情動に似ています。そして同じ誤りへ導きます。それらには待合室で話し声聞くのと同じ誤りがあり、恐怖と羨望が混じったのと同じ崇拝があります。そこからは本物の金持ちに似ること、そして使えるだけのお金を使って、愚か者たちの眼前で圧倒することさえも強く望む様になります。しかし、これらの消費は公然と行われなければならないので、借主は決して手を貸しません。洞察するのが容易で大変に一般的な様な人々のことを十分に話しましたが、病から治るためには、その種の人は軽蔑されているのも同じであるのを知れば十分です。従って彼らは、自分たちだけで仲間を作っているのです。（完）

（１）グランデやゴプセックは、バルザック（一七九九～一八五〇）の小説『ウージェニー・グランデ』（一八三三）と『ゴプセック』（一八三〇）の各主人公であり、吝嗇で有名な人物である。

第七章　人間嫌いについて

　完全武装した二人の臆病者が或る夜、ダスニエール橋（1）で出会い、流血になりました。この個人的な喧嘩を説明するのにこれ以上容易なものは何もありませんが、分析するのにこれ以上有益なものはありません。用心が行過ぎるとそれは、如何にして情熱が暴力に達するのかが分かります。実際に原因が無くても恐怖の動きは、私たちには大変に強く辛いもので、私たちはそこに何時も予告を見たがります。二人の臆病者は各々が歩く速度を遅くして顔を背けます。用心深い策略以上に巧妙な攻撃と、似ているものは何もありません。その恐怖心は各々の裡で倍加されました。彼らのうちの一人は、恐らく早く通過したいと思っていたのです。もう一人は武器を取りました。以上は、狂った疑念と様々な兆候からの間違った解釈の結果です。

　青春時代に至る所で敵を見るのは、自然ではありません。しかし若者は、礼儀上の約束事を最初に信じたために、大人になって大変に疑い深くなることが屢々あります。精神的に安定していて幸福感も強くある状態には、筋肉も血液も活発で不自由無く働き、微笑が伝えられることになります。若者が周囲から共感を感じていると思う様になると、友情の予感になります。そのことでしるしが交わされて協力し合います。何時もそのしるしにとりつかれます。私は、初めから余りに容易な人を気の毒に思います。他人を余り期待してはいけない方が良いのです。というのも、一人の人間の思想と意図に関して何も決して予測しないためには、高度な英知が必要であるからです。失望から不信への道が、如何なるものであるのかを人は見抜きます。多くの人は、そこを不用意に走り回りました。従って彼らは又、不信にも騙されて仕舞います。しるしには事欠きません。如何なる人でも、疲労や気分や心配や後悔や退屈や光線の悪戯によって、神託を下します。厳しい視線とか、放心した視線とか、何らかのいらいらして待ち切れない様子のしるしとか、拙い時に見せる微笑以上に良く騙すものは何もありません。それらは蟻たちの運動の様に生命の効果です。その人があなたのことを考えるのは屢々遙か遠くです。もしも彼が少なくともあなた自身と同じ疑念を抱いていたなら、同じ原因によって彼はあなたに忙殺されます。孤独と反省がこれらのしるしに機能します。かくして敵が生まれます。そして敵があなたの思想に腹を立てる時に、あなたの思想を見抜くや否や、かくして敵が生まれるのです。しるしが如何なるものであっても、それは常に狂気です。人間たちはそれ程、奥深いものではありません。

　真の観察者は、しるしへのこの注意深い視線を決して持ちません。彼は、何も説明しない意味深いこれらの運動から顔を背けます。彼が人間を把握したいのは静止している時であり、運動の時よりも寧ろ形ある時であり、最も見づらい星々を見られた時の様に、ちらっと見える時でもあります。しかし観念で観察したならば、彼は何時も見抜き過ぎることに気付くでしょう。そして見抜くためのこの間違った技術が自分自身に働いたならば、ご存じの様に大変に危険な一種の狂気へ導くかも知れません。しかし、この苦い経験は常に余りに成功し過ぎます。優秀な生理学者として判断しなければなりません。「こちらに疲れた筋肉がある。あちらに動きたがっている足がある。これは欠伸を堪えている人だ。あそこには空腹の人がいる。光が眩しくて見えないのだ。カラーが喉を締め付ける。履物が痛い。コルセットの具合が悪いのだ。この椅子は座りづらい。それこそ体をかきたがっている人だ」ということです。私は、正当な不平を時々主人に言っていた理屈っぽい女性と知り合いでした。彼女は屢々自分自身でも議論を再開しましたが、それは

妥当なことを上手に言ったかどうかを自問するのです。だが、主人は耳が聞こえない人でした。
　生まれつきの原因からでないとしても、誰も神経的発作を理解しようとしません。従って原因となる本当の観念を把握するや否や、怒り自体も最早騒音に過ぎません。脅かしも同じです。告白を信じないのは少なくとも困難です。しかしながら信じてはなりません。何故なら、話しながら作り話をする夢の物語の様に、間違いのある告白であるからです。人を許す真の道は、動機によって間違いを理解することではなく、寧ろ原因によって理解することです。或る意味での寛大さは、別の意味での厳格さでもあります。というのも、小さな間違いでも最悪の間違いでも、常に怠惰な王に達するからです。それは、如何なる間違いも等しいものであるとストア派の人々に言わせたことです。そこから私が忠告するのは、余り自分自身を嫌いにならないことです。人間嫌いがそこまで行くことしか信じられないのは良くあることです。他人を裁きたいと思っても、それは自分の態度や言葉や行為についても全く同じだけ間違えます。言って仕舞って後悔している言葉に、熟考された言葉はどの位あるでしょうか。ところが私たちの間違いは、後になってそれらを考えることであり、ありもしない悪意又はもっと悪く根っからの悪人を、私たち自身の裡に探すことです。このメカニズムには悪人も善人もおりません。あなたと繋がっているものは何も無く、欠点にも美点にも繋がっていません。要するに人間たちは親切であると信じることと、悪意であると信じることの二つの間違いがあります。これらの二つの間違いは、お互いに関連しています。（完）

（１）ダスニエール橋は、ル・アーブルの南東約五〇キロメートルにある町アスニエールに架かる橋である。

第八章　気で病む人々について

　ありもしない病気を信じる数少ない人々のことを、ここでは問題にしていません。殆ど全ての場合が想像力による不安から自分の病気を重くしたり、同様に病気になるのを恐れて病気になる数多くの人々を問題にしています。この想像力の力は良く知られていますし、それらの結果は十分に調査されました。しかし、それらの原因に関しては誰もが知らない儘でいる様です。確かに私たちは如何にして観念が肉体の運動によって現れるのか知りませんし、これからも決して分からないでしょう。肉体の運動が無ければ、観念も決して形づくられないことが単に分かっているだけです。最も良く知られているこの関係を、即ち私たちが判断して少なくとも筋肉を動かすことを考えるなら、想像力の効果の大部分を、いや恐らくその全てを既に説明しています。私たちは、ナイフとか首つりで、あるいは絶望から身を投じても自殺出来ます。これらの行為を抑制するにも、もっとゆっくりと働きかけますし、やはり殆ど力が要ります。

　病気は、マッサージとか按摩が治る手助けになり得ます。だが、短気とか激昂の運動は治る妨げになり得ます。実を言うと、そこには実際に想像力の諸効果があります。それは空想においても、それらの効果を生む肉体の運動だけが現実のものです。しかし、目には少しも感受されませんけれども、想像力とは別に数々の運動が健康に対して全く同じ様に働きかけています。期待と準備がどんなものであっても、呼吸運動は遅くなって苦しくなり、停止することさえもあります。これは私たちのメカニズムに由来します。私たちの全ての筋肉をもっと堅固に結合させるために、胸が十分な空気で一杯になるのを要求します。その上、このことは自然に行われますし、数々の筋肉は隣接する筋肉や神経の伝達によってお互いに目覚めます。ところが長い坂道や階段を上る時の様に、時々は間違った判断がそこに付け加わります。その時、私たちは息を止める一種の決心をします。そして心臓も又、機械的に反応します。この例で分かるのは、臆病から待つことは生命を実際に鈍らせます。心配は私たちの胸を圧迫しますので、窒息させるのではないかという心配が苦痛を付け加えます。水を飲みながら喉が詰まる時、全身で動揺する様な恐怖が起こりますが、体操をして慣れる様になるのは可能です。それは誰もが試みることであり、羽虫が目に入った時に決して目を擦らないのも同じです。

　もっと重くて治りの遅い病気においては、徴候への期待があります。それは自己の監視と、治りたいという意志が間違って管理されると害になります。不安と自己への単純な注意力さえも全ての筋肉を引締め、それなくしては決して前進せず、栄養摂取と排泄を鈍らせます。死ぬことへの恐れによって、生きることに何とか堪えます。意志では決して直接の行為にならない筋肉組織全体があり、それは消化運動を調整するものでもあります。しかし、それらの筋肉が他の筋肉からの伝染によって、決して拘縮したり痙攣したりしないことは不可能です。更に酸素を含まないだけでなく、無駄な働きによって汚れる血液があることも付け加えます。不安が抑えられると肉体を決して動かしません。しかし激しい努力同様に、不安も疲れさせます。これらの諸結果は徴候として順番に影響を及ぼします。恐怖の諸結果は恐怖を増大させます。思想は生命の息を詰まらせます。

　不眠は奇妙な病気で、屢々単なる自己の処罰の結果です。自分のことを考えないとするなら、目覚めていることそれだけでは何も辛いことはありません。しかし、情熱家は屢々休息としての

眠りを待ちます。骨の折れる思想が無くても、眠れないでびっくりして不安になることがあります。そこから辛抱出来ない拘縮を生じ、やがてそれらの運動が眠りを遠ざけます。何故なら心配することは目覚めていることであり、望むことも目覚めていることであるからです。この闘争の辛い記憶は昼間の時間帯も費やし、夜間は予言によって有害なものになります。予言によって、と私が言うのは宿命論者の偶像は崇拝されるからです。病人たちが眠っていたことを証明された時、腹を立てていらいらした病人たちと私は知り合いになりました。その治療は先ずこれらの原因による不眠を理解することです。従って、眠るための注意から解放されることです。しかし、如何なる行為も構わずに行うのを学ぶ様に、眠りたいと思う瞬間から殆ど眠るのを学べるのです。先ずは動かずにじっとしていることですが、如何なる硬直も拘縮も無く、全筋肉を柔らかにして緩めながら、重力に従って身体の全ての部分をまさに楽な姿勢に専念することです。従って不快な思いがあっても考えないことです。これは思っている以上に容易なことです。ところが可能と信じなくなると、その時には不可能になることを私は認めます。

　憂鬱症患者のことになりますが、彼の病気は決して悲しみ以外にはありません。悲しみは実際に病気であり、ゆっくりと窒息する様なものであり、恐怖による生命の疲労であると理解して下さい。悲しみは必ず実際の不幸になります。不幸を待つ人は間もなく当然に不幸になるのを私は認めます。しかし不幸になると考え過ぎると、不安な身体に更に直接的ではっきりとした病気が発見されます。この予感は悲しみを悪化させますし、直ぐに立証されます。それは地獄の門です。幸いなことに大部分の人々は他の諸原因によってそこから逃れますが、することも無く孤独でいるとそこに戻るしかありません。これに反して、それに同意しても人は何時も悲しいと理解することは救済策として些細なものではありません。そこから分かるのは、死ぬことの欲望はあらゆる悲しみと情熱の底にあり、死ぬことの恐怖もそれと相反するものではないということです。自殺するにも色々なやり方がありますが、諦めて自己放棄することが最も一般的です。宿命論者の観念と結び付く自殺することへの恐怖は、あらゆる情熱によって大きくなるイマージュがあり、屢々それらの情熱の最後の結果となります。人は思考するや否や、死なないことを学ばなければなりません。（完）

　ここで重要なのは〈秩序〉よりも内容です。数々の情熱を指し示す用語は、各々の情熱の中に全ての情熱があると気付くのを妨げるものではありません。私は、これらの対象に従って一方の情熱を幾つか区別することが出来ました。これからは、恐怖や怒りや涙であるこれらの激しい発作を述べることが重要です。これらの激しい状態は、学派においては情動と呼んでいますが、実際の危険や侮辱や近親者の死の様な外部の出来事によって、突然に訪れるかも知れません。しかし私が調べるのは、取分けこれらの発作を強める力のある限り、情熱との結び付きです。もしも賢者の教義が本当の病気に対する武器を探究していたとしても、その教義は期待し過ぎになるでしょう。もしも想像上の病気という一方の病気を治すことが出来るなら、それだけでも大したものです。

　良く考えてみると、恐怖による恐怖以外の恐怖は決して無いのです。行為が恐怖を消散させることや、危険がはっきりと良く分かれば、屢々恐怖を鎮めることは誰もが認めることが出来ました。その代わりにはっきりと知覚出来ない時は、恐怖が恐怖そのものによって大きくなります。それは例えば演説とか試験が近づいて来ると、際限なく恐怖も良く見えて来る様なものです。驚きの結果から屢々急速に恐怖が増大し、同様に徐々に減少する恐怖の運動が続きますが、それは血液の循環に対する筋肉の準備の結果も良く理解させてくれます。全ての筋肉の突然の収縮によって小さな血管も突然に圧縮されますし、血液の流れもより一層柔らかな部分へ送られます。この運動は侵入して広がる熱の感じと、手足の先の冷たさから屢々分かります。何故なら血液は力強い筋肉の中を循環することでしかそこへ達しないからです。筋肉が弛緩すると心臓の迅速な動悸も伴いますし、それは一時停止した呼吸も自然に連続して行われます。

　それはどきっとするだけです。でも、恐怖は緊張の緩和に続く小さな驚きによって、要するに行為の無い強い不安によって始まり増大します。あるいは寧ろ恐怖は、動揺している感情であり、私たちはその時にその原因を探します。羊飼いは羊たちの鈴によって知らされますが、羊たちが怖がっているものを探す様なものです。勿論、私たちの筋肉の群は大変にもっと身近なものです。怖いこととは最早自問すること以外の何ものでもありません。何時も周囲の対象や、屢々推測とか一瞬の幻影や、それらを可能にする行為の無いものへ向かう運動を伴います。これに対して理性の働きは何も出来ません。というのも、注意力は筋肉の混乱をもっと悪化させるからです。より一層良く聞くためには呼吸さえも抑えます。理屈が分かれば安心します。そして、こう言って良ければ、対象の無い不安がそれ自体によって次々に生まれるのをより良く味わうには、休息に戻るしかありません。実際の対象や危険は、少なくとも恐怖そのものの瞑想から私たちを引離します。そして悲惨な場合は後でしか恐くなく、そしてそのことを考えている時であるのを誰でも皆が知っています。もしも、その時にしるしが逃げたとしても、体と体の小さな運動はまさに現実のものになり、常にそれらの運動がどんなに小さくても注意を向けるや否や、その結果によって感受されるものになるからです。

　行為はこの病気から救ってくれます。しかし不安と躊躇が悪化させます。もし仕事が出来ないなら、既に待つことは苦痛です。恐怖はまさしく、やらねばならない行為が如何なることかを知らずに待つことです。しかし大変に難しい小さな行為でも行う術を良く知るために準備する限り

、直ぐに気が楽になります。何故なら、先ずは体験して感じることには少しも注意しないからです。同様に、行為は筋肉を働かせて集中させます。すると血液も自由に流れて心臓も負担が少なくなるからです。それに反して待つことの恐怖は、恐怖そのものです。それ故に夜間とか墓場とか水上とか道の曲がり角の様に、予感から臆病になる人々がおります。逢引きにも恐怖は事欠きません。ここでは、自分自身を知るとは如何なる意味があるのか、はっきりと分かります。自分を弱くて無力であると思う人は、きっと実際にそうなります。行為は屢々希望を越えるので、行為することがなくなります。勿論、耐え忍ぶことになります。従って自己の観察とは、まさしく狂気が始まることでもあります。（完）

第十章　怒りについて

　怒りは屢々恐怖から生まれます。行動したり単に話をしたりする最初の機会は、その時には筋肉のあらゆる動揺に向けます。しかし、恐怖の震えという何らかの行為が残っています。全ての筋肉がこれに協力します。その動揺は固有の効果によって更に増大します。大変良くご存じの様に、子供にあっては全力で叫びます。そして自分が発するわめき声と、自分が聞く騒音で更にもっと叫びます。ここにあるのは恐怖でしょうか、怒りでしょうか。誰にも分かりません。両方が混じっているのです。大人にあってはどんな怒りにも自分自身への幾らかの恐怖が常にあり、同時に怒りがまるで私たちを解放する様な安堵への希望も常にあります。そして怒りが行為へ変わるなら、私たちを解放します。しかし怒りは屢々態度や言葉に出て来ますし、時々は雄弁にも出て来ます。そんな時には傍から判断出来ません。というのも活発で困難な行為というものも、屢々怒りのあらゆるしるしを与えるからです。しかし効果を上げるには先見の明と自己抑制を前提とします。犬が猟師の役に立つ様に、怒りは勇気の役に立つことが出来る、とプラトンも言っていることでした。

　しかしながら怒りは、私の足や腕や舌の様に、決して私の言う通りになりません。怒りは何時も望んでもいない、とんでもない処へ導くことを誰もが良く感じています。怒りが最早単なる痙攣とか神経の発作でなくなると、多分怒りの中にはまさに人が認める以上の偽装もあります。人は何時も行うことを学ぶ様に、怒り出すことを学びますし、怒りの落ち処も学びます。人は自己を考えながら行動すると、多分怒りになります。自分のどんな力も気にしないで行えることを、私は正確に知らなくても理解しています。フェンシングをする人には、行う術を心得ている動きがあります。しかし、もう少し速さを強いると、いわば自分自身を乗り越えるには、あらゆる危険をおかして動物になって自由にならなければなりません。それは瞬間の怒りの様なもので、最初は姿勢と幾つかの運動で準備し、次には鉄砲を撃つ様に発射されます。しかし怒りに任せての運動は直ぐに調子が狂うことも経験します。それ故に、お分かりの様に人を説得する時の怒りは、突然の発作で前進し、反省や自己の回復によって中断します。その上、新しい行為をする瞬間から、これからも行うのか、そして如何に行うのか分からないのは明白です。つまり恐れは真の即興に先立ちますが、怒りは常に恐れを伴います。

　それ故に私たちが十分に先も分からず思い切って行う度に、怒りも少しはあるでしょう。怖いけれども行うことは、多分怒りそのものがあります。これは仲間の会話にも観察されます。怒りの最も小さな震えとか、あるいはお望みなら話声の中での雄弁による最も小さな震えは、怒りをそらす人々に聞き耳を立てさせます。彼らは笑いを生む何らかの無邪気な機会からその怒りを鎮めます。怒りとは、徴候であり即座に対処するものであり、後のことを見ないで新しく何かを言うものです。思い切って言えないことを言いたいと思うことと、怒り出すことはそっくり同じことです。臆病な人や嘘をついた人に共通している、顔を赤くする人は、多分怒りが隠されているのです。怒りは屢々礼儀の上で長い間嘘をついた結果です。沈黙を守る恐怖の後に、話をする恐怖があります。しかし良く注意して下さい。私が言おうとするのは病気による恐怖に限定せずに、意外な出来事への恐怖であり、これから起こることです。それ故に真の恋愛の中にも沢山の怒りを見ますし、そこでは不快感を与えたり気に入られないという恐れが生むのは、激しい怒りと

共でないと思い切ってやってみないからです。従って私に見せてくれる結果がどんなものであっても、憎悪からであるのは難しいと思います。愛と恐れからであり、それらが私たちの罪悪を十分に説明しています。

怒りは、それ故に常に自分への恐れであり、正確にはこれから行おうとすることへの恐れであり、自ら準備することを感じることです。それ故にあなたに恐れを包み隠して偽るための機会を与える人々に対しては、屢々怒りを抱きます。その時には極めて普通の言葉でも震えがあるのが分かります。不謹慎はそのものだけでも無礼です。恐らく無礼は不意なものでしかありません。従って怒りは沢山の方法で礼儀と結び付いています。行為と共に進んで殆ど思想の無いこの怒りに触れないとしても、態度や言葉が気になって心配して誰もが社会の中で避けられないこの強制から真の怒りが生まれるとまさに私は言います。 従って如何にして怒りが些細な原因によっても、法外な大きな怒りになり得るのかがお分かりになると思います。というのも、怒ることは長い間自分自身を恐れているからです。それ故に私は憎悪を、怒りの原因とは見ないで寧ろ怒りの結果であると理解します。憎むことは、これから自分が腹を立てるだろうと予想することです。それ故に傍から見ても決して弱くないと思われる憎む理由を見付けるのは難しいのと同じ様に、憎む理由が分かっていながらも、憎しみを抱くまで至らないことも屢々あります。このことを理解するのは、心の平和にとって大切であり、些細なことではありません。怒りを抑えて我慢することは困難ですが、怒りから憎悪への飛躍は決して賢者が行うことではありません。（完）

第十一章　暴力について

　誰もが戦争行為に熱中して来ました。そして事物に対してさえも、そして屢々非常に些細な原因であってさえも、熱中して来ました。 読者が通常の生活を注意して調べることを私は望みます。読者は、色々なもので結ばれた情熱の効果を幾つも発見するでしょう。殆ど全ての人々は、体操をすることもなく生活します。彼らの生活は、強制と堅苦しさと臆病に溢れています。本心を偽る礼儀においては、慎み深くて困った様な多くの行為から成るのが、社会に対する多くの敬意です。震えや赤面や血液の移動を示す熱い波は、武装された平和状態の徴候であり、自己に対して激しく腹を立てるものです。想像力はこれと同じ道に続き、筋肉を解放するために想像力そのものによって進みます。かくして誤って調整された思想が力による解決に陥るのは容易です。あらゆる野営地にはその様に戦いの道について考える人が何人もおります。法は、監獄と絞首台と銃殺を欲します。そこから際限の無い不幸が生まれます。最悪の不幸は恐らく正義が権力によって行われることです。というのも、それは正義を憎むか悪を愛する様になるからです。しかし、この点では間違った混合しかありません。何故なら思想は法を肯定し、決してそこを譲らないからです。しかし肉体はやはり行為を必要としています。その様にして闇夜に何条もの光が生まれます。激しい怒りが思考する義務を明らかにします。正義は復讐される前に眠ってはならない、と情熱が言います。しかし、先ずは眠らなければなりません。もしも人々が苦労しないで全てが整理されて幸福な時間をより一層多く経験したなら、そこに身を置き始めた時に全てが行われる程、辛くて困ったこの運動を思想として受け取ることは決してないでしょう。そこでは私が思うに、他人の称賛による以外には論証として価値がないのです。これらのことに囚われた男が壁を通して、あるいは天窓からの様にして私に聞かせてくれたのは、なかなかためになることでした。彼は、他人の考えを変える思想の力は既に、彼には一種の暴力の様に見えると言っていました。そうです、多くの人々にとっても思想は製造業者であり、常に翼を生やしている勝利の女神です。現実には、私は私について論じる作家が少しも好きではありません。雄弁が何の価値も無い理由の一つです。精神は孤独でなければなりません。

　戦いは全ての情熱の終わりであり、情熱の解放の様なものです。その様にして情熱は全てがそこへ行きます。誰もがその機会を待っているだけです。恋人が不貞な人を罰したいとか、お金持ちが貧乏人を罰したいとか、貧乏人がお金持ちを罰したいとか、不正の人が正義の人を罰したいとか、正義の人が不正の人を罰したいことは、決して真の平和状態ではありません。思想は最早その時、針に刺されるだけで不眠になるだけです。その様にして自然の諸原因は戦いの中に、戦いの嫌いな人々も又投げ入れました。これらの思想は大きな運動とか束縛されない自由な怒りによって終えることしか出来ませんでした。従って為政者たちが一つの解決として、あるいはヴォルテールが言っている様に、五月蠅い連中を片付けるために、戦いを考えていると仮定する必要はありません。戦いは解決の一つではありません。それが解決になります。嫉妬した男は喜んで殺しますが、恐ろしさはその後にしかやって来ません。

　以上が戦いの中身です。もしも、それらの形式を扱いたかったなら、一冊の本では殆ど十分ではないでしょう。しかし、野心や病気や高齢による全ての怒りが称賛と栄光と共に、大変に良く表現される集団の情熱による力を認めないのは誰でしょうか。如何にして模倣と恥辱が最良の若

者をそこに投げ入れるのか、そして如何にして早熟した情熱がもっと上手に最悪の戦いをそこに投げ入れるのかを同じ様に見ないのは誰でしょうか。結局のところ如何にして、徴兵官たちの老獪なやり方が常に状況に合わせて以前よりも上手く強制を包み隠して、徴兵の時には長く微笑しているのでしょうか。取分け宿命論者の観念は、ここで多分予言者たちの激しい怒りや現場の力によっても、他のあらゆる情熱の中よりも、もっと力強いものです。というのも、私たちの不幸が認めることは、予言を告げる者たちが決定する者たちであるからです。どんな場所でも要求するでしょうから、このテーマは私が外したかったものです。しかし、私の考えではこのテーマは全てであり、この本全体では戦争についての考察しかありません。そこから単にその他の言葉の選択によって、余りに人を感動させる諸イマージュから離れる様になりますが、それは戦争に対する戦争であると余りに呼び過ぎるものでもあるのです。（完）

第十二章　涙について

　涙は、鼻孔の中心にある血液の緩衝組織に関係している自然な出血の一種と考えることが出来ます。それ故に涙は、鎮静作用で発作を止める様なものであるのが分かります。幼い子供の顔には良く見られるものです。それは筋肉の大きな働きの徴候である動揺の波を形作っているのが分かりますが、行為にはなりません。この嵐は発作の激しさに応じて、最後には笑ったり涙を流したりして終わります。大人においては、死とか狂気へ導くかも知れない極端な拘縮状態に対する好ましい解決として、医者たちは涙を考えます。そこから理解出来ることは、涙を流すのが私たちの最も奥深い喜びを表していることです。しかし何時も感動や激昂の後です。崇高なものにも私たちは涙を流しますが、恐らく二つの働きによります。つまり崇高なものは、最初の瞬間に私たちを圧倒しますが、直ぐに判断力が理解し支配します。そこから至上の絶対的感動が広がってこの世を覆います。それから驚きの反動で、涙が静かに流れます。思いやりの心が無い多くの人々が劇場へ泣きに行くのにも、びっくりさせられます。彼らに真実の力が瞬間でも感受されるためには、彼らの周りにも朗読や表象の力が必要です。恐らく、その時は幾らかの自己への回帰と憐憫が混入します。それ故に直ぐに騙されて仕舞います。恐らく観客は自分自身も騙されているのです。多分、彼は失うものは何も無い憐憫に酔っていると思っています。喜びも、私たちが苦しい限りは私たちを騙します。

　涙も又、苦痛の激しい発作とか、寧ろ激しい怒りの後に続いて流れます。それらの涙は従って、何時も鎮静とか慰めのしるしになるに違いありません。従って涙は、本来は決して苦痛のしるしではありません。苦痛のしるしは寧ろ嗚咽であり、その後に何時も涙が流れます。恐怖は、恐れと怒りが混合した様なものです。それは持続出来ない拘縮ですが、突然に終わるものでもありません。最初の緊張が緩和して、涙が最初に波となって流れた後で、不幸な思いが再び現れて痙攣が続いて出ます。その不幸な思いは更にもう一度、自ら死ぬ様に感じますし、再び涙を求めます。間もなく彼は何もかも諦めて、涙に身を任せます。しかし激しい怒りが突然に再び戻って来ます。嗚咽が、肺腑のぎくしゃくして乱れた動きによって起こります。それらの嗚咽は、中断された溜息でもあります。この溜息は、苦痛の思いが少なくとも一瞬でも失くなると、拘縮が自然とその後に続きます。

　人は泣くことを学ぶ様に見えます。何もかもが上手く行かず、自分に対する圧力が尻込みさせる時になると、人は涙を求める様に見えます。子供たちは涙に身を委ねます。従ってそこに身を隠しますが、最早自分の苦しみを見ないためです。嗚咽に堪える強靭な人間は辛い時間を過ごしますが、涙に身を委ねるや否や非常に激しく泣く、自分自身の弱さを持った感情からも逃れます。何故なら非常に激しく泣く時は他人に望みを繋いで、最早自分を当てにしないからです。涙は人を鎮静させると私は言いましたが、肉体的に真実なだけです。半分だけしか真実ではありません。涙に身を委ねるや否や、生命を吊して素早く殺して仕舞う絶対的絶望からは逃れられますが、同様に自分自身の無力さは十分に味わうことになります。その無力さは突然努力しても、直ぐにその後で駄目になって現れます。熟考と判断力によるのでなければ、人間はこれらの悲劇的な痙攣を純粋なメカニズムへ送ることになり、自然に成る様にしか成らない許可を与えます。その時には人は泣きますが、嗚咽することはありません。そして更に雹の被害にあった農夫の

様に、涙を通して自分の不幸をより良く見分けてから、もう不幸を限定しにかかります。
　涙には羞恥もあります。礼儀上は余り涙を見せないことになっていて、それはお互いに理解しています。というのも、相手が恐らく隠したがっている苦しみを聞くのは、少し無作法過ぎるからです。従って喪に服している女性たちは、顔をヴェールで隠します。しかし、会葬者たちは決してヴェールをしていません。その理由は恐らく涙の伝染が、弔意を表しに来る人や悲しみの原因が知られて公表されている人にあっては良いことであり得るからです。以上は儀式の知恵であり、そのことについてはこれからも十分に話すことになるでしょう。でも、今はもう十分ですし、恐らく十分過ぎます。何故ならこれらの涙の話は、決して狂気ではない一種の不幸を一人ひとりの裡に寧ろ目覚めさせるからです。そして私は既に言いましたが、思慮深い哲学はそんな不幸に関しては決して取扱わないことにしているのです。（完）

第十三章　笑いについて

　微笑は笑いの完成です。というのも笑いは直ぐに鎮まりますが、常に不安があるからです。しかし微笑には、どんなものでも何ら不安も抵抗もなく、緊張が緩和します。それ故に母親が子供に微笑する以上に、子供は母親にもっと上手に微笑すると言えます。従って幼年時代は常に美しいものです。しかし、どんな微笑にも幼年時代のものがあります。それは忘却と再開です。全ての筋肉は休息して気軽になりますが、主として頬と顎の力強い筋肉は、怒る時や注意している時には収縮されます。微笑には注意することがありません。両目は、中心の周りにある全てのものを見渡します。それと同時に呼吸も心臓も、のびのびと自由に働き、生き生きとした顔色をしていて健康的な様子です。疑念が疑念を呼び覚ます様に、微笑は微笑を呼び覚まします。微笑は自分の相手や周りの人々全てを安心させます。それ故に幸せな人々はどんな人でも彼らに微笑する、と良く言います。更に微笑によって、見知らぬ誰かの苦痛も癒やすことが出来ます。それ故に微笑は、自分の情熱そのものや他人の情熱に対する賢者の武器になります。その時に微笑は情熱の中心や力の中に触れるのであり、決して観念や出来事の中で触れるのでなく、微笑することが出来ない武装された怒りの中でも触れるのです。あらゆるものの中にある精神の美徳は、何事においても公平な重要性を各々のものに与える言葉の選択と自由な使用によって、それらの情熱を排除することにあります。そして、小さなものは小さく表現しながら大きなものは驚くことなく、それらの大きさの儘にして置くことことです。精神が無いと決して自由な会話が救われないことを理解する様に、私は自由な会話の危険性を幾つも十分に指摘しました。勿論、最も深い意味で微笑そのものの中には精神があります。というのも自分自身で限定して、見るからに遠く隔てて置いた多くのものに驚嘆することは、愚かさの最後の結果であり、最も隠されたものでもあるからです。偶像崇拝は全てがこの恐怖の中にあります。その代わりに〈神〉は自らのイマージュに微笑します。この動きは形を完全にさせて解き放します。その様にしてあらゆる偉大さが準備された力によって増加し、易々と完成します。その顔立ちとは、その報酬です。

　笑いとは痙攣の様なものです。その点では嗚咽に似ています。しかし思想に対する姿勢は全く反対のものです。何故なら、嗚咽においては思想は緊張させていますが、反対に笑いにおいては緊張が弛緩されているからです。もしも驚きが強かったならば、少なくとも弛緩も驚きの再発と共に不規則に起こります。笑いの動きである肩を揺らすことも忘れない様にしましょう。驚いた結果、自然に急いで肩を上げて、肺を膨らませる準備をします。もしも、その決断が無視されると、肩は直ぐに再び下がります。肩の高さは笑いの要素の様なものです。笑いが肩を揺らす様になるとそれ故に、いずれにしても重要な外観を課す必要があります。従って安心しても心配せざるを得ず、心配しても同様に必ず安心します。笑わせる術にはこの外観を支持することがありますが、確かに判断に対してあるのです。滑稽さは良く模倣された尊厳の中にありますが、人を騙すことは出来ません。それ故に高所にいれば不愉快なこと、怖いこと、優しいこと、つまりどんなことにも笑うことが出来ます。しかし、もしも決して劇場の外観が無いなら、つまり私が理解するに完全に表情豊かな外観が無ければ、決して笑いも無いでしょう。その上で人は笑えますし、取分け進んで微笑出来ます。そして情熱に対してこれらの動きが最も力強いので、微笑は意志の中で最も高級なしるしであり、前にも殆ど言った様に理性の特性であるとさえ私は言いた

いと思います。
　しかしながら、ご存知の様に痙攣的な笑いには何か機械的なものがあります。突然の弛緩は他の筋肉を再び動かして、屢々継続出来ない他の拘縮まで行くと思わなければなりません。そして均衡を再発見出来ずに、反対の運動によってそこで休息するのです。それは突然の笑いにおいて起こることです。そしてご存知の様に、人は良く子供たちを笑わせますし、取るに足りないが鋭く繰返す些細な攻撃によって大人さえも笑わせます。同様に或る種の精神は、全く何でもない言葉であっても機敏に予測することも出来ない重大さを巧妙に与えて笑わせることが出来ます。以上は冗談のことです。冗談が既に機知という美しい名称を付けて貰っているのに対して、情熱は真面目に考えると大変に恐ろしいものです。精神を機知とする意味の拡大は一つの警告の様なものです。鍋をひっくり返す伝説上の五月蠅い妖精たちの様に、精神は最良になり得ない時には眠らずに監視して、救い出してくれるのです。（完）

第六部　美 徳

第一章　勇気について

　動物たちにあらゆる種類の感情と意志を付与する考えを持っても、やはり最も獰猛な動物でも勇気そのものがあると推測することは出来ません。動物たちが一瞬でも最も決定的な大胆さのイマージュを与えた後でも、最も単純に世界から逃げ出すか隠れて仕舞うので驚異なのです。人間は屢々理性によって定義されますが、この定義はあらゆる人々に適用します。もしも情熱の中に理性が認められる術を知ったなら、狂人にも適用します。というのも、間違えるのも取るに足りないことではないからです。しかし、勇気によって人間を定義することも出来るでしょう。というのも最早勇気以上に普通に言えるものは何も無く、大災害とか戦争においては誰もが動物の激しさが無くても、容易な運動によって最も恐ろしい状況を越えて立ち上がるからです。人間嫌いは、最も美しい美徳は最も普通のものでもあると誠意をもって考えるべきでしょう。彼は高貴な性質を持った人を好きになるでしょうし、自分自身も又好きになるでしょう。

　私は同じく、恐怖によっても人間を良く定義します。というのも動物が怖がるとは考えられないからです。動物は逃げますが、人間と同じに怖いのではありません。何か弱い感情でも動物に残そうとする偶像崇拝のあらゆる努力は、不幸な感情でさえも確かに無駄になります。恐怖そのものにおいても、理性は完全であり先見の明があり不屈です。恐怖も勇気と同じ様に泰然としています。怖くなるのは、事物が沈黙している時や危険から遠く離れている時に、想像力が錯乱するからです。そうです、恣意的な幽霊たちであり、一瞬の奇跡であり、至る所にいる神々と妖精たちであり、姿も形も見えない危険であり、生気を与えられた自然です。しかし恐怖心は、これらの狂った外観を受入れるのを許されない人の賢明な両目にあるのです。恐怖による不幸とは自己の内外での熟考の衰退とか無秩序です。恐怖には大きな羞恥もあります。しかし、それは一つの証明でしかなく、高邁な勇気を告げるものです。何故なら、恐ろしいと思うこの小さな世界は、あなただけによって立って支えられているからです。従ってあなたの恐怖も、あなたの勇気だけによって立って支えられているからです。この騒動は別のことも物語っています。つまり恐怖に屈する者は思想の無い闇夜に落ちるのです。結局のところ道徳的意識は、意識そのものであると人々は理解したくないのでしょうか。

　恐怖は遠くではより一層大きく、近づくと小さくなることに良く気付きました。決して危険を実際よりもより一層恐ろしく想像するからではありません。そんなことではありません。本当の危険が近づくと、やはり危険だと思い直すからです。想像力の不安定な対象によるにしろこれらの外観の結果であり、それと同時に原因でもあるせっかちで中断された運動によるにしろ、結局私たちに与える弱い手掛りよりも、対象の力に起因しない行為の無力さによるにしろ、怖いのはまさしく想像力です。誰も幽霊に対しては勇者になりません。従って勇者は、恐怖が戻って来ることもなくはありませんが、困難な行為が正確な知覚と結び付いて勇者を完全に自由にするまで、一種の歓呼と共に実際の事物へ進みます。その時は自らの生命を与えていると時々言われますが、良く理解しなければなりません。勇者は死を与えるのではなく、行為を与えるのです。それ故に戦争においての恐怖と憎悪は共に後退して、許しと共に前面にあるのは勇気です。何故なら私が前にも説明した様に、心の奥底では恐怖のある怒りによってしか憎まないからです。私は、私を怖がらせた者を憎みます。しかし私が自由で明敏で不屈になる手助けをする者は、私の裡

では果断な英雄のイマージュを示していて、前々から私は愛しています。

　戦争の原因の一つに、戦争を恐れて辛抱出来ないことがあります。それは又、この状態が長く継続出来ないという予感であり、最も美しい勇気はその恐れの奥底にある予感です。戦争は、お互いが行う逢引きと同じです。それ故に彼らはそこへ行くのに極めて性急です。しかし何故でしょうか。毎日が奴隷状態であることによって、私たちが尊敬を服従から分離する術を知らないことから生じて来るのです。何のためでしょうか。沢山の人々は死ぬためであり、権力に勇敢に立ち向かう人は非常に少ないからでしょうか。しかしながら敢行する機会には事欠きません。警察官がどんなに偉いとしても警察官は警察官であり、嘘つきは嘘つきであり、おべっか使いはおべっか使いであるとの本当の価値を思い切って評価することは、明晰な観点からこれが更に危険なことですが、あらゆることも許しながら精神に従って全てを評価することです。しかし、これらの戦士たちは跪いて生きています。彼らは王や視察官や知事のために震えます。彼らが死ぬ前に一度か二度生きる機会を見出すのは、戦争の時しかないのです。（完）

第二章　節制について

　不節制のことは誤解されています。最も目に付きやすい不節制の結果から余りに恐れられていますが、不節制に固有の詩も力も決して把握されていません。伝統的な知恵によってより良く明らかにされた古代人たちは、不節制の激情や、喜びがその場限りであった酒神祭の興奮を、儀式や秩序だった酩酊の様なもので落ち着かせましたが、秩序を乱した神のせいにすることを決して忘れませんでした。これと同じ見方によって古代の賢者たちは、現代の私たち以上の価値を礼儀の全ての形式に与えていました。

　ところが、私たちは節制を恐怖による禁欲のせいにしたがっているので、真の動機も力も余りに忘れています。その様にして個人を見ると、私たちは決して個人に触れていません。それに反して古代の儀礼は最良の道によって魂に到達していました。

　単に、動物的な狂気のために酒で酩酊するのであるなら、大間違いです。酩酊は不節制になるための一つの機会に過ぎません。より正確に言うと、この言葉には複数の意味があり多くのことを示すので、酩酊とは常に精神的なものです。詩人はそのことを良く知っていました。シェークスピアの劇で酒壜を持って登場する道化役者を私は決して軽く見ません。最も完全な儀式が英国のものである様に、最も完全な道化役者は英国人であることに注意すべきです。不節制はそれ故に、窒息するまでに締め付ける羞恥に対する勝利の様なものに違いありません。従って一番恐ろしい不節制は着物を脱ぐことであるのをどうして理解しないのでしょうか。ところが、この反逆の運動によって倍加されるのが官能的楽しみです。同様に酒を飲む楽しみは精神の助けを必要とします。これはフィガロがもう一度人間を定義する時に僅かな言葉で言ったことですが、思いの外、正確です。

　酒を飲まない道化役者たちもおります。最早これ以上軽蔑されることはありません。しかし、下品な言動として聞くのも嫌で、赤面させられる非常識な言動もあります。そこから発見されるのは、恋愛の狂気とおどけ者たちの破廉恥な繋がりです。節度の無い暴言は歌の中や朗読の中にもありますし、書き方の中にまでもあります。痙攣的なこの運動を慣例的な羞恥に対して、それを忘れさせる時には雄弁術と呼ばなければなりません。しかし、あの賢明なコンシュエロ（1）はもっと上手に操られて、ジョルジュ・サンドがその人物像を描写した時、彼女は最も偉大な作家たちに比肩したと認めなければなりません。私は、破廉恥な芸術家と一人ならず知り合いでしたし、実力が無い訳ではないのですが、常に優美さに欠けていて羞恥に締め付けられている他の芸術家たちとも知り合いでした。この危険な訓練における至上の均衡を私は殆ど見ませんでした。必要としているのは決して抵抗ではなく戦いでもないでしょうし、寧ろ解放です。節制はその運動を、羞恥よりももっと上手に判断します。その様に神々は歩きました。

　飲酒しないで節制へ何時か達するとか、あらゆる種類の濫用から逃げて節制へ何時か達すると信じたならば、それは間違えるでしょう。そこに私は対象についての誤りを見ます。というのも人が気に入っている対象は、そんなにも恐ろしくないからです。ここには自然に従うのも正しいとする半真理が座る席を見付けます。しかし、動物や子供には大変に容易なことでも、私たちには容易ではないのです。確かに些細な楽しみでも私たちを余りに動揺させます。神話における原始の誤りが自然の喜びを台無しにするのですから、何と深刻なことでしょう。そして本当の誤

りは、常に決して信じないことにあります。興奮した精神は悪を完成しますが、鎖に繋がれて抑圧された精神は悪を始めます。自由な精神は偶然から酩酊することが出来ますが、もう一度どうしても酩酊するのにも余り後悔しません。節制に対する他の誤りには喜びを分け合うことで、他人や醜聞によって全ての人々に行うことが出来る以上の悪によってもっと恐れるものになる、と私は敢えて言います。それ故に普通の生活や一般的な慣習による秩序を受入れることは賢明ですが、精神が他の仕事を持つだけで、それらの秩序の機会から十分に遠離ることになるでしょう。しかし、精神はこれらの繋がりを感受してはなりません。何故なら、その時にはそれらを砕く誘惑が起きるからです。そして冒瀆が快楽を引寄せるからです。これらの習慣を崇めるよりも寧ろ、それらを全て判断しない方が良いのです。その様にして、もう一つの純潔がありますし、それは眠りの様に美しいものです。（完）

（１）コンシュエロは、ジョルジュ・サンド（一八〇四～七六）の代表する長編小説『歌姫コンシュエロ』の主人公で、実在した歌手ポーリーヌ・ヴィアルドをモデルにして成長していく過程を描いた。

第三章　誠実について

　抽象的な理性からにしろ、感情からにしろ、嘘をつくことは決して許されないことが証明された時、美徳の原因に役立てるのは間違いであると分かります。何故なら、ご存知の様に適用出来ない一つの法則は、他の色々な法則の権威を少し弱めるからです。多分、正義という高級な法則に従って話を上手く纏めたいのです。しかし、嘘には自分自身への苦痛と堕落もあります。それ故に誠実という美徳がありますが、しかしながらそれは通常の話の水準に位置していません。そこから齎されるのは沢山の嘘が許されていて、或る嘘はそのものが称賛されていて、確かに立派なものになっています。

　法律は誹謗を罰します。そして、最も厳格な風習はここで法律と一致させます。そのことが教えているのは全てのことに対して、そして誰に対しても始終馬鹿正直であることは称賛すべきことではないことです。証人は裁判官に真実を言わなければなりませんが、誰に対しても真実を言わなければならない訳ではありません。今では償って賠償してもいれば、昔の誤りを思い出すことに誰も同意しません。それ故に黙っている方が良いことも屢々あります。でも最悪の場合は、黙っていることは嘘をつくことにもなります。しかし誠実とは決してその程度のことではありません。自分の考えは全て友人に負っていると言おうとすることさえないのです。厳格でありたいという道徳には、屢々どれ程の二枚舌や臆病があることでしょうか。けれども自分自身に嘘をつくことなく表現することは出来ないのです。何の嘘でしょうか。私は友人に会って平凡な話から、痩せたねとか、疲れているねとか、歳を取ったねとか、あるいは無意識的に繰返される話から歳を取って衰えた拙い証拠だね、と私は友人に言わなければならないのでしょうか。ずっと昔に許した誤りのことを私が考えるとすると、そのことを考えているのを友人に言うのでしょうか。あるいは又、もしも私が慣れることが出来ない友人の肉体的欠陥の様なものに気付いたなら、そのことを彼に言うのでしょうか。そういうことはありません。その反対に私は彼の最も良い点に目覚められる様に言うでしょうし、その様にして相手を慰めます。あるいは又、泣いて悲しんでいるのに、死者の悪事や卑怯な行いを私は思い出させるのでしょうか。時々は見ないで蓋をする卑怯な行いもあるのかも知れません。そうです、しかしその行いを言うのはもっと大きな卑怯です。精神に到来するものを私たちが言う欲求に騙されてはなりません。この欲求は動物のものです。これは刺激と情熱でしかありません。狂人は思いついたことを全て言います。

　病院に収容されていないその様な狂人たちは沢山おります。私は、自分の気分を顔に出してべらべら喋る熱狂家が好きではありません。もしも高齢になったとか、友人たちの親切とか、孤独の趣味が私にあっても少しも治らなかったとしたら一度ならず顔を赤くした理由になっていて、私自身においてもお喋りを憎むに違いありません。精神に到来するものを、初めて会った者に言わない処に優れた理性があります。それは決して思考されていないのです。従ってこの最初の動きの誠実さ以上の嘘は何もありません。言葉の働きには十分に用心しなければなりません。相手の人々や自分の未来も屢々そこに係っています。気紛れから言われたことに拘るのも良くあることですが、自分自身で許す術を知る時、もっと正確に言うと悪口を言われたり悪く思われたりしたことを忘れる術には、常に疎いものです。何故なら、自分に阿諛するものを容易に信じる、と余りに言われているからです。しかし、自分を傷付けるものには更にもっと容易に信じる、と私

はまさに言うでしょう。時々は悪党の仮面を剥がして罰を下したり、彼の勝利を少しは潰してやらなければならないとしても、それは正義に関係していることです。しかし、これらの厳格な責務の外で、気分や情熱の経験は私たちに待つことを勧めます。そして他人についての意見は、敢えて処罰する程に極めて確固としたものでは決してありません。どんな処罰も重苦しい気持ちを与えます。取分け私は、子供たちを信頼するのは正しくないとしても、彼らを信頼していることを言う必要はないと思います。最良なのは、一番良い点を信頼するしかないことであり、大人の場合も同じです。そして結局のところ、どんな人にも重苦しい気持ちを与えないで時々は話をしなければなりませんが、それ故に自分のことも相手のことも話してはなりません。寧ろ、私たちの判断力は事物には何も行わないのですから、事物のことを話さなければなりません。

色々な結果を経験して教育や礼儀はその様な用心に導きます。そして、この好意は嘘であると良く言われます。その点では全くの間違いではありません。何故なら、悪意ある考えを強固にする欺瞞があるからです。そして屢々平凡な話や阿諛の慣例に復讐する内部の雄弁というものもあります。この状態は、悲しみや怒りに話をしたり本心を洩らすことの恐怖が付け加わるので、情熱の中で最も激しいものです。それは情熱の上に示される締付けられた生命です。この混乱は臆病に付け加わり、屢々全てを説明しておりますが、その種の連中の会話は退屈で空虚です。彼らの仕事とは、沢山喋るのであっても何も言ってないことです。そこに屈して礼儀が隠蔽するのを強いる全ての判断を放って置いて解消する限り、それ故に礼儀の中にしか美徳がないのです。従って情熱を持ちそれに専心する者たちの礼儀には嘘がありますが、気質を持つことしか同意せず、あるいは真剣にそのことに努力する者たちには誠実さがあります。結局のところ決して嘘をつかないためには二つの方法があります。一つは、思っていることを何でも言うことですが、これは何も価値がありません。もう一つは、気分による即興を過信しないことです。この様に考えると礼儀正しい会話は良いものです。アルセスト（1）は誠実になろうとして上手く行きませんでした。誠実が容易であるためには、親切で聡明になるための努力をするしかありません。

本来の意味での思想、優れた研究、読書によって十分に確信されて比較されあらゆる道で探究され、結局のところあらゆる苦難を通って来た思想は、同様に義務と見做してそれらの苦難を言う必要はありませんし言ってはなりません。勿論、作家たちが打明け話を忘れないでいることは大変に強い喜びでもあります。もしも打明け話がなくて常に書かれたものによるとすると、記憶が余りに歪曲するからです。走り読み出来ない様に常に十分緻密であることです。そして、そこにはあらゆる意味があり、あらゆる懐疑もあり、立派な古典的言語がそれを愛する人々に報酬として与えている様な、幾つもの意味を与える調和もあるのです。（完）

アルセストは、モリエール（一六二二〜七三）の喜劇『人間嫌い』（一六六六）に登場する非妥協的な主人公である。

第四章　正義について

「正しい精神である」と言われますが、この表現は他人に払わなければならない敬意以上の多くのものを含んでいます。直線という言葉も同じ様に驚くべき曖昧さを表しています。正しい精神という前者の見方には広い対象について警告までします。何故なら直線であるとは、既に一つの観念であるからです。しかし正しい精神とは既に何らかのものであり、一つの観念を形作る精神であり、如何なる試みによってもその定義が曲げられることを決して認めないで非常に堅く守っている精神です。正しい精神とは、些細なこと、些細な不幸、阿諛や人間の騒動や嘆きや軽蔑さえも余り大したことではない様に思えますし、直線の精神は何時も行う術を知らないものです。それ故にプラトンの様な聖者は、少なくとも内面の調和の取れた正義と自己の良き管理の中で考察したかったのです。それが行われるのはプラトンの『国家』が主として正しい魂を論じているのですが、正しい社会は偶然の出来事として論じています。この例から私が用心したのは、受入れるべき何らかの存在として決して正義を考えないことです。何故なら正義とは、外部の如何なる助けも無く、自分独りで作ったり作り直したりしなければならない何らかのものであり、会ったことも無い見知らぬ人に対しても同じく作ったり作り直したりしなければならない何らかのものであるからです。

力は不正そのものであると思われています。しかしもっと正確に言うと、力と正義は赤の他人です。というのも狼は不正であるとは言われないからです。しかしながら寓話では屁理屈を言う狼が、同意を欲しがるから不正になるのです。ここで不正が現れるのは、狼がそれ故に精神に野望があるからです。狼が望むのは、羊には答えるべきことが何も無く、あるいは少なくとも審判者が許すものなのでしょう。そしてこの審判者は狼自身です。ここでは言葉が私たちに十分警告しています。正義は判断力に依存し、成功が何にもならないのは明白です。弁護することとは、論証することです。正義を成すこととは、判断を下すことです。道理を吟味することですが、力を吟味することではありません。従って最初の正義は精神の探究になり、道理を調査することになります。偏見は自分自身による不正です。自分が優遇されていて、その上正しいと思っている者でさえも同じ様に善意からの道理を調査して相手の正義が行われなかった限り、自分の正義が正しかったとは決して信じないでしょう。善意からの、とは弁護士制度がどうにか実現させているもので、どんな力も探すのを可能にしていると私は理解します。お分かりの様に訴訟人たちは、彼らの弁護士が言うべきことを何でも十分言った時には非常に満足します。そして同時に、自分の誤りが明るみに出るなら、多くの人々は決して勝ちたいと思わないでしょう。同様に、相手も論証するための許可は全て持つことを望みます。さもないと落着いている所有者も常に一種の不安を抱くことになるでしょう。所有することの熱狂は精神の熱狂であり、それは泥棒よりも、反論が怖いのです。不正は、正義と同じ様に人間的なものであり、正義と同じ様に或る意味では偉大なものになります。

そうすると迫害は不正そのものになるでしょう。どんな暴力も不正ではないのですが、要求を妨げるのを目的と見做す暴力が不正であると理解して下さい。それから不正の勝利とは、まさに同意されたり称賛されることにあります。それ故に反逆は先ず言葉の中にあり、言葉を救済するためにしか行為へ移りません。人々には叱責する権利があったとしても、どんな条件が受入れら

れるのか誰も分かりません。だがその上更に、何よりも厳しく抑制された誤りがあります。それは暴君に打ち勝つことです。正義とは確かに自由で率直な賛同を抱く同胞たちとの交流状態を前提にしていること、そしてそれが私たちのものであることを考慮に入れましょう。

大変に単純なこの観念は、既に色々な交換やあらゆる契約にその適用が見出されます。先ずは交換や契約には決して曖昧があってはなりません。さもないと両者が全て同意しても、同じことに同意しているのではないことも起こり得るのです。如何なる嘘も欺瞞もあってはならないのです。従って完全な正義が要求することは、私が知っている売る品物のことは全て買い手に教えることです。しかしそれと並行して、買い手も交換によって私に与えるお金について分かっていることを私に教えなければなりません。注意もせずに受取った疑わしいお金を渡しても、大変無頓着に考える人々と私は知り合いました。しかしそのお金を貰った人の自由な承認が保証されない限り、それでは正義になりません。そして規則は次のとおりです。契約の相手が「もし私が知っていたなら」と言う機会は決して無いのです。さもなければ、お金持ちになるだけで満足して、更に正義までも得ようと思わないで下さい。何故なら、ここには決して緻密さが無いからです。相手の承認があなたに欠けている以上、そして取分けあなたが、相手は決して騙されないとあなた自身が認める時、全てが明らかになっています。わざと間違えたのではありません。そして、あなた自身がその時に知らなかったとしても重要ではありません。私が言うのは誠意の無さです。つまりあなたに教える方法が無いということです。私が、額に入った古い版画を買ったとします。私は決してそこに隠されていた数枚の紙幣を買ったのではありません。それらの紙幣が誰のものであるのかを知ることは、いずれにせよ容易ではありませんが、私のものでないことだけは極めて明白です。ここで完全に分かるのは、精神は何かにつけても批評したがる目で見る様であると私には思えます。それは事物の観念そのものの上であり、自分と相手に共通した観念です。販売は単に一方が見るのと同時に成り立つことが出来ませんし、もう一方からも又出来ません。自由意志がそこでは決して間違えないのです。

良く分かりもしないで相手が同意する場合があるのも本当です。破格な値段で売ったり、所有すると直ぐに気に入らなくなったりして驚くべき行動を取る様に、相手が他の望みに同意するとか、急いでいるから同意する場合もあります。その結果、憚る処なく利益を手にする人も沢山おります。勿論、この時の相手の同意は自由ではなく、長続きしないのですから、あなた自身は同意した相手を狂人と判断します。私はもう一度言いますが、あなたはお金持ちになるのに満足して、正義を得ることは諦めて下さい。ここであなたを処罰するのは、あなた自身の判断力です。そこから余りに有名な金科玉条が生まれます。「契約と交換はどんなものでも相手の立場に身を置きなさい。しかし、あなたが知っていること全てと共に、そして人がなし得るのと同じ位に自由な必然性を自ら仮定して、相手の立場でこの契約や交換をあなたは同意するのかどうかを理解して下さい」。この人生は恵まれた交換で溢れています。人は少なくともそれに注意しません。しかし富は常に相手が価値を知らなかった品物を買ったり、相手の情熱と貧困を利用した処から由来するのは明白です。あなたはお金持ちになることで満足しなさい、と私は繰返して言うことに戻ることにします。（完）

第五章　再び正義について

　事物の交換の時に使用するのを思いつかせた金科玉条は、最も大きな正義にも導かれて、人々に広がります。正義とは平等です。多分私は、何時の日か見るかも知れない妄想を、そこからは決して理解しません。強者と弱者との間、識者と無学者との間でも直ぐに成立する公平な交換であればどんなものでも構わない関係を私は理解しますが、それは次の様により一層深くて全く寛大な交換によって強者と識者が、相手に対しても自分と等しい力と知識を前提にする必要があり、その様にして裁判官とか正義派としてお互いに忠告し合うのです。この感情は魂の市場です。私は、騒ぎ立てられる盗みや、平等のゲームでしかない値切ったり値切られたりする二重の嘘に決して騙される者ではありません。最早誰も子供に高く売りつけないでしょう。交換においての平等の利益が最高の規則であることを、競売や市場価格の慎重さそのものが十分に教えてくれます。そして投機においてさえも、弱者たちに対する企てよりも寧ろ、平等の中でのもう一つのゲームを私は見たいのです。取分け商業都市の中では決して曖昧であってはなりません。そこでは常に正直が厳密に適用されて権利は誰でも平等であり、尊敬の念は少しも働かず、本物とか偽物の尊厳も無く、結局のところ伝統的で格式張っていて、秘密で閉鎖的で嫉妬深くて暴君的な社会としての国家を認めません。確かに正義は社会から離れていて、商人たちは寺院から追い出されているのが良いのです。

　偉大な人々は交換よりも与える方が好きです。議論よりもその場を離れる方が好きであると私は理解します。この偽りの慈愛は無視されます。商人たちの正義は、本当の慈愛をもっと良く現します。何故なら、もしも自分自身の判断で更に出来るだけ純化されたものを相手に帰さない限りは正義が決して無いならば、それは判断のあらゆるしるしを相手の中に自然と観察する様に導くからです。売ることも買うことも説得することです。同意の無い売り手は裁判官の目には無効であり、契約当事者の相手の目にも実際に無効です。というのも彼が望んでいるのは所有ではないからです。彼が望んでいるのは所有権であり、自由で明らかな同意の上に基づくものです。それ故に商人は、相続とか正当な支払いの分配に関する問題が自分の自由意志に従うや否や、自分自身もそうであろうとする情熱の自由や先見の明を持つ人々と共に生活し商売をするのを欲します。或る意味では以上で、力強くて賢明な農民が譬えそれで苦しんだり無頓着でどっちつかずにいるよりも高い財産になるにしろ、あるいはそれで得することになるにしろ、どんなものも超えた財産の良き管理を判断します。従って権利は力強い根を持っています。

　常に最良であることを想定し、人を教えて常に自由であることを試みるためには最早一歩を踏み出さなければなりません。高めること、これも沢山の意味がある美しい言葉です。この一歩は、最大の勇気と引き換えに、狂人と向き合っていても真の慈愛によって常に克服されるものです。しかし先見の明のある優れた者は、常に正義を広げます。何故なら今まで十分に考えたことですが、最も狂った情熱の奥底にも道理があるからです。従って慈愛は正義の予感に過ぎません。そして完全な正義とは常に正義の規則と基礎を推測するものであり、結局のところ自己と同じ見識を如何なる人にも望むものです。というのも無頓着で何でも信じかねないで何時も満足している相手を、容易に推測することには正義ではないことを誰もが知っているからです。それ故に正義とは平等が定められ、次に推測され、最後には知覚されるものです。親切や阿諛や偽りの尊

厳や、職務としてのわざとらしい狂気に立ち止まらず、精々殺人犯たちが軽蔑されるのと同じに、高々警察の権力ある判断に高度な平等の観念に従って考える栄光を授けることを、思っている以上に一般的に見ることを知った人々は、審判者とは何であるのかを十分に知っています。（完）

第六章　再び正義について

　契約における主な困難は、相手の人々が恐らく何も引出さなかったに違いない何らかの対象を自分自身で上手く活用した時、相手の分け前を与える術を良く知らないことにあります。例えば保有し続けることが出来なかったに違いない土地や、改良する術を知らなかったに違いない畑や、自分たちで開発する術を知らなかったに違いない鉱山があります。何人もの人々や何台もの機械を集めて人間の労働は、多くの場合は借金することもありますけれども、何時も返済する気にならないで主人が自然と保持して、新しい価値をその様にして生んでいます。組織者は自分の手中に共通した宝物として富の多くの部分を何時も保持することを考え、全員の利益として人間の仕事をもっとよく利用することを可能にします。協同組合の中で選出された指導者たちが、仕事の新しい方法を始めるために必要な自由を常に持っていないことは良く知られています。工業の進歩が、病気や無知そして仕事の新しい条件を齎す専制的な力に対しても同じく、安全にとっては有利であるのを計算に入れなくても、生産者の進歩の一部分を購買者へ既に放出していることは又極めて明白です。その様な組織の悪徳に治療法が無い訳ではありません。工業が田舎の全ての生活手段を刷新して美化する前に、農民に見られる無知と奴隷状態が何時も余りに忘れられています。そして、要するに工業のこの活動を如何にして遅くすることが出来るのかを誰も知りません。しかし、この状況そのものからは、保険とか年金とか利益配当とか、あるいは単に生産の増加を目指す富の保存の様に沢山の解決を生みました。これらの解決は全て正しいのですが、吝嗇そのものという解決は創意工夫が最も少ないものです。というのも自分がどんなにお金を貯めても、生産物を誰からも奪う訳ではありませんが、それでも暫くの間は交換手段に心を奪われるだけであるからです。これらの悪は小さいです。それは仮定するのが控え目であっても、何時も待ち望まなければならない情熱の悪には遙かに叶うものではありません。そこには不正がありません。

　その反対に吝嗇家を批判するのは、或る種の突然の狂気によって、全く不必要な仕事のために何千人もの労働者に賃金を支払うことです。例えば大きな穴を掘って、次に埋めて元の土地に戻す様な仕事です。先ず彼は、これらの労働者たちが休息するために支払うのも同然で、あるいは労働者たちが自分自身の家とか庭のために働くのも同然であるから非難されるに違いありません。もっと踏み込んで言うなら、何も残さないで無駄になったこの労働は、従って気紛れに皆からこっそりと盗んだ財産の様なものに違いなく、野菜類も衣類も家具類も少しも無く、結局のところこの世で必要とする対象物が少しも無く、治療法も無いから非難されるに違いないのです。それは麦の山を焼くとか衣類の倉庫を焼くことを意味するでしょう。もしも利用出来る物を何でも焼いたなら、この狂気は、所謂万人のための労働を齎しますけれども、皆にとって大きな不幸であるのは明白です。これらの仮定された状況からでも良く分かるのは、人間は生産を望んでいるのであって、労働を望んでいるのではないことです。そして無駄な労働をさせられることは、共通財産を浪費することでもあります。

　ところで富裕者には力があり、狂人とか悪人と見做されることさえもないのは、ダイヤモンドの琢磨工とか織物の織工とかレース女工とか刺繍職人の様な大変に困難な仕事を成り立たせているからです。これらの職人たちは、富裕者がいなければ決して生活出来ないに違いありません。

そして、この種の生産物には見た目にも殆ど常に美があり、自分の所有物でなくても万人の喜びのために作るのであることをその美は信じさせます。そこにも僅かですが真実があると仮定して置きましょう。結局のところ富裕者のしるしの様なものであるこれらの虚飾は、軽蔑されるよりも絶対に羨望されると言って仕舞いましょう。それは情熱によって貧困の感情を悪化して、不正の真の源泉を人々の目から殆ど何時も隠して仕舞います。その様にして多くの富裕者たちが行っている不正の使用を非難しないで、富裕者たちの不正な分配を誇張して言います。けれどもそれは真実であり、唯一の不正です。確かに万人にとっての何らかの贅沢を望むこと、そして取分け美しい物と共に皆と親しくなるのを望むことは、悪い考えではありません。しかしこれらの楽しみは、当然のこととして自分の両手で働く全ての人々に対しての安楽も想定しています。この判断を修正してみても、企業家や銀行家や富裕な農夫の生活を大きく変えることはないでしょう。彼らの夫人たちの衣装や、人に欲しいと思わせたり退屈を一時的に紛らそうとするだけの馬や自動車や従僕を持つ贅沢に関しては、多分何かが変わるでしょう。もしも全ての富裕者たちがグランデやゴプセック（1）の様に節度があって虚栄心も無かったなら、有り余った労働時間があったとしてもその一部は、裕福でない人々のために生産することに使われるでしょうし、他にも皆の生活を美しく飾ったり、更には余暇や教育や改善のために使われるでしょう。改革は富裕者たちに係っています。取分け、裕福な夫人たちに係っています。しかし私は虚栄心とか人の気に入られるために夢中になることを直接的に反対する努力には多くを期待しません。そうではなくて、寧ろそこでは消えたパンがあるという思想と共に、ダイヤモンドやレースの上に先見の明がある視線を期待します。（完）

（1）グランデとゴプセックは、バルザック（一七九九～一八五〇）の小説『ウージェニー・グランデ』（一八三三）と『ゴプセック』（一八三〇）の各主人公で、吝嗇で有名な人物である。

第七章　権力と力について

　正義の認識が、不正を粉々にしようと思っている或る怒りも無く行われるのは稀有であり、まるでそれは全て盲目的な或る種の人間たちにあるかの如くであり、地上の障害物を除去しなければならないでしょう。しかし、それはまさに子供じみています。全ての情熱は不正であり、どんな人も情熱に陥り易いのです。同様に正義のためのこの怒りが全ての行為において正義を齎すということも又、本当ではありません。勿論、盗みにあった泥棒の憤慨にも他方ではこの期待を与えることが出来ます。そして常に正義でありたいと願っても認められない権利のために戦う全ての暴君の野望を、私は偽善と全然考えるものではありません。何故なら最も気に入っているものは、決して所有ではなくて所有権であるからです。同様に横領者は結局人々に認められたいのです。彼の策略にある悪知恵も嘘も、プラトンが大変良く理解していた人間の最も奥深い真理を決して隠してはなりません。それは不正も、隠れた正義によってしか力がないということです。野心も一つの思想です。平和条約が示している様に、戦争は常に説得するのを目的と見做していて、相手の要求を和らげるに苦労します。それ故に、もしも正義が厳しいものであったなら余りに強いものになります。思想は常に思想を見付けます。そして、正義の無い絶対的思想は最早思想ではありません。思考することとは認めるということです。

　しかしながら不正が認められるために強制を用いることは良くありますし、思いの外、上手く成功したりします。既に余り信頼されないで、何にでも反対して危険しか与えない或る思想を心配するには余程頑固でなければなりません。その思想を隠すのに苦労は要らないでしょう。あなたの目からも隠れるでしょう。もう一つの思想が本気で生まれるでしょう。それが自然な成り行きです。そこから大変に一般的な意見も齎され、その後で非常に長く続いた勝利が一つの権利を生み出します。しかしこの勝利は、その権利を保証する自由な同意まで手に入れることは出来ません。従ってお分かりの様に、暴君たちは歓声も少しばかり軽蔑していて、常に自由な精神の人々を常に味方に引き入れるのを求めます。それは強さと自由を示すもので、暴君たちの裡で全く率直に愛するものであり、正義の要求は無言の要求であって除外した儘です。そして精神の宮廷人というおしゃれがあり、それは完全に終わった事実に関係して先行すべき判断に、自由の雰囲気を与えるためでしかないものです。それ故に勝ち誇った力は何時も説得しようと試みて、屢々それに成功したと信じます。だが、これは棒を振り上げて定理を証明したがることです。誠実な説得であり、自由な同意と真の平和を目的と見做す説得にあっては、どんなものでも労働というものは敵の精神からも完全な自由を奪わずに置きます。かくしてユークリッドの精神は様々な精神に話し、同意を盗むことは望まないに違いありません。ところでここで私は、ユークリッドの先見の明はどんなものでも暴君の中に推測します。というのも私に興味のあるものを暴君が持っていると信じることはないのですが、実は暴君も持っているからです。ところがこの世のどんな力によっても、暴君には権利が無いでしょう。子供が発見した腕時計を捨て値で購入するのと同様に、私自身が見ると合法的な所有者にならないのです。それに高利貸が最初に言う弁解とは弁解にもなっていないのですが、次の様に何時も良く言います。結局のところ私は、決して無理強いして貸したのではないのですよ。

　もしも正義の人が力で暴君に反抗したなら、少しばかりより一層曖昧になります。この時に暴

君は所謂自分の権利を保ちます。しかし、大変に自然なこの無謀は〈神〉の判断という観念に戻り、それに倣って権利が最後には勝つのです。経験においても理性においても何も基礎の無い子供の観念に、私は取分け一種の約束を見ます。暴君が信じられるのは、彼が勝てば認められることです。従って反逆が失敗したなら、暴君の権力は強くなります。しかし、この無邪気な信仰の底に見なければならないのは、その信仰に倣って力を持った審判者が理に叶った者に勝利を与えることです。権利は論拠と証明によって発見されるのであって他のものではなく、思想によって発見されるのであって他のものではないのです。そして、ここでの真の抵抗とはそれ故に亡命したり監獄に入ったにも拘わらず、死ぬまで自分の良心に従って語ることであり書くことです。殉教者たちが精神のこの種の戦いを大変良く導く術を知っていたと理解しても、全ての人々によるキリスト教精神のこの勝利を驚く筈がありません。そこでの勝利者は人を叩くことを自ら禁じた者です。それは精神への最初の呼び声でしたし、歴史が保存していたこの種の最初の戦いでした。この経験もあなた方が武器を捨てることはないのですから、信仰が殆ど無い人々よ、と今度は私が言う番です。しかし、勇気が殆ど無い人々よ、とも私は言います。何故なら私は、真の抵抗においてあなた方が余りに弱いのを見るからです。武器を摑んでいても一種の恐怖を何度もあなた方に認めるからです。（完）

第八章　知恵について

　知恵は理解力に関する本来の美徳です。しかし知恵が、その他の全ての色々な美徳と共通する言葉であると理解してはなりません。数々の美徳が知恵だけのものである時、知恵に最も反する悪がまさしく愚かさであるから、屢々大胆さとか創造者の熱い情熱に欠けています。それを私は性急さとか先入観による誤りであると理解します。そして知恵以外のものでない知恵の美徳は、誤りに対する全ての慎重さです。しかし、この誤りから決して出発しない真理は、少年時代が無かった大人の様なものです。単に、まさに慎重さと呼ぶものでもある知恵がなければ、成熟に達するものは何もありません。私は歳を取った子供の様な人と何人も知り合いました。

　知恵の最初の果実は仕事です。私は精神の仕事とは何であるのか知りませんので、それの意味も分かりませんが、判断力に対して対象を準備するのは両目と両手の仕事です。全て始めから創造したいと思うのは立派で、前もって行ったり予言したりする性急なこの活動は、何ものにも代えられないものでもあります。しかし、学校に入って本に書いてあること、著者によって仮定されたり結論付けられたことそのものを、真実としてそれが何であるのかを十分に知るまで何時も理解することも賢明です。それ故に多くのものを写したり、上手に字を書いたり、例えば本を読み直したりするのも良いことですが、取分け精神の努力と思われていて常に傍らで働いているあの緊張感は不要です。学校の全ての練習は知恵のものです。それらに関心を抱き過ぎるのも軽蔑するのも、同じく危険です。子供が定められた時間に素直に勉強して、その他の時間には勉強のことを考えないのは常に良い徴候です。というのも、何でも記憶に止めることを望むのは賢明でないからです。曲芸は体操を台無しにしますし、それは全てのものにとっても真実です。曲芸には不快なものがありますが、それは衒学的なものです。踊りの先生も同じです。

　精神を持つために人は学びません。最も稀有な知恵は、考える能力のある才能を管理することにありますので、それは一種の策略が無いと前進出来ません。この素晴らしい情熱の働きは、教養人があらゆる機会に全ての必要性のために何時もそれらの手段を発見しなければならない外観を創造します。だが、これは余りに穿った見方でしかありません。鎖に繋がれた精神が何時も理屈と反論を発見するのであり、知性は全てに役立ちます。しかしながら精神が軽業師の様に早業や囚われた人の仕事に適合する時で、頂点にある時には混乱でしかありません。しかし私が思考する時は、それらの効果や条件に気を付けないのを良く予想します。人は考えている自分を見ることと、それと同時に良く考えることは出来ません。それ故に自己鍛錬や努力ではなくて寧ろ瞬間的な逃避と、全てのものからの超脱であり、それらは真の観察者が放心してぼんやりしている様に見えると言われる所以でもあり、重要なのは内省と自己放棄でなくてはなりません。要するに、何事にも捕らわれてはなりませんし、ラ・ブリュイエール（1）が言った様に何事も自慢したり、かっとしてはなりません。そこから短気な人は自分の命令のことを思い出さないので自由でない、と結論付けます。しかし私はもっと適切に言うとするなら、その短気な人は自分の欲求に倣って考える人を自由でない、と言っているのです。それ故に対象になるものはあなたではありません。そんなものはどんなものでも何でもないのですから、あなたは求めないで下さい。

　この情操の感情から謙遜が生まれます。それは知恵の一部であり、自分に何も約束しないことに存するものであり、結局のところ自分をあちらこちらで期待される思考機械と決して見做さな

いことに存するものです。信頼の欠如は常に野心を準備するものであり、最後には失望となり、そこにあるのは思い上がった数々の道です。しかし発見する欲望も又一つの情熱であり、他の情熱に劣らず精神を束縛することを理解することは、世の中を驚かせるのをきっぱりと断念することであり、困難な状況の中で十分に謙遜して待つことであり、祈ることです。あらゆる場合でも自己と他人たちを助けられる本当の思想を願うのを長い経験から認識させられましたが、先ずは受け入れて諦めることです。「私の意志ではなくて、あなたの意志が成就されますように」。人間はこの回り道を、自らを信じるために発見しました。しかしその他の色々な虚構が、新しい恐れと希望の精神に忙殺されながら、この修道士の隠れ家を困惑させました。これは無理にも愛されたいと望むことです。真の思想家たちは苦難の中での睡眠を、あるいは快活さと陽気さを、ソクラテスが自分自身で必要としているまさにその時に、大変に良く行う術を知っている様に、寧ろ沈黙して祈りました。私たちの力や全ての企みを乗越える自然の巨大な光景は、それと同様に待つことしか出来ない面前にある確実な危険は、真の思索には同様に有効であると私は思います。以上は苦難というものの意味です。同様に、あなたの孤独も、修道院も、人々の真っ只中にあって欲しいと思います。（完）

（１）ラ・ブリュイエール（一六四五～九六）は、作家・モラリストで『人さまざま』（一六八八）にて性格論を匿名で刊行した。

　近代人たちはこの美徳を殆ど扱っていませんでした。恐らく情熱の必要性と、精神の自由を同時に良く考察しなかったためです。デカルトは、私たちが持っている自由意志の感情である情操を寛大と呼びたがりますが、これは非常に上手い名付け方です。しかし魂の高潔さとは、単に何か高潔なものを所有することではなくて、全てを判断して自然と全てを克服して乗り越えることです。それは更に人間の弱さに関して正確な尺度を想定し、これに対して寛大も厳格も無く、最も深い意味で正しいものです。多くのことを大目に見なければならないことは、皆が良く知っています。でも、情熱によってそれを忘れて、どんな言葉も失念も意図も全て勘定に入れて許さない者たちは、まさに不幸であり意地悪です。しかし、もっと許すことを知らなければなりません。私は、約束や後悔を取付けて最後には考えを変えた全てのしるしを見た後で、寛大を示した人と知り合いになりました。私はそこに卑小さと駆引きを見ます。取分け、どんな活動も思想を想定し、私が良く言う様に、精神を動物に帰する体質を見ます。高潔さは卑小に対して大したことが出来ません。それ程縁が無いのです。それは退屈して欠伸をしている人を非難することであり、退屈の観念をその人に与える様なものです。スタンダールの『赤と黒』の中で善良なピラート神父は率直に言います、「私は怒りっぽいので不幸です。でも、私たちはお互いに会わずにいることも出来ますよ」。この告白には些細ですが高潔さがあります。それは更に自分自身の怒りについての思想も規定し、告白に重大さを与えるのを大変に望むことでもあります。でも、自分自身の気分に重大さを与えるのは卑小なことでもあります。

　けれども、それを直すためには重大さを与えることが良いことでもあるらしいのです。道徳が左右させるのは、まさしく観念のこの循環論法です。全てを誇張する自己についてのこの瞑想に関して私は良いとは思いません。その上、もしも弁解しようものなら最悪です。何故なら、意味の無い処に結局は意味を見出すからです。間違って理解されたこれらの人生からは不幸や、時々は害が生じますし、思考し望み憎み愛しざるを得ないあの観念が生じました。困ったことです。それと同じ人間がその理屈で行くと、全ての人々と世界中をそれと知らずにしるしによって屢々愛し憎み望み呪います。しかし、それが詰まらないことであると判断されれば、何でもありません。真の人間社会においては、機械的なものは何でも初めから取消す術を知らなければなりません。大変に取るに足りないことのために、祖母と喧嘩をしていた娘は最後には、私なんかも死んで仕舞いたかった、と言っていました。大好きだった姉の墓は、死んだばかりで未だ余り閉じられていませんでした。私としては、予期せぬ物音に或る意味を偶然生む様に、笑うだけでした。礼儀はその様な娘の反発を和らげることにもなりますので、悪いものではないのです。しかし、もしも礼儀正しさが創意工夫を邪魔して退屈な平和を保証するものであったなら心配すべきことであり、私は何でもない全ての物音と共に自由でいる方が好きです。些細なものは注意力を凝らすと大きく見えるばかりです。もしも些細なものが純粋なメカニズムに一度送り返されれば、そこから抜け出てすっかり消滅するでしょう。他人の欠陥を癒やすには、実際にはそれらの欠陥に無頓着になれることであるのは知られていません。スピノザが正確で特異な表現の中で言っているのは、病気になるのを恐れて食べるのを自ら禁じているとするなら、それよりももりもり食べてもっと直接的に病気にならないことです。私もこれに倣って言いますが、私たちが悪徳を癒

やすのは私たちの美徳だけです。魂の高潔さが狙うのもそこです。

　従って精神の諸作品には、何時もかなりの弱点があります。表現上の幸運にさえも偶然が大いに関係しています。貧しい精神はそんなことしか気付かず、些細なことを見過ごすことがなく、天才と自由の光を待つこともありません。ルソーの『告白』の最後の方に書いてある様に、私には気分の変転が大通りを走る二輪荷車の騒音同様に私を悩ませない好運があります。しかしながら些か荒々しいが、名著の最良部分を抜粋してそこしか繰返し読みたがらなかった美的センスのある人と同じ位に、私は遠くへ行かないに違いありません。その反対に立派な音楽家たちが言った様に和音を準備する音や補充する音は、私がそこに感じる一種の歓呼や放任させる瞑想の中での高潔さによって、直ぐに私を楽しくさせて仕舞います。未だ眠っている思想が如何にして目覚めの入口に向かって単純な形や、既に完全に無縁の事物に変わっているのかを知る者は、文体とは何であるのかを少しは知ることでしょう。（完）

第七部　儀 式

第一章　連帯について

　外国人たちと一緒に生活すること位に容易なことはありません。言葉の違いが更にそれに付け加わるのは、礼儀正しくして言うしかないからです。だがその上に真の友情はそこでは決して結ばれません。或る種の憎悪は友情とそれ程掛け離れていないことが良く言われました。少なくとも強い友情が或る疑念と抵抗によって始まるのは全く自然の様に思います。恋愛において、そして友情においてさえも選択が極めて少ししかないことに人は時々驚きます。しかし、もっと良く見なければなりません。恋愛や友情を誕生させるためには強制が必要です。それでは誰が相手を選択させるのでしょうか。人に気に入られるのを望むことは、それ程愚かなことはありません。新しい友人に発揮される注意力程不当なものもありません。あなたをここで生活することを強いて他で生活しないのは自然な強制です。あなたをこの町で生まれさせて小さな小学校に閉じ込めたのも自然な強制です。それは虚しい心理学から精神を解放します。連帯はこの自然な結び付きです。連帯は、決して気の合った仲間同士のものではなく、その反対に無遠慮で和解し難い敵同士のものです。あなたを放浪させたり素っ気なくさせる大きな財産が無く、強いられた養子縁組や鼻水を垂らした老婆がいなければ、あなたは決して選択しません。少年時代には遊びに熱中したのですから、その種の人を私たちは愛する結果となります。共通した言葉も追加して下さい。その声は各々の町を歌い、一人ひとりの色調は失われません。そして幼年時代とは、祈れば何でも手に入るいうことがその条件でもあります。

　それらの結び付きがより一層固くなる時、二人の囚人や生徒や兵士たちの様に友情よりもより一層強くて長く続くものが生まれます。しかし何故でしょうか。何故なら、もしも私たちが自由であったなら、強制は先ず必ず不快にさせるものを受入れさせるからです。それからお互いの親切が強制されたものでさえも、まさに明らかな色々なしるしで他の親切を呼び寄せます。お金持ちはこれらの宝物を知りません。殆ど全ての人々は、自分の知恵の最初の果実を幸福と共に持ち続けますが、屢々その理由を知りません。というのも全ての人々が、親切によってもっと良い人になり、情熱の遊戯が殆ど全ての自由な愛着を必然的に粉々にするに違いないことを同じ様に知らないからです。しかしながら経験による目に見える結果は、誠実さの評価を高めました。それは是が非でも愛したいという処に成立するものです。ここで順番を逆にしない様に気を付けなければなりません。愛着が誠実なのは決して愛着の力によるのではなくて、その反対で愛着に力があるのは誠実さによるのです。従って必然性から私たちを誠実にする事実の強制を余り嘆いてはいけません。強制された誠実さは先見の明が少なく、望んでいることを生むのも少なく、結局はもっと容易に満足すると少なくとも言わなければなりません。いずれにせよ人が今持っている愛に勝たなければなりません。

　これらの勝利は決して一つの社会を作りません。友情は必然的に強制から生まれません。それどころではありません。憎悪は隣人から生まれるかも知れません。どんな情熱も反論すれば熱くなりますが、それはイマージュそのものを真似るからです。憎み合うためなら、塀の上で罵り合うなら、ぐらぐらした塀でも打ちのめされた犬でも何でも良いのです。最も普通なのは無関心です。取分け同業種の人々が一人も隣り合っていないなら、これが一般的です。しかし、これもぴったり閉じられたドアの様に先が見えないので騙しもします。何故なら全ての言葉と顔付き

は普通の列車の中でも、風と雨と太陽が柏の木の節を作るのと同じ様に、私たちを作り上げます。私は相手の人のアクセントに取りつかれずに話をすることが決して出来ませんでした。私がそれに気付かされたのは、他の人々から指摘されたからに他なりません。　その様にして誰もが微笑や顰めっ面そして仕草や些細な行為を真似します。以上は、誰もが自分の出た村を持っていて、屢々或る気軽さを感じるのはそこだけである所以です。ベッドが自分の体型で作られている様なものです。それでもそのベッドを愛することはまさに別のことなのです。

　私が決して忘れないのは災難とか狂った希望の動きであり、人間の海とざわめきの力です。それは人々がいる処で、もっと適切に言うと自分自身の国で、更に言うと家のドアなら至る所で忍従するものです。それは動物の行為でしかなくても、その判断力はつまらないものではありません。しかし、情熱によって自由に使われる予言によって、情動が何かを告げているのを常に信じて判断力が結果として生じることが起こります。恥辱とは、強制されたこの判断力と、もう一人の判断力との戦いでしかありません。そして例えこの群衆の動きに私が屈しないとしても、私には大きな怒りが齎されます。それらの動きは常に私に群衆の狂気を与えるに違いありませんし、あるいはその狂気は彼らを勇敢にします。私は捕らえられていたのです。そこでの私は逆上し易い人になっていました。従って社会にいるのは痙攣を起こす人々だけかも知れません。そして実際に戦争がそれを見せてくれる様に、全てがそこに達します。そこには倍加した情熱ともう一つの身体があります。巨大な海獣レヴァイアサンとして如何に生活するのでしょうか。（完）

第二章　礼儀について

　野蛮人たちが儀式の礼儀に関する形式に執着させられるのを時々びっくりさせられますが、そのことは野蛮な感動を持っていないことを証明するものでは決してなく、事実はその反対です。表現するための危険な力が細部にまで取決められていなければ、武装された平和が維持されることは決してありません。というのも意味の無いことでさえも、既に脅威となっていて、侮辱に値するからです。そこから外交官の礼儀も野蛮人の礼儀に似ています。ここで礼儀の源泉を探すなら、私が観察するのは考えていることや意図していることを隠すことに礼儀が存するのではなく、望んでもいないし何のことか知ることもなく、動作や顔つきの動きが意味するものを調整するために存することです。自己に対しての自信の無さや筋肉の自然な反応に対する闘いが、極めて具合の悪い礼儀を齎すことも注意しなければなりません。というのも、この闘いは硬直したり顔を赤くしたりする様に色々なしるしを現しますし、そこでは誰もが欺瞞を見抜く術を知ります。それは侮辱を仕草や様子に現すに劣らず、相手の情熱をかき立てることになるからです。礼儀はそれ故に体操で表現する様なものです。それは望んでいること以外は決して理解させない様に導くものです。礼儀は、言語の様に一つの社会から他の社会まで変化します。しかし冷静さと節度はどんな国にあっても礼儀になっています。

　礼儀は、親切ではないことに注意するべきです。無作法でなくても、不愉快で意地悪なことはあり得ます。進んで無作法になることは不可能でさえあります。無作法とは、実際に意地悪になりたくなかったのに意地悪になることに存するのです。これはもっと稀有なことですけれども、人々が望んでもいないのに友情を多く表すと、無作法になるのも同じ様なものです。自我の把握に加えて、欲することなく傷付けたり困らせたりしない人物のために知らなければならないものの全体を、断固として礼儀作法と呼ばれています。少なくとも、知らねばならないことはどんなことでも知っているのは滅多にありませんので、最早新しいことは何も言わなくなって仕舞います。言葉はそこで明瞭で正確な点で良くなります。だがその上更に、誰もが同じことを暗誦して退屈がやって来ます。この退屈を我慢させる力強い野心と恋愛という情熱は、しるしへの注意力を倍加させます。そして、規則正しい抑揚や言葉の順序にさえも価値を見出して、理解させたり言ったりする方法を生み出します。音楽にはこれと同じ性質があり、それと同時に規則正しくて慣例的な転調によって楽しませますし、それらは先ず安心を与えます。同様に驚きによっても楽しませますが、決して規則を破ることはありません。この関係に基づいて詩も音楽に似ていますが、両者はその対象が社会の楽しみを規制する以上に広げる儀式にそれらの源泉があります。演劇も同じことが言えます。良く見ると儀式そのものでしかありませんが、何時も多少なりとも粋な会話の規則に従います。情熱の動きはその時に、衣服のうねりから肉体が分かる様に、リズムによって分かる規則正しい変化から見抜けられます。そして見抜くことで情熱は何時も楽しみますので、礼儀正しい社会の楽しみは色々な情動を情熱に変えて行くのが分かります。しかし薬は病気よりも怖いのです。サロンの病気である臆病は、取分け若者において自己に対する他人の力を、過度に限度を超えて評価する様に仕向けるに過ぎません。

　決闘の習慣は礼儀と儀式の中間にあります。決闘は、諸結果が決定された時、情熱に対して多くのことを十分に理性的に行ったと思考する習慣上の知恵の中で恐らく最も完全な事例です。情

熱の中で最も恐ろしい男性の怒りは、孤独になったり期間を置いたりして、要するに注意力を取戻す闘いの規定によって必然的に冷静になります。勿論、事件に決して熱くならない誠意ある弁護士の手に争いを委ねる方が遙かに賢明です。和解するにしろ争いになるにしろ公開されることそのものは、少なくとも悪い噂や歪曲された話を阻止するのには非常に良いことです。戦争は決闘以上にしっかりとした理由がある訳ではありませんが、立会人とか仲介者の役割がもっと良く理解されていたなら、恐ろしいことにはならないに違いありません。しかし立会人たちは勇者になりたがります。国と国とが、仲が良くて親密であるから最早お互いに戦うことはないだろうと思うことから不幸がやって来ます。お分かりの様に両者の間に最も気が置けない親密さがあっても、何らかの礼儀が強制されていないと殆ど平和を維持することが出来ませんし、そこには見事な理性があります。それでも強制された礼儀が必要なのは、人は考えていることを全て言うために、考えてもいないことも言って仕舞うからです。（完）

第三章　結婚について

　結婚とは、結ばれて成立した瞬間から行うべきことであって、行われたことではありません。相手に選ばれて結婚するにしろ、自分が選んだにしろ、最初の愛は決して明らかではないのですから、知らない人と一緒に最も親密に人生を過ごさなければならないことに変わりありません。それ故に待っているのではなくて、行わなければなりません。性格だからと言って、性格で済ませて仕舞うことに私は極めて疑念を抱きました。それは妄想に過ぎませんし、不幸にもそれを観察する人や観察される人の意志で具体化します。「彼はそうした男よ」と言う不幸な意志に相手も答えます、「私はそうした男だ」。しかし、これらは決して真実ではありません。愛すべき色々な性質の種子は何時もありますし、上機嫌はあらゆる衣服で人を楽しませます。従って、もしも真の愛が最も良いものを見抜く術でないとするなら、真の愛とは何でしょうか。少なくともこの真の愛は望まれています。それは情熱による宿命についての一般的な教義を拒絶するものです。誰もが色々なしるしによって、内的生活の未来を見抜こうと努めます。そこから内的生活は外的行為に自らを委ねます。愛と嫉妬と幸福と苦悩と倦怠は、雨や霰の様に受入れられます。その様にしてあらゆる偶然に、人は自分自身の不変のものから相手への役目を与えます。人はそれを自然の事実の様に認めます。堀へ行くかどうかを自問する自転車乗りを想像して下さい。行くことを自問する奇妙な状態では、進んで行うことがありません。これは狂人の状態です。これが結婚において一般的なのは、愛の最初の感情である情動が実際に外部からやって来るからです。従ってあらゆる芸術にとって喜びは最初にあります。しかし彫刻家とか画家とか音楽家になるには単に喜びによるのではなく、仕事によるのです。そして諺でも、全ての美しいものは困難である、と良く言っています。そして夫婦においても同じであり、幸福になるには仕事があるからです。

　困難な仕事はどんなものでも誠実さを必要とします。天才には多くの条件が必要ですが、確かなのは自分自身への誓いであり、そしてそれを守ることです。発明家の様に、自分の目的を達成することを自分自身に誓います。そして賢者も又、賢者になることを自分自身に誓います。知恵とは、お皿に載せて持って来てくれるのを待っているものではありません。音楽家に直ぐになりたいと願う子供たちは嘲笑されます。ところで愛してくれる人のお陰で幸福になるのと同じ位に容易なことのためには、誓うことを決して望んだりしないものです。幸いなことに色々な結果を模範にする一般的な知恵は、幸福の最初の結婚の時にも誓いを望みます。ところが誓いは予言ではありません。誓いが意味するのは私が望み、そして行うことです。人は何かを言っても、「私は愛を約束出来ない」と言います。それは最初の感情としては本当です。従って約束してはいけないのですが、完全な愛と幸福のために約束するのであり、単に誓うことが出来るだけでなく、音楽を学ぶ時の様に誓わなければなりません。従って、そのことを良く理解しなければなりませんが、自分の誓いに縛られていると信じないことです。寧ろまさに運命が誓いに縛られて馴らされているのです。

　それ故に習慣があらゆる誓いに代わって望む様に、そして誓う人も罠の適切な見方によって自分自身に要求する様に、外部の強制と証拠があるとするなら、色々な事件に対して自分自身を援助するものとして外部との結び付きを考えなければなりません。誓いは決して自由意志を束縛し

ません。その反対に、自由意志を使用せよと強く命じます。というのも、何かであることは決して誓いませんし、何かをするとか望むことを誓うからです。どんな誓いも情熱に反対します。それ故に結婚の披露も、定められた親類との新しい結び付きも結婚に伴う友好も、必要な仕事を完遂する助けのためでしかありません。更に、礼儀作法は役に立ちます。何故なら、会う人々全てに真の幸福を期待しないで、常に満足する様にならなければならないからです。その上、オーギュスト・コントが書いた以上に結婚について良く書くのは不可能です。そして私が勧めるのは、コントの『政治学』を読むことです。

　若い人々には極めて軽率にも無視されている礼儀の強制を、私は少なくとも支持します。情熱と共に無邪気に生活する時、そして大変に親密な隣人によって気分の最小の動きも良いことばかり期待しているのを感じる状態にある時は、最初の動きが屢々不幸の元になります。立派な家庭でさえも好意が恋愛であることを確認した時、どんなに小さな口論も容易に喧嘩腰の声になるのを私は見ました。愛が多くを許すのも本当ですが、愛が多くを意味付けて余りに見抜くことも本当ですから、それを信用してはなりません。余りに家長が質朴な家庭生活は何かを治すことが出来ますし、取分け子供が存在すれば治すことが出来ます。それはより一層若い時から自然と周りの大きな声や活発な活動を抑制しますし、節度の無い叫び声によって直ぐに口論を終わりにしますので、適切な教訓を与えます。神は子沢山の家族を祝福する、という諺がそこから来ました。（完）

第四章　礼拝について

　礼拝が精神の神秘的力を興奮させる対象とか効果と見做すのを信じることから、私は十分に遠ざかります。それどころか礼拝の規則は、諸活動を規制してあらゆる情熱と情動を鎮めます。祈る時の姿勢はまさしく活発な活動が許されることがなく、肺は最良に解放され、心臓もこの方法で解放されます。祈りの決まり文句は、文字それ自体に注意しながら、本来は気が散らない様にするためでもあります。教会が最も単純な変化にも非常に恐れることに私は決して驚きません。諸原因から明白な様に長年の経験から分からせてくれますが、魂の平安は躊躇せずに唇から祈りの言葉を言うのを前提としていて、言うためにはこの方法しかないのが是非とも必要です。それから両手も同時に塞がっているロザリオの祈りでの数珠の習慣は、恐らく精神医学が色々な心配と苦痛、そしてうろつき回る想像力の術策に対して最良のものを見出したのです。困難な時において、そして待たねばならない時において、最も良いことは考えないことです。礼拝には苛々したり疑念を抱くあの忠告の様なものは一切無く、巧妙にそこへ導いてくれます。それと同時に神に忠告とか援助をお願いする代わりに、自分の苦痛を神に与える様に全てが調整されます。まさしく苦痛のことを考えることは止めます。それで儀式に従って行われる祈りには、直ぐに苦痛を軽減させないものは一つもありません。全くの身体的で機械的なこの効果は、あの世や最後の正義の約束よりもまさにもっと力強く、寧ろそれらの約束は何故かを知らずに慰められる人々にとっては口実の様に私には思えます。モンテスキューが言う様に、誰も一時間の読書で慰められたくありません。従ってロザリオの祈りには、より多くの術策が隠されています。

　宗教的な事物を観察することは、希望さえも超えた私たちの根源を吟味します。何故なら、今まで言って来たことに倣えば、最も辛い精神の苦痛は些細な原因で回復するに違いなく、最悪なことも私たちに余儀なくさせる精神の間違った判断によって、力がないに過ぎないからです。ところが本当の諸原因を十分に知らない限り、誰もがそんな証拠に反論します。幸いなことに突然の改宗には沢山の事例がありますし、それが証明するのは、今まで言って来た様に情熱は大変に脆くて不安定なもので、適度な体操が一瞬で魂をきれいに出来ることです。しかし、人間の本質に関する正確な認識がなければ、これらの事実が何時も諸宗教の証拠を十分に提供していることを私は認めます。何故なら、それらの諸原因を理解しない人々にとって、精神の回復は奇跡であるからです。その様にして実践は信仰に通じます。そして、やってみて上手く行かない人々にも通じます。彼らは全く単純に実践しないで何時も信仰に専念しているからやってみて失敗するのである、と私は思い切って言います。ここにキリスト教の謙遜の意味が把握されますし、その真実は次のとおりです。つまり私たちの内的悲劇は、動物たちの活動の様に、思想の無いメカニズムに過ぎません。或る聴罪司祭は、最早信仰を無くしていることを告白した生半可な学識を持った告解者に言いました、「あなたは信仰について何を知っているのですか」。私がこの答えを想像したのか、あるいは人から聞いたのかどうか分かりません。非常に博識のある太った教会参事会員に私がそのことを話した処、彼は私が信仰を十分に分かっていると思うとの様子を示しました。そこからイエズス会士とそれに対立したジャンセニストの論争が、かなり良く理解出来ることに注意して下さい。ジャンセニストは思考するのを望んだのです。

　余りに早く嘲笑される教義は、自由な夢想を鎮めることよりも寧ろ情熱の対象を考えるため

にやって来る、神秘主義者たちに対しての忍耐強い努力である様にも私には思えます。あらゆる経験においては、その人間の本質が主題です。それらの結果は、自然宗教が国家の平凡な哲学でないとしても、必ず物神崇拝者の妄想の一種に導ける諸原因から大変遠くにあり、大変驚くべきことです。というのも、神々は私たちの一番近くにいるからです。人は神を見ますし、聞きますし、触れもします。誰もが神秘主義者の狂気を知っていますが、もしも彼らの集会が更にもっと多くの人数になれば、何処まで行くことになるのか殆ど想像出来ません。そして私は、正義と権利と祖国に対する規則のない熱狂において教義の無い宗教を見分けました。あらゆる宗教の中で最も若くて未熟なこの宗教は、儀式と神学者が余りに不足しています。これらの全ての行き過ぎに対して、神学者が揃った教会は抑制力を発揮します。古代の神々は、恋愛や怒りや眠りや夢の中に、要するに肉体のあらゆる変化の中に感じられるものでしたが、情熱は勢い良く流れるばかりでした。礼拝は常に礼儀を欠いたばかりでなく、取分け神学が単に想像力のものであったために、神は司教の仕事を台無しにしました。その代わりに、教会は奇跡を否定しませんけれども、教会のどんな努力も奇跡に反対します。色々な儀式で余りに強くなった教会が、現在では奇跡を信用しないのは常に極めて明白です。何も破壊しない人々の集まりを維持することは、既にかなり美しいものです。（完）

　椅子には色々あって、落ち着かないで立ち上がって仕舞う椅子や、怠け者の椅子や、じっと静かにしていたり仕事をしたりするための椅子があることを誰もが良く知っています。私たちの習慣は、私たち以上に事物に依存しています。というのも、腕を規定するのは道具の柄であるからです。数学者は方程式が無ければ何も出来ませんし、対象について常に規制された思想を考慮に入れなければなりません。しかし人間の手の対象は、取分け大混乱の思想を順序や左右対称や様々な類似や繰返しによって屢々引き出します。その様にして思想は本来の機能に還元されますし、それは意識して見分けることであり、計算することです。芸術家はもう一つの自然を描きますし、そこには人間の力がはっきりと表れます。従って、寺院は私たちに神のことを語ろうとしているのであると私は決して言いません。寧ろ私がそこに見るのは、幾何学によって悪魔を祓った森の中に常に存在する異教の神々に反抗する努力です。それで神聖な場所である寺院での活動は、神を恐れることよりも寧ろ求めるためのものになります。それでも夢想は、いずれにせよ常に人間の土地や人間の秩序に連れ戻されます。神は人間になった、ということがはっきりと明示されます。数々の絵画は精神を同じ道へ連れ戻します。取分け人間の希望を描くのに大変適している聖母の絵画に連れ戻しますが、外部には如何なる神もおりません。きちんと整理されたこの知恵と、外部の怪物との対照によってその効果はもっと大きくなります。従って安心と解放を実感せずに教会という場所に這入ることは考えられません。勿論、それと同時に大いなる礼儀が課せられます。取分け注意すべきことは、反響となって送られて来るあらゆる活動や声の騒音です。それらは視線と同時に石畳から円天井にはね返り、元々臆病な人をもっと臆病にします。そこでは即興的に創ることが出来るものは何もありません。

　ご存知の様に、ミサの最初は最後の晩餐を記念する供宴でした。従って、突発的な狂人たちに対して、そして人々が集まる時に何時も再び起こる危険な興奮に対してさえも、それらの会話や物語を如何にして規制しなければならないのかを人は見抜きます。これらの準備に人が言う程の嘘があると私は思いませんが、単に力が決してものを言わないので、それだけ益々必要なのが儀式への心配りです。その様にして少しずつ暗誦した話から、純然たる礼儀の動作が生まれて来ます。ここには教会の貧しさがあり、富は無視されます。というのも、富も力も雄弁も同列のものであるからです。しかし情熱に対しては、沈黙と祈りによる説得しかありません。賛美歌も情熱にとっては沈黙でしかありません。教会劇もそれ故に少なくとも節度と敬意を表す傾向があります。それは極めて賢明です。何故なら、考える動物は非常に狡猾で、知恵の厳しい教えに情熱の何らかの快楽を見付けるからです。その意味で説教は既に宗教と無関係のものです。大建築物の方がもっと上手に語ります。大建築物の中では全ての信者たちが罪に躓くことが決してない様に、ゆっくりとした全ての礼儀や行列や尊厳のあるこの秩序や、色々な動作を規制する衣服に注意するのを考慮して下さい。

　私が子供だった頃、若い司教の説教の後では悪魔や死者が大変に怖かったとを思い出します。その様にして私は一つの悪で、もう一つの悪に倒れそうでしたが、本能による一種の礼節によって、そういうものを全て放擲しました。しかし、あの説教師は自分の仕事を少しも分かっていませんでした。死者の光景によって集まった人々を絶望の中に突き落とす位に容易なことはあり

ません。これはあらゆる悪魔を呼び起こす様なことです。しかし儀式では、決してそんなことをしません。全く反対に、悲しみは服を着せられてそっと仕込まれ、礼儀正しい形式の中で死者たちに別れを告げます。陰鬱な歌は苦痛を倍にすると言う人々は、もしも会葬者たちが自然の情に行くに任せていたなら、死者たちに続いて叫び声や痙攣のことを良く考えるに違いないでしょう。彼らは又、規律の無い雄弁家として、その様な状況で間違いの無い音調で話すのを見出す困難のことを考えるに違いないでしょう。規律ある雄弁家は歌声や決まり文句を使うのを選びます。しかし、聖歌隊員はもっと上手に語ります。（完）

第六章　音楽について

今度は音楽について論じなければなりません。というのも、どんな儀式にも音楽があるのに加えて、音楽そのものが儀式であり礼儀でもある様に思えるからです。従って、音楽は至る所から生まれます。この大河には沢山の源泉があります。音楽が何処から来るのかは探究しないで、兎に角、音楽は何であるのかを語りましょう。歩くとか楔を打つとかロープを引っ張るとかする時は、皆と一緒に何らかの合図がないと決して上手くいかないことはあり得ますし、「えいっ」と言う自然な掛け声で樵も仕事を行わなければなりませんでした。一人が相手に知らせるこの合図には、二つの音が必要です。力を入れることと、休息することを決めたリズムです。その様にして時間はリズムによって区切られて数えられることになります。そこから一つのリズム音と一緒になった舞踊が音楽の一部になります。又、そこから人々と一緒に自ら動くことの喜びと、二、三、四又は六の様なリズムの数字を知る喜びがあり、そのリズムに倣って終われば再開することもあります。これらの練習された精神は、この訓練で極めて遠くまで行ける様になり、それらの合図が殆どぼんやりして分からなくなっても、一連の数字で知ることが出来ます。そこには音楽の一部しかありませんが、つまらないことではありません。音楽の無い心の人は大変に不幸であり、沈黙を測ったり自ら時間の正確な合図を思い出す術も知らない人であると理解して下さい。音楽の楽しみの一つは、色々な音を組合わせることと、そのリズムに対して上辺では持続させたり休んだりすることがありますが、それは短い不安によって、より一層敏感になるためでもあります。この理屈で行くと音楽の効果は常に思想に連れ戻すことですが、その楽しみを待つことを許さないのは、音楽が決して待ってくれないからです。

音楽の実体は、太鼓とかカスタネットの音に帰することが出来ますが、人間の叫び声が自然とそれに付け加わります。ところが声は声自体で感動的ですが、余りに感動し過ぎです。そしてお分かりの様に、儀式の声は常に規則正しくて歌い易いものです。音楽は如何に詩に触れているのかが分かります。音楽においては情動の対象が空虚で、夢想がより一層自由である処に詩との相違があります。しかし如何にして声を調整するのかを理解しなければなりません。ここで両者の源泉は混合します。どんなに小さな文章の頁を開いても歌の様なものを聴くことであり、この歌は規則が無い訳ではありません。鋭い声は自然に活発な情動を意味し、その反対に低い声は或る安心と自己抑制を意味します。それ故に情動が鎮まると低音域に戻り、結局は自然の声に落ち着くのが自然です。音の強弱も同一の規則に従います。しかし音の強さが鋭さを増すと情熱をかなり表し、その反対ですと寧ろ意志とか忠告を表します。しかし、雄弁家の筋肉の働きには或る補償の規則があって、その規則に従って休息する人々は、全ての筋肉が休息する前に、今度は彼らの番として行動しなければならないとも私は思いたいのです。そこからやって来るのは、単に音によって文章の完成があることであり、その開始が約束されるものでもあります。この主題は音楽家たちによる多くの方法で発展されました。そして人間の耳は、色々な音への働きが最早殆ど声の働きに似ないで、最早人間の顔付きを持たない危険がある時に、取分けそのことを要求するのです。

自然に従えば、叫びは強弱や高さを増したり減らしたりします。芸術の最も単純な効果は、叫びそのものを同一に保ち変化を無くして終わらせることですが、決して容易ではありません。だ

がその上更に、その効果は最初の驚きを直ぐに落着かせて、次に続くまでになるものへの注意力だけが残ります。そして、大して疲れない叫び声しか続けられないので、それらの声はそのものによって注意力が抑制されて節度ある情動を示します。そこに混入する不純物とは常に小さな変化のものです。不変で継続した声による騒音はそれ故に自然と純粋な音になります。そして少しも疲れさせない声はそれ故に群衆からの一番良く聞こえる声になりますし、その純粋な声は従って音楽の要素であり、それは平静が諸情熱に対して美しい様に美しいのです。諸情熱は、音の中に残されている小さな変化によって、あるいは芸術が常にそれらの変化を規定しながら、節度を持って新たに設けることによって何時も十分に、今もなおあり続けるものになります。以上のことで、如何にして歌が声を模倣するのか、それは一連のはっきりとしていて不変の無感覚な音程を、段階的に所々の文節の代わりに用いているのかが分かります。これからは自らが歌うのを聴く様なものです。そして、合唱して歌う人々も又、自らの声に倣う様に最小の努力で力強い響きになるのを楽しみますし、この規律正しい力を楽しんで全ての人々が更に強まる響きを求めます。そして、空気振動の周波数間にある一定の関係が、こう言って良ければ、他のものよりも良い収穫を確保しているのは誰もが十分に分かっています。その点についてはヘルムホルツ（1）を読んで下さい。それは物理学者にも関係しているからです。

　公的であろうと私的であろうと、あるいは独りであろうと、儀式に関するものに特に留意しましょう。確かに音楽は人を興奮させたがりますし、そのことを誰もが良く知っています。しかし、常にそこに混合するのは知的好奇心です。それは多少なりとも直ぐに注意力の方向を変えますが、音楽家が驚嘆や模倣や変化や、ついには私たちに認める様に仕向けるものの全てを一層楽しむことに倣って方向を変えます。そして、それが音楽を生みますし、恍惚までも占める対象になります。しかし、この喜びは絶えず規則正しい動きや儀式の恩恵を刻一刻と私たちに感じさせてくれる、思い起こすことと回復することとを比較すれば大したものではありません。魔術師は、それらを直ぐに落ち着かせるためにしか人を興奮させない様に思えます。音楽家は、マッサージ師の様に回復させるためにしか苦痛を感じさせません。そしてマッサージ師の様に触れる場所を変えて、音楽家は相手の興奮の全体系を踏破します。そして全ての興奮が規律あるものになるのを証明して、私たちを希望の中で慰めてもくれます。しかし即興演奏のことは何を言えば良いのでしょうか。そこでの音楽家は如何なる眩暈も無く、興奮する術を自分自身で調整します。ここでは平衡は厳格でなく時間次第になります。継続して行く作品である音楽家の仕事とは、緩急と英雄的なものと真剣さと気楽さの組合わせを、何時もの様に正常に連れ戻すことにあります。しかし、音楽が最早一つの方法でしかない思索によって詳細にまで成功すれば、その時は数限りない群衆が彼の音楽を歌います。そして彼は、既にその作品を聴いた人々と共に賞賛するのを競うその作品固有の美に仲間入りをします。このことがどんな作品においても栄光を完成させるのです。（完）

（1）ヘルムホルツ（一八二一～九四）は、ドイツの物理学者・生理学者である。

第七章　演劇について

　演劇はミサと同じです。その効果を十分に感じるためには、時々はそこに足を運ばなければなりません。演劇へ行く人は舞台上の或る種の無造作に腹を立てるでしょうし、或る時は退屈するでしょうし、又或る時は余りに強く感動するでしょう。名観客になるのも多分、名優になるのと同じ位の時間が必要です。何故なら楽しんで泣くことを覚えなければならないからです。それは余りに強烈に驚くことがあってはならず、多くの些細なことにも好奇心を持ち、苦しくなるまで心を締め付けた儘でいないことです。演劇の楽しみは集団の楽しみの一つであることを忘れてはなりません。観客席は観客を円形に広げているが、単に舞台で遮られているので、それらの配置そのものが楽しみであることを十分に忍ばせます。それはお互いが折り重なる様に密集して見える小さなサロンです。そして公然と生活するのは有利であり、礼儀は立会人たちが多すぎることは決してありません。観客として物腰や動作が、各劇場の中で規定されているのも本当です。そして喜劇俳優たちは、取分け一般的な作品とか余りに有名な作品においては、礼儀や服装を何時も学習させられている様なもので、まさに美であると私は言いたいし、それは誰にでも役に立つものであると言いたいのです。その様にして皆が喜劇を上演します。しかし、そこで単に嘘を演じていると理解してはなりません。それらは端から端まで真実の感情が送り返されているのですが、合成されたり抑制されたものです。そして、ついには楽しいものになるのは、美の様式は熱狂的な情動から解放されていて、生まれつきの自由の中では、どんな小さな不安からも苦痛を生むからです。演劇には決して臆病が無いことを、私が観客席で理解していることも付け加えて言いましょう。何故なら、沈黙しているのは何時も容易ですし、舞台が公然と認められた注意力の主要な処を引寄せているからです。

　演劇には強烈な感動があり、取分け伝染によっているのは大変に正しく、それは喝采や口笛や徒党での戦闘場面で見せてくれる様に熱狂まで行くことが出来ます。そして私がここに認めるのは、集会における常に恐るべき狂信への陶酔です。従って、取分け音楽が無ければ演劇には純化された情動を、向かい合った舞台の方へ誰もが送るために、厳格に規定された詩を必要としています。殆ど何時も特殊なことに苛々して内気な演劇狂の人々がおります。従って彼らは自分たちの情動に目覚めたり維持するために演劇へ行くのではなくて、寧ろ情動を鎮めるためです。誰もが喜びから感動を見出しますし、悲しみからも感動を見出すと簡単に言いますが、言葉では何とでも言えます。しかし嬉しいのは開放感です。少なくとも良く理解しなければならないことは、不安は最も悪い病であること、そして英知の無い人々は不安の絶頂に無い時でさえも、何となく不安に取り憑かれて何処も余りに体調が悪く、直ぐにでも自分の情熱に連れ戻す活発な情動が何よりも恐いことです。この病は退屈することがありません。いずれにしても演劇はこの様な不幸な者たちに彼らの状態を変えて直ぐに回復させて、一瞬の自由を与える情動を彼らに齎します。そして連続して展開する舞台が若返らせて元気にしてくれます。そこには観劇と読書との違いがあります。何故なら読書は中断することが可能ですが、劇はどんどん進んで行くからです。少なくとも各場面は、注意を一瞬でも外さない様にもう一つの場面を予告していなければなりません。勿論、これはもっと明瞭な音楽の様なものです。興味は、情動から情動を、そして解放から解放を導くためにしかありません。同様に俳優たちの芸も遠くから場面の自然さに勝ちます。

そして最終的な結末は殆ど気にしていません。一種の蝋燭の消し方でしかありません。真の結末は全ての詩句の終わりにあります。

　決して事実でないとしても演劇では泣き過ぎることも出来ますし、従って笑い過ぎることも出来ます。というのも笑いは模倣だけで広がりますし、原因が無くても広がるからです。しかし常連客はもっと自由な笑いを演劇に発見します。後を聞きたいので控え目にすることもあります。そして喜劇が笑いによって情熱を直すのは絶対に真実ですが、お手本や教訓によることは一切ありません。だが、芝居には決して吝嗇家がおりませんから、滑稽によって吝嗇でなくなることはありません。しかし、あらゆる激昂も不安も心配も笑いによって直ります。そして沢山笑わせることは難しくありません。というのも観客たちが皆手伝ってくれるからです。しかし難しいのは寧ろ笑ったことを承諾させることです。より一層もっと教養のある人物は、笑いの原因をそんなにも見ないでしょう。サーカスの笑劇にもっと良く笑うのは、観客たちが円形になって閉じ込められているためです。サーカスの道化者たちに芸術が無いことを意味するのではありません。私はそこに最も奥深い喜劇的芸術を屢々発見しました。彼らは何でもやりますが、顔に白粉を塗っているので、観客は決して自分に似た姿を認めることが出来ないのです。モリエールも又、この秘密を知っていました。（完）

第八章　狂信について

　儀式がなければ、狂信も決してありません。つまりそれは宗教が、宗教的狂信のある儀式的なものである所以です。それは宗教への寛容は極めて容易であるということです。只、その寛容は的を射ていません。自分の持っている意見とは別の意見を容認することは非常に容易です。だがその上更に狂信者は、どんな意見にも決して捕らわれません。彼は儀式の敵である大騒ぎしか罰し様としません。もしも宗教が、私の言ったもので正しいとするなら、懐疑も反論も殆ど関係ないものになります。儀式に逆らう冒瀆者が真の罪悪者になります。演劇にも同様に狂信者が見られますし、取分け音楽にも見られます。それは秩序にとっての不幸であり、恐らく罰でもあります。

　群衆においては、感情の伝染を十分に説明する活動としての模倣が行使されます。一人が逃げ出すと、それが走ることの誘引となって、多くの人々が後を追うことになります。群衆が逃げ出すと、最も賢明な者でさえも十分に明らかな肉体的動機によって、じっとして居残っていられません。そして、叫ぶことが叫ぶ動機になり、泣くことが泣く動機になり、憎むことが憎む動機になる様に、走ることが更に走る動機になります。この模倣は、全員が規制されて既に同意されている集団において、肉体が出発するのは自由であるから、硬直したり快くなることなく、抑えられた活動に対して更にもっと敏感に影響され易くなります。演劇であの様な恐慌があるのもそこに由来します。各人が苦労して働いている工場においては、恐怖はそんなにも早くやって来ないでしょうし、もっと先見の明があるでしょう。その上、突然の死には単に皆の注意がそちらへ勢い良く向くことによって、恐慌と同じ活動があるでしょう。大騒ぎによるどんな効果も、各人の喜びを全ての他者たちの喜びに結び付ける隠された規律の結果です。そして、その秩序の大きな不幸は、例え用心からでも全ての武器を捨てて仕舞ったことです。勿論、これらの全ての反論には如何なる情熱も無く、その原因が分かるや否や何ものも残りません。私たちは狂信者の陰鬱な瞑想からは未だ遠いのです。

　如何にして群衆の狂信が独りの人間の裡に示されるのか、を理解しなければなりません。舞踊家即ち回転する人の激しい動きから導くことが出来るのは、リズムを求めたりテーマを取戻したりするのに有益な注意力を眠らせるために、余りに単調な一種の歌や音楽によって他の者たちは自ら動くことなく、それらの動きを注視して助けたりするのです。この策略によって狂信的な舞踊家は、少しも踊らない群衆を模倣します。自発的で誇らしげでその動きによって維持されて増大して、無感覚になるまで進むこの種の狂気が崇拝されることに私は驚きます。これは熱狂者たちの状態であり、少なくとも原因も無く口実も無いのが驚きです。しかし、愛している女性を殺す方がもっと道理に叶っているのでしょうか。良く考えるなら、情熱には情熱そのもの以外に決して原因は無く、情熱に所謂理由があることとは無知な人のためにあるのです。私が怖いのは怖がっているからです。私が愛するのも愛しているからです。私が殴るのも殴っているからで、彼が踊るのも踊っているからです。しかし、ここには既に熟考された思想は無く、思想のあの眩暈も無く、暴力への呼びかけも無く、しるしが熟考される宿命的な命令もありません。そして、この狂った舞踊によって疲労が回復します。恐らくそれは魂の激怒には素朴な薬になりますが、肉体の激怒には思想がありません。

しかしながら踊る方法は幾つもあります。平静にしていたいとしても、やるべき仕事が無かったり喉に埃が入ったりすれば、熱狂的になればなる程、自然に沢山踊ることになります。もしも思想がその時に想像上であっても、何らかの悪評の対象を見付けなければ、儀式は独りの人間の裡で乱します。そこから儀式の活動によって齎されるのは、我慢のならない憎悪です。そして、すっかり準備の出来た外部の力からの感情に、大変に強い羞恥とより一層大きな悪評への恐れが一緒になります。そこには孤独における自己への寛容と、自分自身の恐怖と野心が悪の混合を生む瞑想の最初の活動があります。それらのしるしや前兆は、そこで結合します。私たちの不幸なこととは、見識の無い曖昧な抵抗は宿命論的観念が常に確信の無い懐疑によって吟味し、結局のところ情熱が全てを終わりにする様にこの情熱にけりを付ける処まで、それらのしるしや前兆を増大させることです。この種の罪悪には殆ど何時も共犯者も腹心者もおりません。（完）

第九章　詩と散文について

　私は、詩人たちの詩を良く読む術を知りません。私は韻や繰返しや穴埋めを偶然と見過ぎて仕舞います。読んで貰う方がそれらをより良く理解しました。私はその時、待ち望んでいないこの動きによって捕らえられていました。無駄な繰返しも忘れましたし、それを思考する時間さえもありませんでした。韻はその度に、私が抱く小さな恐れによって何時も私を楽しませてくれました。何故なら耳に入る詩句が申し分無く終わるのは何時も不可能と私には思えたからです。待ち望まないこの動きは即興の観念を与えます。私は、その様にして私を旅へ連れ出す詩句しか知りませんでした。ここには前置きがありませんし、用心もありません。私は旅立つのを感じます。最初の言葉にさえも私は、さよならと言います。そしてリズムによって私はやって来るものが分かります。それは書くことの勧めであり、最良の詩はそれに順応します。しかしもっと詳細に調べてみましょう。詩には何時も戦っている二つのものがあります。私が常に感じなければならない韻の反復を伴う規則正しいリズムがあります。リズムに逆らう講演もありますし、それは長い間ではありませんが、屢々リズムを私に隠しています。その技術は音楽家のものと同じですが、もっと近づき易いものです。従って私のイマージュを選択させないという点で暴君的であればある程、そこから慰められることがありません。しかし音楽の様に、所々で休息している時の様に和解が見出されます。何故ならリズムを付けた文章と台詞の文章が一致して終わる瞬間がやって来るからです。言葉の単純さである自然さと、意味の豊富さが奇跡を生む時でもあります。落下を思わせる様な軽業師の様に、詩人が前もって何らかの苦労をしたこともまさに悪いことではありません。しかし、決して何時も止まることのない船での旅をしている様なものです。その様に和解を理解しなければなりません。この条件が無いなら、注意を傾けるリズムと、リズムを逸らせる運動を調整する力は、決して理解されないに違いありません。

　雄弁も又一種の詩です。そこに音楽的な何かが容易に発見されます。つまり文章の拍子と釣合いと響きの補整です。要するに予告され期待されて、言葉が奇跡で一杯になって来て完了するものです。しかし、これらの法則は隠されています。霊感を用いると雄弁家は屢々失敗します。時間が余って仕舞って、使う必要性がその儘残り、冷酷な動きと不安と苛々した疲労感が直ちに聴衆に広がります。勿論ここでも又、読むのではなくて聞かなければなりません。そうでないと、無駄な繰返しや冗漫な処によって不快感を与えるでしょうが、それでもそれらは必要なのです。取分け雄弁家が論証する時は必要です。読む時には、集会の抑えられた動きが取分け不足します。書斎の沈黙と二千人の沈黙とでは大変な違いがあります。結局のところソクラテスは大変に正しいことを言いました、「あなたがあなたの話の終わりに達すると、私は初めの方を忘れて仕舞ったよ」。従って全ての詭弁は雄弁です。そして全ての情熱は他人に対しても、自分の情熱そのものに対しても雄弁です。その確信は時の進行と、予告された証明の出現によって強くなります。それ故に雄弁は不幸を予告したり、過去の不幸を再び取上げるのに特に適しています。この人物は、不幸な人が犯罪を犯すものとして結論付けます。完璧な不幸を再び取上げることは最悪の旅です。何故なら、そこでは宿命論者の観念が全ての証拠を手に入れるからです。

　散文は私たちを解放します。散文は詩では無く、雄弁でも無く、音楽でもありません。歩みを止めたり後戻りしたり突然の閃きを感じる様に、散文は読み直したり熟考したりすることを命じ

ます。散文は時間から解放されています。雄弁の一方法でしかない形式的な論拠からも解放されています。真の散文は私を決して急がせません。従って、決して無駄な繰返しがありません。従って勿論、そのために読んで貰うことは私たちには我慢がならないのです。詩は、人々が言葉を聞いていた時代に、固定されていた自然の儘の言葉でした。しかし今の私たちは言葉を目で見ます。喋りながら低い声で読むことがだんだんと少なくなります。人間は殆ど変わらないと私は思います。しかしながら、それでもそこには重要な一つの進歩があります。というのも、目がこの知的対象を一読するからです。目は、画家の様に知的対象の核心を選択し、全体をそこに還元します。目は再構成し、目そのものを強調し、眺望を選択し、あらゆる頂点の上に同一の太陽を探し求めます。その様にして歩く散歩者は、取分け若くて強い者は余りに速く進みます。良く見るためには、跛を引くしかありません。この様にして跛になった散文は正義であるかの様に進みます。（完）

第十章　公の力

　権力の術策とそれらの強制された儀式を説明するには、何冊もの本が必要です。しかし読者よ、この旅も終わりになります。服従の義務にあなたを連れ戻し、私自身を私に連れ戻すために、僅かにたったの二頁が残っているだけです。これは家に帰る様なものです。尊敬するのを知っている人は多くいますが、服従することを知っている人は少ないです。為政者の選択や実際の管理や担保について言うべきことは沢山あります。しかし、オーギュスト・コントの言葉に倣えば、進歩は先在する秩序を前提としますから、頭を回転して何かを完成するには服従することから始めなければなりません。あなたは精神を冷静に考察して下さい。そして更に、正義のためのどんな不服従も、それらの濫用を継続させている以上に隠されている真実についても考察して下さい。それは文字通りに服従することが、不正の権力を支配して罰する一つの方法です。一夜を大目に見るのは暴君の見方です。真の暴政とは〈信望〉のことです。暴君は愛されるのを望みますし、あるいは恐れられるのを望みます。暴君は許すのが好きです。寛大は、尊厳の最後の方法です。しかし厳格な服従によって私は、豪華なマントを剥ぎ取ります。反論することは大きな阿諛でもあります。暴君に我が家を開放することにもなります。だが、この演技は何処へ導くのでしょうか。先ずは、大変に強いものに違いない暴君の野心から私を守ってくれます。何故なら私は長くて時々はうっとりする夢想を、彼に許さなければならなかったからであるのを認めます。取分け私としては、暴君を意地悪な愚か者にしている色々な喜びを取り上げたいのです。私が望むのは全く簡潔な実務家です。自分の仕事を簡単にさっさと片付けて、更に音楽とか読書とか旅行とか何でも構わないのですが、下品でないものを愛する人です。

　恐らく軍事力が無いとしても、阿諛と喝采の無い権力を人は今まで見たことが決してありませんでした。その様なものである限り、軍事力は良く支配し命令します。評価されることを自ら感じます。人々が感嘆して見られていると思う程、愚かになります。従って、力によって判断するのは精神の最大の罪悪であり、政治的過失でもあります。英知は肉体から精神を引出すことにありますし、政治的英知は服従から称賛を引出すことにあります。シーザーにとっての定められた銀貨の寓話よりも美しい寓話は決してありません。それ故にシーザーに返さなければなりません。しかし私は別の言葉で言います、「権力には服従を、そして少なくとも精神には称賛を」。野心家は最早要求しない、と考える者は野心家を誤って認識しています。教会は多分精神への敬意を、つまりその言葉に相応しい唯一の敬意を権力者たちから拒絶する術を知っていました。しかし、この精神力は余りに頼りないものです。 その精神力を台無しにした力の混じり合った合金を、教会史のあらゆる処で見ることが出来ます。教会参事会員は美味しい夕食を食べ過ぎたのです。そしてシェークスピア作品のシーザーは非常に上手く言いました、「あんなに痩せた人々は嫌いである」。精神の称賛が、愛想が良くて普段は少しも要求しない支配者たちに沢山の権力を与えているのは、恐らく民主主義制度の病です。市民は、信頼が無ければ何ものでもないのを認める人に、率直に信頼を与えます。力はその次にしかやって来ませんし、喝采は更にその次です。それは本当に神政政治の再来です。というのも神々は一つならずの形を持っているからです。精神と世俗のこの混合は、全ての制度を悪化させます。その代わりに精神の社会が如何なる精神の服従も無ければ、一種の慇懃無礼によって全てが良くなるに違いありません。思想であ

るのを望むどんな動きに対するにせよ、忠告する力に対するにせよ、精神の姿勢は常に同一です。（おわり）

訳者あとがき

本書は、フランスの哲学者アラン（1868-1951）が、1917年に刊行した『精神と情熱とに関する八十一章』（81 Chapitres sur l'esprit et les Passions）の全訳です。電子書籍としては全二巻としました。

原書の主たる草稿は、アランが開戦直後に参戦した第一次世界大戦の戦場において、1916年春から執筆されました。1917年10月14日に復員して真っ先にエマンシパトリス社から刊行され、その後、改訂されることなく新版がカミイユ・ブロック書店からも刊行されました。更に、1941年には新たに14章と覚書が追加されて、表題も『哲学概論』に改題されてガリマール書店から刊行されましたが、テキストとしてはガリマール叢書版（1960）に所収されているものを使用しました。ここでは追加された章等は割愛され、再び原版の81章に戻って編纂されています。なお、本書を翻訳するに当たり、小林秀雄訳（創元社 1936及び東京創元社「創元ライブラリ」1997）を参照し多くの示唆を与えられましたので、申し添えます。

二〇一八年七月七日　　訳者記す

アラン
精神と情熱とに関する八十一章（下）

http://p.booklog.jp/book/122944

翻訳者 : 高村 昌憲
翻訳者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/122944

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト